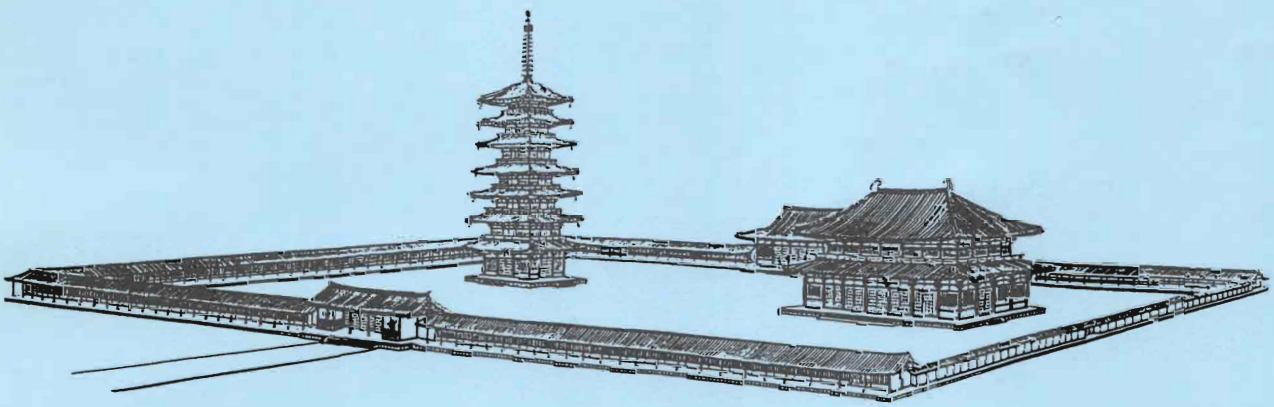
神奈川県考古学会　考古学講座

かながわの古代寺院



主旨説明 講座 かながわの古代寺院	岡本孝之	慶応義塾大学
川崎市影向寺址	河合英夫	玉川文化財研究所
横須賀市宗元寺跡	竹沢嘉範	赤堀直忠博士文化財資料館
小田原市千代寺院跡	滝澤亮・小池聡	慶古堂考古学研究所
茅ケ崎市下寺尾寺院跡	岡本孝之	慶応義塾大学
特別講演 相模の古代寺院と瓦	河野一也	窯業史博物館
相模国分寺・国分尼寺跡	須田　誠	海老名市教育委員会
民間における仏教の受容	大坪宣雄	香雲考古学研究所

2000年3月5日

神奈川県考古学会

かながわの古代寺院の開催にあたって

神奈川県の古代寺院の研究は中山毎吉氏らの海老名市相模国分寺・国分尼寺跡、赤星直忠氏の横須賀市宗元寺跡など戦前から大きな成果をあげ、戦後は小田原市千代寺院跡（1958年）、国分寺跡（1965・66年）、茅ケ崎市下寺尾寺院跡（1978年）で学術的な発掘調査が実施された。しかし、それらの報告書は刊行までにはいたらなかった。

その後の調査で横浜市長者原遺跡、鎌倉市今小路西遺跡の郡衙跡の発見や、平塚国府説の提唱などの進展をみたが、寺院については川崎市影向寺跡の総合調査（1977～81年）と研究、前場幸治氏による千代寺院跡や国分寺瓦の研究が特筆できるだけであった。

そのような中、河野一也氏によって国分寺以前の古代寺院の分析が一挙に進み、相模国分寺跡の史跡整備事業も軌道にのり、千代寺院跡や下寺尾寺院跡、宗元寺跡の再検討が行なわれ、発掘調査も重要な発見をもたらしてきた。村落内寺院跡も各地で発見され、仏教の普及の様子も検討できるようになってきた。これまでとはちがう古代寺院の新しい景観が見えてきたのである。

そこで県内外の研究者や愛好者を一堂に集め、県内寺院跡の調査成果を踏まえて、神奈川県における豪族や国家による寺院の成立から一般村落内の寺院建設までの状況を考古学的に整理し、これからの古代史研究に役立たせたい。

神奈川県考古学会

謝辞

本講座開催にあたり、多くの機関、諸氏のご協力を得た。記して謝意をあらわしたい（敬称略・順不同）。

赤星直忠博士文化財資料館、海老名市教育委員会、大磯町郷土資料館、小田原市郷土文化館、かながわ考古学財団、川崎市市民ミュージアム、弘明寺、弘明寺跡研究会、相模の古代を考える会、下寺尾寺院跡研究会、玉川文化財研究所、茅ケ崎市文化資料館、東京都埋蔵文化財センター、日本窯業史研究所、平塚市博物館、南足柄市郷土資料館、横須賀市人文博物館、横浜市立笹下中学校

荒井秀規、市川正史、稲村　繁、大上周三、大島慎一、大塚真弘、小川裕久、及川良彦、軽部一一、河合英夫、川上久夫、河野一也、菊川英政、國平健三、小池　聡、小出義治、河野喜映、小暮慶明、境　雅仁、佐藤安平、沢村　仁、清水信行、杉山博久、前場幸治、滝澤　亮、竹沢嘉範、田尾誠敏、高杉博章、武井則道、田代昭夫、寺田兼方、冨永樹之、中三川昇、中山　豊、馬場久雄、浜田晋介、村田文夫、村山　昇

第1表　かながわの古代寺院関係年表

相模国関連記事		天皇	元号	西暦	世紀	古代寺院関連
仏教公伝		欽明		538	6Ⅱ	
		敏達			世Ⅲ	
	東国と蝦夷の国境の視察	用明		589	紀Ⅳ	
四天王寺建立	相模に封戸あり	推古		593		
憲法十七条の制定				604	7Ⅰ	
法隆寺建立	相模に封戸あり			607	世	
壬生部設置					紀	
大安寺建立	相模に封戸あり	舒明		639	Ⅱ	
大化の改新	東国へ国司派遣	皇極	大化元年	645		
大化の改新の詔	東国へ国司派遣（第二次）	孝徳	大化２年	646		石神・釜口・馬絹古墳
「評」制の施行						(7世紀中頃)
	相模国出挙稲、大安寺施入	天智	２年	663	Ⅲ	
	百済人東国配置			666		
大津京				667～672		
庚午年籍制定				670		
壬申の乱、飛鳥京		天武	１年	672		下寺尾寺院跡
	相模国の初見（高倉郡女人多産）		４年	675		(天智後半～天武)
国境・評境の確定				681～683	Ⅳ	影向寺跡
私寺建立奨励の詔			14年	685		(7世紀後半)
	相模国司の初見（御浦郡赤烏献上）	持統	６年	692		千葉地寺院跡
藤原京				694		(天武～持統)
大宝律令制定	相模国にイナゴの被害	文武	大宝１年	701	8Ⅰ	宗元寺跡
郡制施行				702	世	(持統～文武)
	相模国に疫病流行			703	紀	
平城京遷都		元明	和銅３年	710		深田寺院跡
			霊亀	715		(和銅・養老～天平)
	相模国ら高麗人、武蔵国高麗郡移住	元正		716		千代寺院跡
			養老１年	717		(霊亀～養老～天平)
			神亀年間	724		影向寺跡修復
	綾瀬市宮久保木簡など	聖武	天平５年	733	Ⅱ	(8世紀前半)
	大官大寺の封戸、高座郡にあり		天平７年	735		
	足下郡倭戸郷、法隆寺施入		10年	738		
恭仁京				740～743		
国分二寺建立詔			天平13年	741		
	鎌倉郡50戸、東大寺施入		天平19年	747		
行基没			天平感宝元年	749		
東大寺大仏殿開眼	良弁、初代東大寺別当		天平勝宝４年	752	Ⅲ	国分僧寺
			天平勝宝７年	755		(天平末～8世紀Ⅲ)
武蔵国東海道編入		光仁	宝亀２年	771		
	相模国ら兵を出羽国に発遣		宝亀６年	775		
私寺建立禁止令		桓武	延暦２年	783	Ⅳ	
平安京遷都			延暦13年	794		千代寺院跡修復
	富士山大噴火　～802		延暦19年	800		(8世紀Ⅳ～9世紀前半)
坂上田村麻呂蝦夷平定			延暦20年	801	9Ⅰ	
	相模国鎮兵を陸奥出羽に遣わす		延暦24年	805	世	下寺尾寺院跡修復
	相模国分寺火災	嵯峨	弘仁10年	819	紀	(9世紀前半)
	大住郡大領壬生直広主、税代納	仁明	承和７年	840	Ⅱ	国分寺再建
	高座郡大領壬生直黒成、税代納		承和８年	841		(弘仁10～9世紀Ⅱ)
		清和	貞観元年	859		
	富士山噴火		貞観６年	864	Ⅲ	
			貞観15年	873		国分寺補修
	大地震により相模国分寺火災	陽成	元慶２年	878	Ⅳ	(貞観15～元慶)
平将門の乱				939	10	

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳはそれぞれ第1～4四半期を示す

荒井1999などを参考に作成

次第と目次

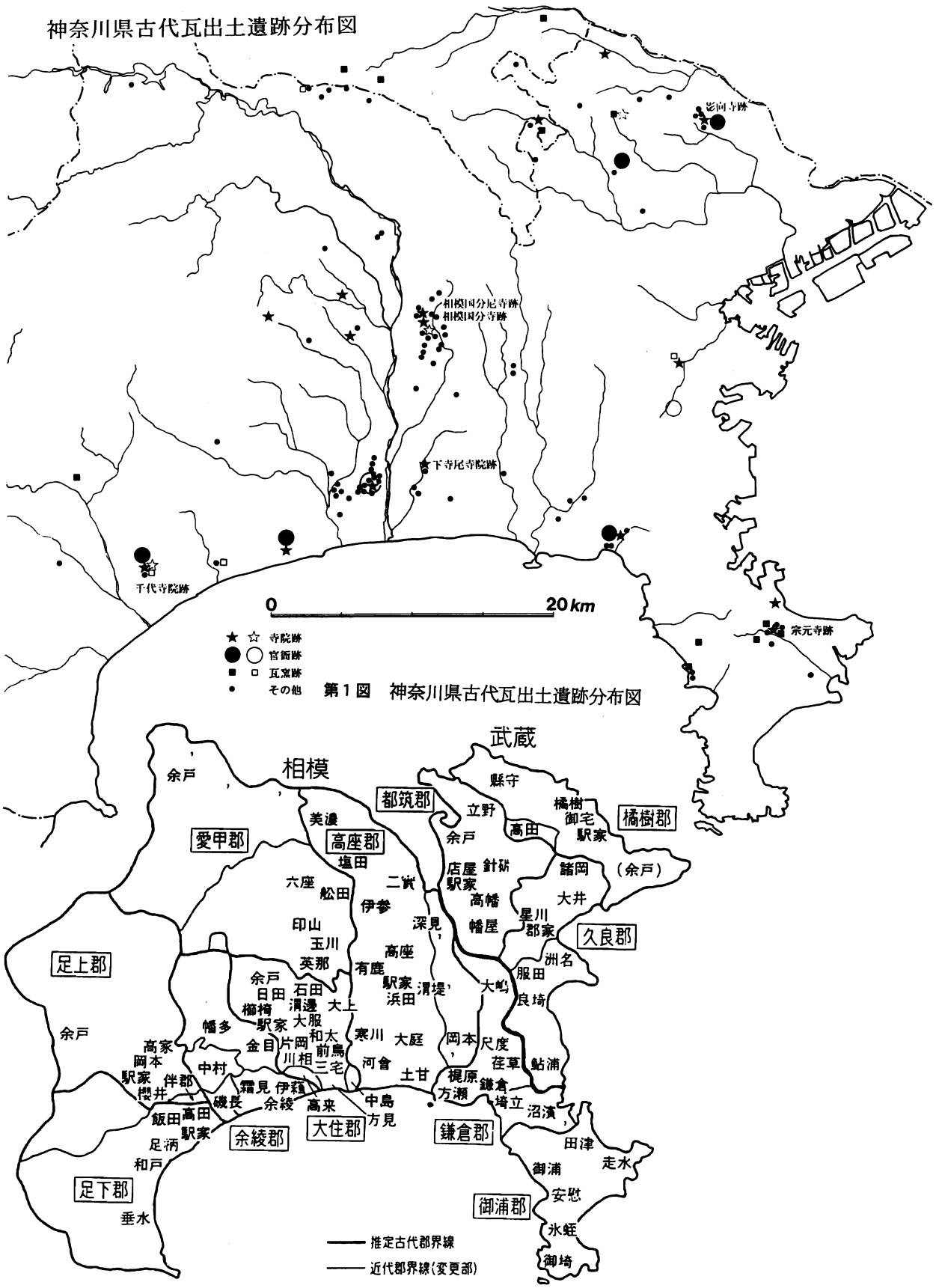
次第

9：00～	開場準備			
9：20	開場　司会	大田区立郷土博物館	加藤　緑	
9：30～	開会挨拶	神奈川県考古学会長	寺田兼方	
	講座司会	かながわ考古学財団	大上周三	
		平塚市博物館	明石　新	
9：40～10：00	主旨説明　講座　かながわの古代寺院	慶応義塾大学	岡本孝之	1
10：00～10：30	川崎市影向寺址	玉川文化財研究所	河合英夫	6
	コメント	川崎市市民ミュージアム	村田文夫	
10：40～11：10	横須賀市宗元寺跡	赤星直忠博士文化財資料館	竹沢嘉範	16
	コメント	横須賀考古学会	川上久夫	
11：20～11：50	小田原市千代寺院跡	盤古堂考古学研究所	滝沢亮・小池聡	24
	コメント	青山学院大学	清水信行	
12：00～13：00	休憩			
13：00～13：30	茅ケ崎市下寺尾寺院跡		岡本孝之	32
	コメント		河合英夫	
13：40～14：40	特別講演　相模の古代寺院と瓦	窯業史博物館	河野一也	40
14：45～15：00	休憩			
15：00～15：30	相模国分寺・国分尼寺跡	海老名市教育委員会	須田　誠	52
	コメント	神奈川県立歴史博物館	國平健三	
15：40～16：10	民間における仏教の受容－神奈川県内の村落内寺院と火葬墓－			
		吾妻考古学研究所	大坪宣雄	60
	コメント	静岡県埋蔵文化財調査研究所	冨永樹之	
16：20～16：35	まとめ	神奈川県考古学会顧問	小出義治	
16：35	閉会　司会		加藤　緑	
16：35～16：40	閉会挨拶	神奈川県考古学会副会長	伊東秀吉	
16：40～17：00	かたづけ			
17：00	退場			

目次

資　料

第１図	神奈川県古代瓦出土遺跡分布図	iv
第２図	古代相模郡郷想定図	iv
第１表	かながわの古代寺院関係年表	ii
第２表	神奈川県古代瓦出土遺跡数	5
神奈川県古代瓦出土遺跡目録	岡本孝之 編	97



第1図　神奈川県古代瓦出土遺跡分布図

第2図　古代相模郡郷想定図（大磯町史1資料編古代・中世・近世(1) 1996による）

主旨説明　講座「かながわの古代寺院」

岡本孝之

はじめに

近年の古代寺院への関心の高まりが、今回の講座を企画することになった。海老名市の相模国分寺跡の史跡整備などに関連する発掘調査はようやく軌道にのり、整備も目に見えて良くなっている。小田原市の千代寺院跡では木簡が発掘されて昨年は小田原市と神奈川地域史研究会によってシンポジウムが開催された。茅ヶ崎市下寺尾寺院跡も周辺の区画整理事業にともなう発掘調査で旧河道や大形の掘立柱建物跡が発見され貴重な成果を挙げている。川崎市影向寺跡では隣接した地点で郡衙に関連する倉庫群が発掘されており、寺院跡の再検討も必要となってきた。横須賀市宗元寺跡では発掘調査は不可能に近い状況であるが、赤星直忠先生の残された野帳や記録類、いわゆる赤星ノートと瓦などの採集資料を使って先生の後輩や教え子たちによる再検討の作業が進んでいる。また神奈川考古に発表された冨永樹之氏の研究にあるように最近の発掘調査では村落内寺院が神奈川県でも増加してきた。

ほぼ2年前に私は茅ヶ崎市の下寺尾寺院跡の、岡本勇先生が1978年に発掘した資料の整理を茅ヶ崎市の市民有志とともに行い、『下寺尾寺院跡の研究』を刊行することができた。その最終段階で宗元寺跡、鎌倉郡寺跡、千代寺院跡など神奈川県内の古代寺院の資料も見てまわり、千代寺院跡についても「千代寺院跡の研究史的復元」と題するレポートをまとめることができた。横須賀市の赤星直忠博士文化財資料館では宗元寺の再検討が進められていることを知り、一度一堂に集まって研究会を開催したいと思うようになり、2年ごしでようやく願いがかなった次第である。

1　研究のあゆみ

神奈川県では相模国府をめぐる熱い論争があり、農村集落の研究は活発であるが、古代寺院に対する研究はそれほどではなかった。大正期の中山毎吉氏と矢後駒吉氏による『相模国分寺志』や赤星先生の宗元寺の研究など戦前の研究には見るものがあったが、戦後は1951・52年の川崎市寺尾台寺院跡の発掘、1958・1960年の県と小田原市による千代寺院跡の発掘、1965～66年の国と県による相模国分寺跡の発掘、1978年の茅ヶ崎市と岡本先生による下寺尾寺院跡の発掘、1977～81年の川崎市による影向寺跡の総合調査などが実施されてきたが、武蔵国側はともかく、相模国側においては調査報告書が刊行されてこなかったことによって研究状況は低調であった。

千代では研究上の意見の対立があったとか、組織的に進められなかったこと、発掘のよい成果が得られなかったことが言われている。国分寺は奈良国立文化財研究所に運ばれ、かなりの線までの整理が進められていたが最終段階までは行けなかったという。

そんな中、厚木市の前場幸治氏は千代寺院跡と相模国分寺跡に関連して『古瓦を追って』(1980)と『国分寺古瓦拓本集』巻一相模篇(1984)などを意欲的にまとめた。これは戦前の石野瑛氏らの研究を

発展させたものであるが、千代が初期国分寺であると報告したように奈良時代以降とする従来の認識のままであった。1983年の奈良文化財研究所の調査では神奈川県の飛鳥白鳳期の寺院は、影向寺跡と宗元寺跡の２寺しか集成されていなかった。

このような状況を大きく変えたのは、今日特別講演をお願いした日本窯業史研究所の河野一也氏を中心とした研究グループの力であった。1984年に関東古瓦研究会の研究集会で相模国などの古瓦の集成が行なわれ、1988年以後、鎌倉市の鎌倉郡寺跡（河野・國平1988)、三浦郡の宗元寺跡と深田寺院跡（河野1990)、高座郡の下寺尾寺院跡（河野・山下1991)、足下郡の千代寺院跡と余綾郡の吹切遺跡（河野1993）などが検討され、国分寺以前の寺院が各郡に１寺存在することが明らかにされたのである。武蔵国側でも橘樹郡の影向寺、久良岐郡の弘明寺が知られている。

河野氏の成果を受けて茅ヶ崎市下寺尾寺院跡の再検討が小竹実佳子氏や大村浩司氏によって行なわれ、1997年の私たちの『下寺尾寺院跡の研究』に結実したのであり、今回の三浦郡宗元寺跡の再検討となり、小田原市千代寺院跡の再検討となったのである。

1994年には関東古瓦研究会で「関東の国分寺」、1997年には「関東の初期寺院」のシンポジウムが国分寺市で開かれ、埋蔵文化財研究会では「古代寺院の出現とその背景」と題する研究集会が奈良市香芝市で開かれた。

2　神奈川県の古瓦を集成して

今回の講座の資料として神奈川県内の古瓦を集成し、130遺跡をリストにあげることができ、1984年の集成と比べて２倍となり、いくつかの注目すべきことがある。

愛甲郡では1998年に『厚木市史古代編(２)』にまとめられ、寺院跡も３ケ所存在する。瓦の胎土については周辺地域と異なることが指摘され、愛甲郡内に独自の瓦窯跡の存在を予想しなければいけないようである。また広沢寺温泉の裏山に、標高300mの高い地点に瓦の出土地があり、山岳寺院跡と考えられている。大山寺、日向薬師などとの関連が興味深い考古学的対象となってくる。

大住郡の平塚国府説の弱点は寺院である。日野一郎氏の発掘された四之宮下ノ郷寺院跡は平安時代あるいは中世の寺院ではないかと言われているが、近年の出土資料の中にはからさわ瓦窯系統のものも認められ、前取神社に展示されている瓦の中に下寺尾型の丸瓦があり再検討を必要としている。瓦の出土遺跡は多く国府域以外にも多数の出土地点があり、金目川下流域にも分布する。

余綾郡の大磯の祇園坂（吹切）遺跡でも最近礎石が再発見できそうであるとの情報があった。二宮町の川匂神社には「網石」という神宝があると大場磐雄氏は『楽石雑筆』に書き残し、窯跡採集の古瓦とみなし、付近に瓦窯跡があるとする。大正時代には付近に瓦屋が営業していたこと、隣接の小田原市羽根尾は埴尾であることなどから古代の瓦窯跡が存在した可能性が強い。

足柄郡では千代寺院跡に瓦を供給した松田町からさわ瓦窯跡の調査があった。窯跡は東名高速道路の拡幅工事で破壊されてしまったが１基だけ松田町の背後の松田山の最明寺跡の一角に移築保存されてい

る。近年の調査で南足柄市や小田原市の西部でも瓦が出土している。

鎌倉郡でも最近の発掘調査で瓦の確認される遺跡が多くなり、従来知られていた今小路西遺跡の郡衙域だけでなく、南側の浜地でも出土し、裏面縄目の叩き痕に表面模骨痕の平瓦がある。

三浦郡では相模湾側の乗越遺跡や子安遺跡が興味深い。乗越遺跡は海岸際の遺跡で瓦の積出港の可能性も指摘されていた。標高120mという高地にある子安遺跡は寺院跡とみる考えと瓦窯跡であるとする意見があって断定されていない。久里浜の八幡神社周辺遺跡は古久里浜湾に面する。その湾は古代の御浦であろうという（中三川昇氏説1999年）。

久良岐郡の弘明寺跡については比較的早くから知られていたにもかかわらず、瓦の拓本などは公表されていない。最近になって瓦を採集した人を知り、寺に保存されている瓦の拓本を取ることができた。裏面の格子目の叩き痕を残しているが、表面は模骨痕の凸部を削っているもので下寺尾型の瓦や影向寺の凸面布目瓦と対比できるものであった。石野瑛氏は近くに瓦窯跡の存在を指摘していた。また横浜市史に新編武蔵国風土記稿に松本村中登で瓦が出るとの記載のあることを知り、港南区港南・笹下中学校で作成した「郷土のあゆみ」に縄目の瓦の写真が掲載されていることを知った。郷土史家はここに郡衙を想定している。

都筑郡では郡衙としての長者原遺跡が確認されているが、平川遺跡という瓦窯跡の可能性のある遺跡が坂詰秀一氏によって発掘され、その近くに軒瓦の出土する地点のあったことを忘れてはいけない。川崎市西部の岡上寺院跡については坂詰秀一氏や河合英夫氏、菅野和郎氏の研究がある。

橘樹郡では影向寺跡の総合調査などで研究は村田文夫氏や望月一樹氏らによって活発であり、郡寺とセットとなる郡衙の研究においても一歩先んじている。また寺尾台寺院跡の発掘と研究が戦後いち早く実施されていた。

生産遺跡のないことが神奈川県の特徴などと言われることが多いが、実態としてはそのような研究のアプローチを持たなかったことに原因するのではないかと思うようになった。生産遺跡は小田原市東部の羽根尾付近、川崎市、横浜市に可能性があり、愛甲郡には独自の瓦があることから独自の瓦窯跡の存在が予想されている。大住郡内でも河野一也氏は可能性を認めている。生産遺跡の問題では三浦郡では贄の生産遺跡と考えられる浜諸磯遺跡などがあることも忘られない。

軒丸瓦や軒平瓦が少ないことで神奈川県の古代寺院は多くの研究者からも研究の対象としてこなかった事情があるが、寺院跡で最も普遍的に出土するのは平瓦、丸瓦であり、量的にも最多量であり、考古学の基礎となるものである。文様の形態よりも製作技法に踏み込んだ研究が期待されるのである。

3　講座の意義

神奈川県で寺院を中心とした講座やシンポジウムはこれまで開かれたことはなかった。始めてのことである。1984年の関東古瓦研究会は東京都国分寺市で開催されたものであるので、神奈川県では初めてである。また今回は神奈川県内の考古学研究者を中心に計画したが、古代寺院の研究は考古学だけでな

く歴史学の分野でも多くの研究の成果があり関心の高いところである。古代寺院の研究には歴史学研究者も当然交えることが要求されるが、また私自身も総合考古学という歴史学と考古学とを交えた新しい考古学の世界を描きたいという夢をもっているが、今回は最初であるので考古学的な整理もしておきたいと考古学研究者だけの講座となった。

川崎市の影向寺については、隣接した郡衙の倉庫群を発掘調査した玉川文化財研究所の河合英夫氏にお願いした。河合氏は町田市の三輪窯跡を調査して隣接してある岡上寺院跡の再検討を進めている。また寺域の全面的発掘が実施され史跡として保存された岐阜県古川町の杉崎寺院跡の発掘調査報告書(1998) をまとめている。

横須賀市宗元寺跡については、赤星直忠博士文化財資料館の竹沢嘉範氏にお願いした。竹沢氏は私どもよりはるかに先輩である。神奈川県の寺院研究はこのような大きな幅のあることを示したくてお願いした次第である。赤星ノートの利用は寺院だけでなく、考古学の宝の山であることを理解されるものと思われる。

小田原市千代寺院跡については、去年千代寺院跡の南側の低地から木簡を発掘した盤古堂考古学研究所の滝澤亮氏と小池聡氏にお願いした。両氏はこれまでも千代寺院跡内やその周辺で何回も発掘調査を実施しており、それらの成果もぜひまとめてほしいとお願いしている。

茅ヶ崎市下寺尾寺院跡については、私が報告する。報告書をほぼ完成して、茅ヶ崎市の文化財展で出土瓦の展示を行い、講演会を開いた翌日、11月16日に下寺尾寺院跡を発掘した岡本勇氏が亡くなり、私は古代寺院にはまってしまった感がある。

海老名市の国分寺と国分尼寺については海老名市教育委員会の須田誠氏にお願いした。最近の発掘調査の成果を得て新しい考え方を提示できるものと思われる。

最後の村落内寺院については吾妻考古学研究所の大坪宣雄氏にお願いした。国分寺以前の本格的寺院だけでなく、同時に村落内においても小堂が存在したこと主張している。従来の図式的な見解とは異なるものである。

そして特別講演として、日本窯業史研究所の河野一也氏に神奈川県の古代寺院について総論的にこれまでの研究の成果をまとめてもらうようお願いした。今回の講座のため千代、宗元寺の再検討をさらに進められているという。

今回の「かながわの古代寺院」の開催は、神奈川県、古代の相模国と武蔵国南部の古代寺院の研究にとっても画期的なことであるが、古代の相模国の古代史の研究にとっても重要な意味をもつであろう。それは国と村々との間にある郡という単位を単なる地域の問題としてではなく、政治単位として正しく位置づけ、議論の深みをますと考えられるからである。寺院のネットワークを明らかにすることによって古代相模国の成立と展開に関する問題の解明に一歩近づけるものと期待されるのである。

また、国分寺以外、史跡として保存されている寺院跡がないという点も考えてみたい。これらの中でどれが史跡として残されるか、今後の大きな課題であることを銘記しておきたい。

第2表　神奈川県古瓦出土遺跡数

	大正	石野 1939	石野 1963	神奈川県 1971	杉山 1972	赤星 1979	関東 1984	考古学会 2000	寺院	瓦窯
横浜市		1	1		3	1	6	9	2	2
川崎市	○	1	2	2	3	4	4	12	3	
横須賀市	○	1	1	6	8	7	9	14	3	5
鎌倉市							1	6	1	
藤沢市						1	2	6		
茅ヶ崎市			1		1	1	1	6	1	
綾瀬市							3	4		
海老名市	○○	3	2	2	2	4	4	20	4	
相模原市					(6)		2	4		
城山町					1		1	2		?
藤野町							1	1		
厚木市		1	+		1	2	5	8	3	?
伊勢原市				1			1			
平塚市				2	1	1	7	28	1	
大磯町		2	2	3	3	1	4	2	1	
二宮町								1		?
秦野市				1	1		1	1		
小田原市	○	1	1	2	1	3	3	6	2	?
松田町					1	1	1	1		1
南足柄市								1		
合計	5	10	10	19	32	26	56	132	21	13

石野　瑛　1939　「相模武蔵に於ける古刹と出土瓦」『綜合古瓦研究』第二分冊

石野　瑛　1963　『神奈川県史概説』

神奈川県教育委員会　1971　『神奈川県埋蔵文化財遺跡地図（付遺跡地図地名表）』

杉山博久　1972　「神奈川県下における古瓦出土遺跡地名表」『小田原市文化財調査報告書5』

赤星直忠　1979　『神奈川県史』資料編20　考古資料

関東古瓦研究会　1984　『第八回関東古瓦研究会資料　その壱　相模編』

関東古瓦研究会　1984　『第八回関東古瓦研究会資料　その弐　南武蔵編』

川崎市　影向寺址

河合英夫

所 在 地　川崎市宮前区野川影向寺境内（武蔵国橘樹郡）
創建年代　７世紀第Ⅳ四半期頃
伽藍配置　推定法起寺式
規　　模　不明 (伽藍中枢部 90 × 70m?)
関連古墳　馬絹古墳（７世紀中頃）

①影向寺　②千年伊勢山台北　③蓮乗院北

第１図　遺跡位置図（1/50,000）

はじめに

多摩丘陵の北東端、宮前区野川の台地に所在する影向寺は、南武蔵きっての古刹として、その法燈を今に伝えている。

その立地する台地は影向寺台と呼ばれ、ほぼ東西に延びる台地の周囲は複雑に入り組んだ支谷が形成され、台地を更に東に行くと伊勢山台となり、そこは橘樹郡衙の正倉の存在が判明した千年伊勢山台北遺跡である。台地上からは多摩川と矢上川の沖積低地を望むことができる。また影向寺の周辺には、馬絹古墳をはじめとした梶ケ谷古墳群が形成されている。終末期古墳の盟主的存在である馬絹古墳は、泥岩切石積み胴張り複室構造の横穴式石室を内部主体とし、持ち送り技法で構築され、石室構築技術には北武蔵の比企地域との技術的な交流が窺え、石室の平面企画の検討より７世紀中葉頃と推定される。律令制下においては、付近に『延喜式』の小高の駅家が設けられ、多摩川や矢上川の水運と肥沃な生産地を控えた歴史的環境をみても、この地域が古代からの要衝の地であたことが知られる。

ここでは、まず影向寺に関する先学の業績を簡単に紹介し、その門前へと誘っていきたい。

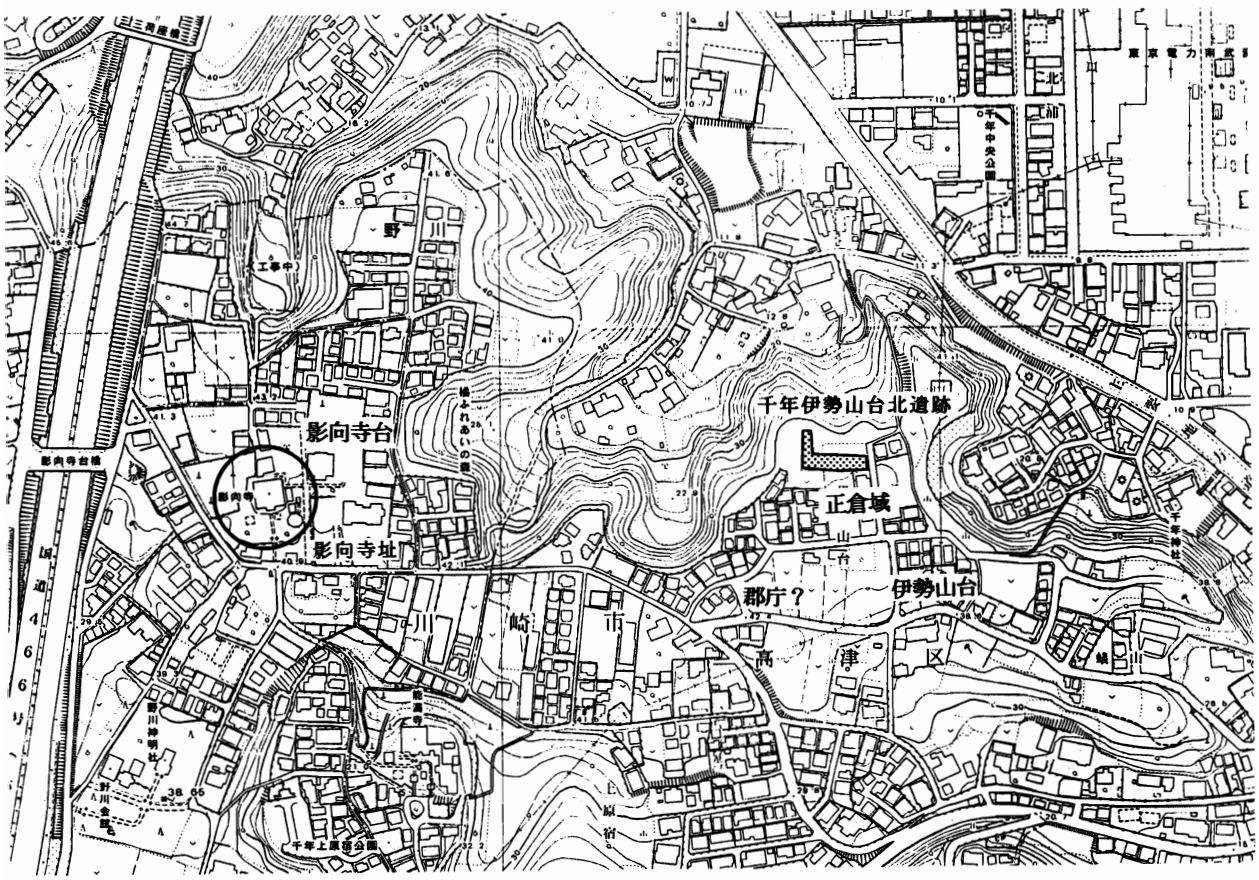
１　研究史

影向寺の創建とその由来を知る唯一の史料は、寺に伝わる『影向寺仮名縁起』（宝永７年選述）である。それによれば天平11年(739)に聖武天皇の発願により、僧行基が開基したと伝えている。この他に江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』や『江戸名所図絵』にも記載があり、風土記稿には境内にある影向石（塔心礎）の記述が、名所図絵には影向石が描かれ、古瓦は好事家の知るところでもあった。考古学的な検討がなされるようになるのは大正年間からのことである。三輪善之助や大場磐雄の両氏によって「影向石」や「都」銘の文字瓦などについて考察が加えられた。戦後では古江亮仁氏の研究が特筆される。これまでに採集された古瓦の中に国分寺の創建に先行する一群が含まれることを明らかにし、白鳳後期（奈良前期）まで遡ることをすでに言及していたのである。しかし寺院そのものの調査は、なぜか近年まで実施されることがなく、そのため創建年代や建立の背景、伽藍配置、その後の変遷など、どれも未解決のままであった。本格的な発掘が実施されたのは昭和50年代のことで、川崎市教育委員会が主体となった「影向寺文化財総合調査」に伴う調査、境内の関連施設の整備に伴う調査、薬師堂の半解体修理に伴う基壇の調査などがそれである。

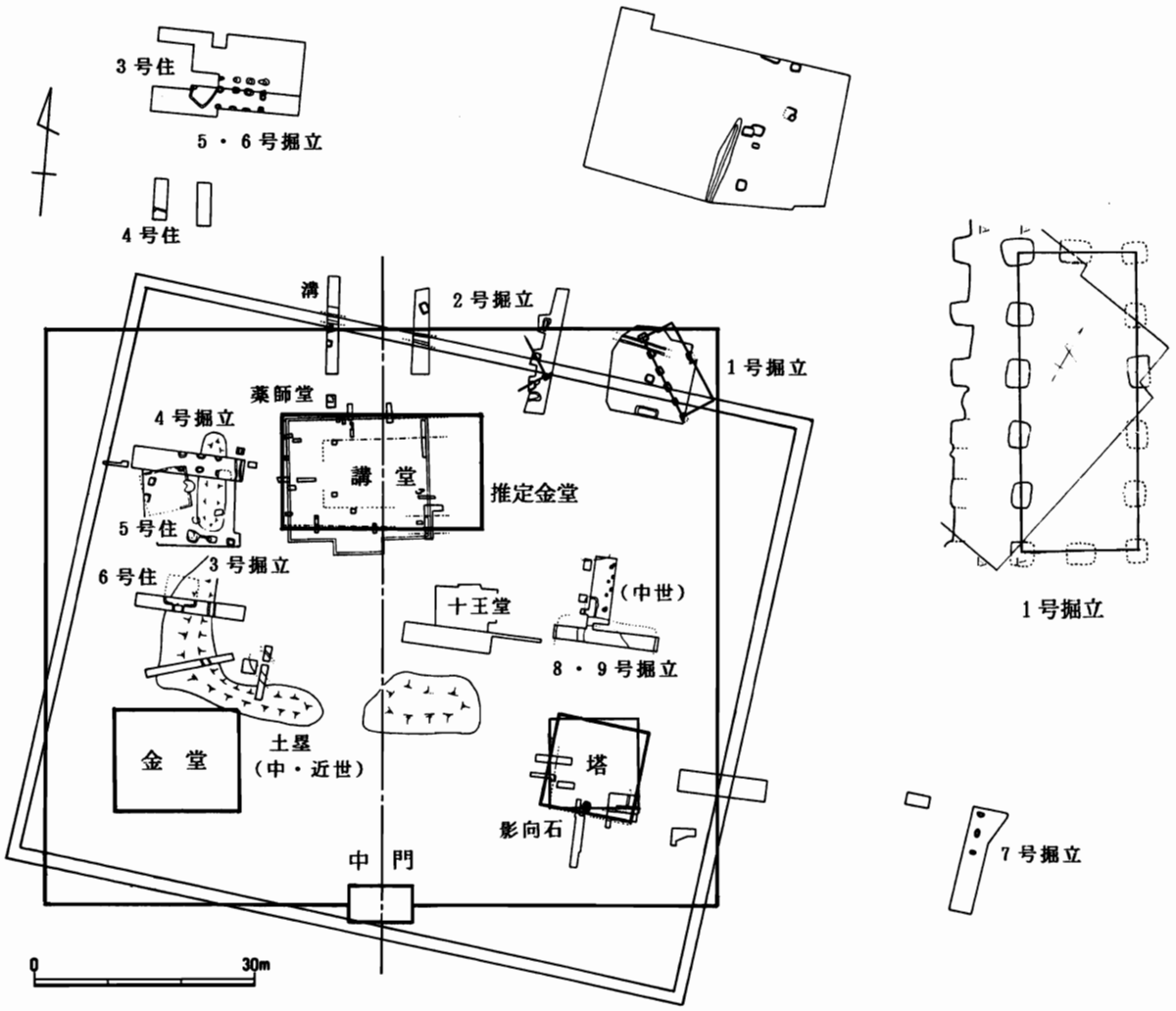
2　調査成果と問題点

総合調査では、創建当初の伽藍配置や寺域の確認と、塔の心礎とみられてきた「影向石」周辺の調査から塔址の存否を明らかにすることであった。その結果、伽藍配置や寺域を解明するまでには至らなかったが、塔址基壇、掘立柱建物、瓦溜まり、溝などの寺院址に関わる遺構が検出された。とくに「影向石」周辺の調査では、塔の心礎は多少移動してはいるが、掘込地業を伴う版築によって築成された基壇建物であることが判明し、基壇規模を方40尺と想定した。また創建年代は、瓦当文様の型式学的検討によって従来の年代よりやや繰り上げた7世紀末から8世紀初頭の年代観を示した。ただ塔基壇中に、創建時に使用されたとみられる軒丸瓦が含まれていたことから、塔址は再建されたものか、或いは他の堂宇に遅れて築成されたものか、結論は得られていない。

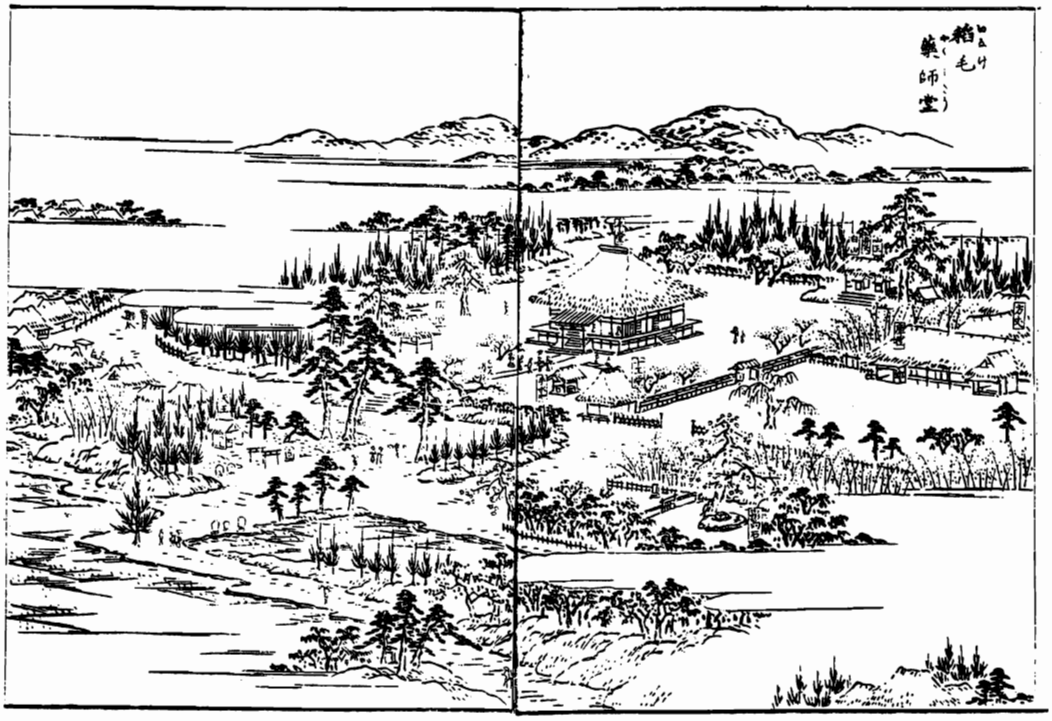
現薬師堂基壇部の調査では、最小限の範囲のもとでの調査であったことから不明瞭な点もあるが、基壇の規模と変遷について薬師堂に伴う現存基壇に至るまで、少なくとも3回にわたる基壇改修のあったことが指摘された。基壇は掘込地業を伴う版築によって築成され、第2期までの基壇改修が古代影向寺の所産と考え、基壇中に瓦を伴わない段階を創建期とし、基壇中に瓦の敷かれた段階を第2期の決め手としている。創建期の基壇規模は不明であったが、第2期の基壇規模は奥行約15ｍ、間口は現況では約20ｍの範囲までを確認しているが、現薬師堂南東端で確認された瓦敷の突出部を基壇正面の施設と



第2図　影向寺台および伊勢山台周辺の地形（1/5,000）



第3図　影向寺全体図および伽藍復元図（1/1,000）



第4図　「江戸名所図絵」にみられる影向寺境内図（報文より）

捉え、34～40ｍの規模を想定している。この基壇建物について当時の結論としては、金堂を発見することができなかったことから消去法によって現存する薬師堂下にその存在を求めた。現薬師堂の全面を覆うようにして確認された掘込地業（基壇建物）は、国分僧寺の金堂規模に匹敵し、また間口の広いことも三間四面の形式が一般とされる白鳳期の金堂とは趣を異にしており、金堂基壇とみなすには無理な解釈と思われる。むしろ間口との関係からみて、奇数間の講堂であったと推定されるのである。第３図は、塔をほぼ現位置に、金堂を西対に配した法起寺式の伽藍配置を想定した。

また境内を中心とする一連の調査で検出された掘立柱建物群は、主軸方位・柱間寸法・出土遺物などの分析から、影向寺の付属施設とみられる一群と影向寺に先行して造営されたとみられる一群に分けられ、前者の建物(3~7号)は堂塔の主軸とほぼ整合し、後者の建物(1･2号)は前者に比べ大形で主軸が西偏するが、それは旧地形に規制されていたとみられる。ここでは影向寺の創建問題に関連して、後者の建物群を便宜的に「影向寺下層建物群」として取り上げるが、影向寺の創建のあり方やその前史を探る上で重要な資料となる。建物群の空間的な構成や機能は不明であるが、寺の造営主体に関わる一群とみなすこともでき、前史を飾る伝統的な勢力を基盤とした在地首長の「居宅」と考えられる事例でもある。これらの建物は出土遺物から年代を確定できないが、７世紀後半には造営されたとみられる。

馬絹古墳の造営と影向寺の建立とは時間的にも相前後し、ともに矢上川の沖積低地を眼下に望むことができる位置に立地している点は重要である。この地域で勢力を保持してきた在地首長層が自らの居宅地の一部を施入して影向寺を造営したと考えることができないであろうか。

3　出土瓦の概要と年代観の変更

軒瓦や丸・平瓦のほか、隅切り平瓦や箆書き文字瓦、それに瓦塔の破片なども出土している。

軒丸瓦は、いわゆる山田寺系の素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦で３類４種に分類されるが、文様の系譜から二つのグループに大別される。Ⅰ・Ⅱ類とするグループは、中房・内区とも類似するが、相違点は内区と外区外縁の間にある線鋸歯文の有無である。ともに瓦当面は厚く、中房に１＋６の蓮子を配し、中房から棒状の細い子葉が放射状に表現されている。この子葉をもつ瓦は、武蔵では比企・入間の両郡を中心に分布し、寺院では寺谷廃寺、小用廃寺、勝呂廃寺の３ヵ寺と古代武蔵の窯業生産の中核を担った比企郡内の大谷瓦窯や赤沼瓦窯からも出土している。これらは山田寺式の細別型式である上野の上植木廃寺式の亜式と捉えられ、上植木廃寺式の二次的波及として北武蔵の比企・入間地域を介して南武蔵の当寺まで広がったものと推定される。勝呂廃寺の上植木廃寺系は、単弁八葉の２種と、単弁十葉、単弁十二葉のものがあるが、型式学的には単弁八葉が古く、十葉、十二葉へと細弁化したと考えられている。寺谷廃寺は素弁をもつ東国の初期寺院の一つであるが、単弁十葉の上植木廃寺系が出土し、大谷瓦窯と同笵である。また小用廃寺からは勝呂廃寺と同笵の単弁十二葉の上植木廃寺系が出土している。武蔵への広がりは東山道武蔵路を経て移入したものと推定される。なおⅠ類とした外区内縁に線鋸歯文を施す例は他にない。報文ではⅡ類はⅠ類の簡略化と考えている。Ⅲ類は前述のⅠ・Ⅱ類とはやや様相が

異なり、周縁が間弁部と連なるのが特徴で、八葉の蓮弁を夫々二重の凸線で囲み、中房は大きく蓮子も1＋4＋8と多い。瓦当径の大小によりａ種とｂ種があり、ａ種は16㎝前後で、ｂ種は19㎝前後と大形である。中房の蓮子はやや不明瞭で蓮弁はａ種よりも長く、二重に巡る凸線はやや雑である。型式学的には瓦当径が小さいａ種が先行型式と推定される。この瓦は当寺以外では川崎市麻生区の岡上廃寺（都筑郡）に採用され、ａ種が三輪瓦窯で焼成され、対応する軒瓦平は三重弧文である。また武蔵国分寺創建瓦の中に瓦当文様が類似する素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦があり、両者は比較されるが、中房の蓮子数や周縁など細部において差異をみせる。なお土器編年との関係では岡上廃寺の瓦は８世紀前半代に収まると考えられる。

軒瓦平は、すべて段顎を有し、三重弧文、四重弧文、五重弧文に分類されるが、いずれも型挽き重弧文とみられる。主体は三重弧文で、型式学的には時代が新しくなるにつれ、重弧の数が増し、顎が短くなる傾向にあるが、対応関係は不明である。

丸瓦は玉縁をもつ有段式のものが確認されないことから、行基葺と呼ぶ無段式と考えられている。凸面は格子叩き、縄叩き、無文に仕上げた３種である。平瓦は粘土板桶巻作りが主体で、凸面は格子叩き、縄叩き、無文に仕上げたもの、それに特殊な例として凸面に布目痕を残す大和川原寺などにみられる瓦がある。この種の瓦は武蔵では類例がなく、関東では両総と日立で僅かに知られる。軒丸瓦Ⅰ類の線鋸歯文も、川原寺式の面違鋸歯文とは異なるが、全国的に広がる川原寺式はもっとも変容度の大きい瓦当文様であることから、その影響とみなすこともできよう。

軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ類の瓦当文様をもとに、北武蔵を中心に分布する山田寺系の細別型式の一つである上植木廃寺式亜式に系譜を求めて影向寺の成立を考えたが、上植木廃寺式からの系譜であることは外縁が素縁となる点と子葉が棒状に退化している点が上げられる。山田寺式を瓦当文様に採用した上植木廃寺式の創建年代が重要となるが、上植木廃寺式を拠点に、さらに二次的な波及の中で亜式として成立したのが在地的に変容した独自の瓦当文をもつ勝呂廃寺や影向寺など在地寺院であろう。岡本東三氏の年代観に準拠すれば７世紀第４四半期には成立しているものと考えられる。

おわりに

影向寺は県内の初期寺院（白鳳寺院）として、本格的な発掘調査が行われた唯一の遺跡であるが、塔址、現薬師堂下層の基壇遺構、付属雑舎群、影向寺下層建物群など、どれも最小限の範囲のもとでの調査であったことから、主要堂塔や伽藍の構成、寺域、建立前後の様相など、寺院遺構に関わる実態はほとんど未解決のまま現在に至っている。したがって今回の検討にあたっても明快な答えを出すには至っていない。瓦をはじめとする個々の資料の検討も今後の重要な課題であるが、できれば再度の考古学的調査を切望したい。以下、課題を掲げる。

［伽藍配置］現薬師堂下を講堂をみなし、塔を東に、金堂を西に配した法起寺式伽藍を想定。

［創建年代］軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ類の瓦当文様をもとに、北武蔵を中心に分布する山田寺系の細別型式である

上植木廃寺式亜式に系譜を求め、従来よりも繰り上げた７世紀第Ⅳ四半期に年代観を変更。堂塔改修の軒丸瓦Ⅲ類は岡上廃寺の年代観より８世紀前半代に変更。

[創建の背景] 拠点寺院で採用された畿内系瓦当が二次的広がりをみせる中で北武蔵を介し成立。在地首長層の旧来からの同属的関係や地縁的関係を基盤とすることが終末期古墳にみられる石室構築技術の交流からも想定できる。影向寺創建の上限を評制段階に想定すると、天武14年(685) 詔に象徴される天武朝以降の仏教政策の動向と一致。この詔を契機に地方寺院の造営が活発化。その実態は必ずしも明確ではないが郡単位とした造営の実態とも合致。

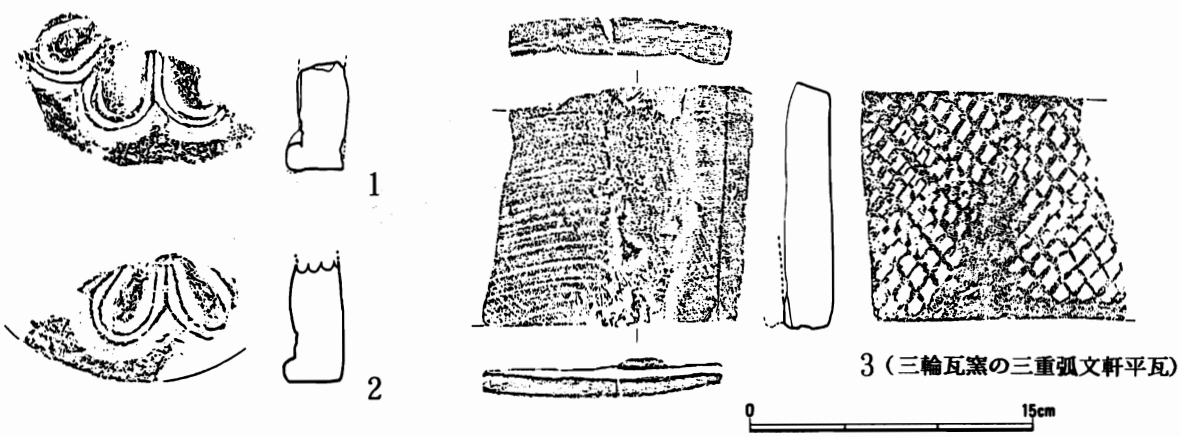
[影向寺下層建物群] 影向寺に先行して造営された大形の建物を「下層建物群」とみなし、伝統的勢力を背景とした在地首長の「居宅」と想定。その一部を施入して造寺した可能性を想定。

[橘樹郡衙との関連] 所在地の歴史的背景に着目すると在地首長層の本拠地に造営された本拠地型郡衙遺構とみられ、中枢部は不明であるが遺構は評制段階まで遡ると推定され、寺院との関連性が一層高まったものと考えられる。

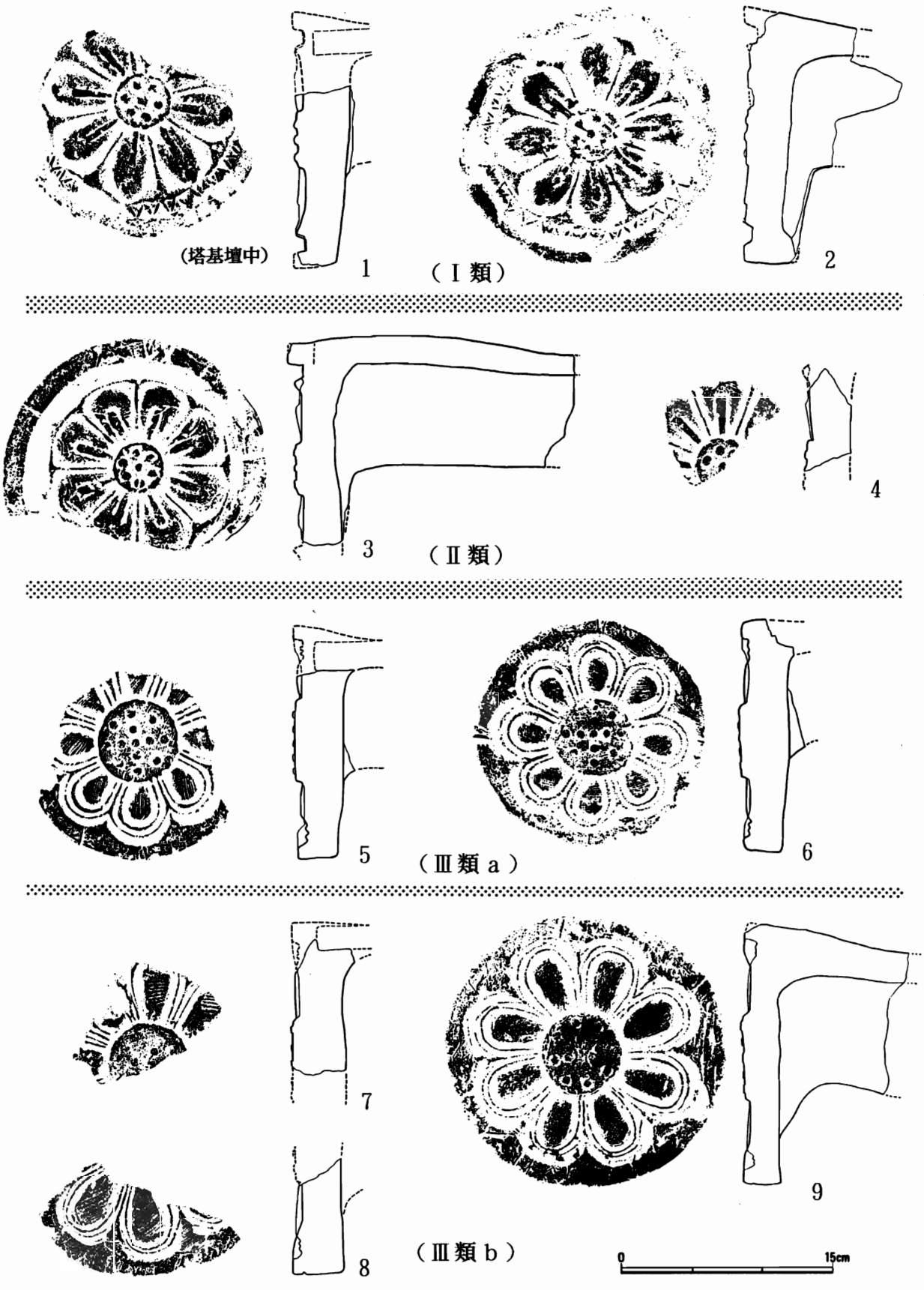
以上、課題を掲げたが、寺院成立に関わる重要な手がかりとして瓦当文様の型式学的研究があるが、それら分布の究明や造瓦技法を含めた型式細分の深化が、実態を反映した仏教文化波及の重要な手がかりとなろう。

参考・引用文献

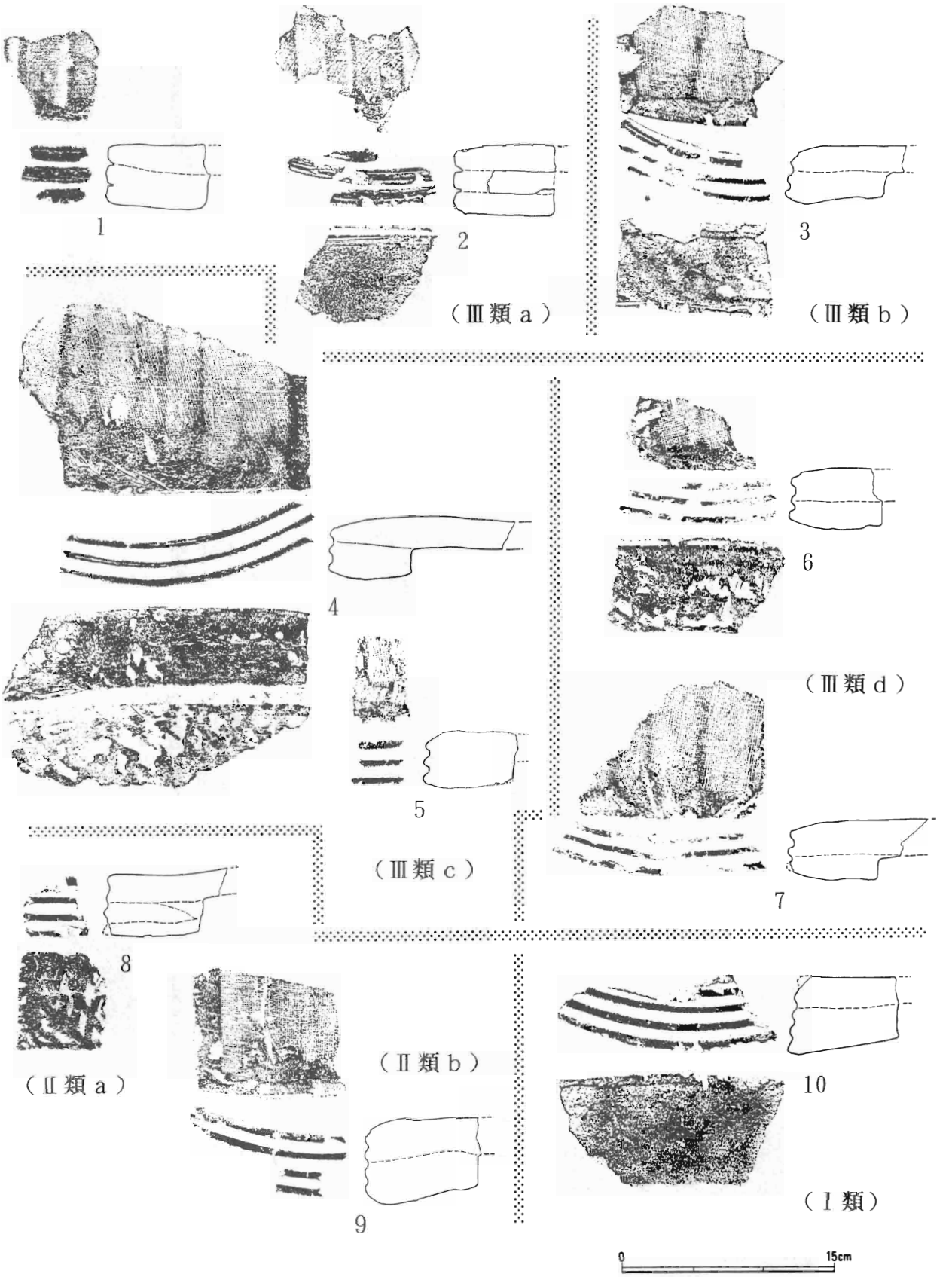
竹石健二ほか　1981『影向寺文化財総合調査報告書〔寺院址〕』 川崎市教育委員会
竹石健二ほか　1989『影向寺薬師堂保存修理工事報告書〔基壇部記録調査編〕』 影向寺
河合英夫　1997「岡上廃堂址の年代観について　三輪瓦窯址関連遺物の検討」『多摩考古』第22号　多摩考古学研究会
村田文夫　1993『古代の南武蔵――多摩川流域の考古学』 有隣新書
岡本東三　1996『東国の古代寺院と瓦』 吉川弘文館
河合英夫　1997「川崎市橘樹郡衙関連遺跡の調査」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会



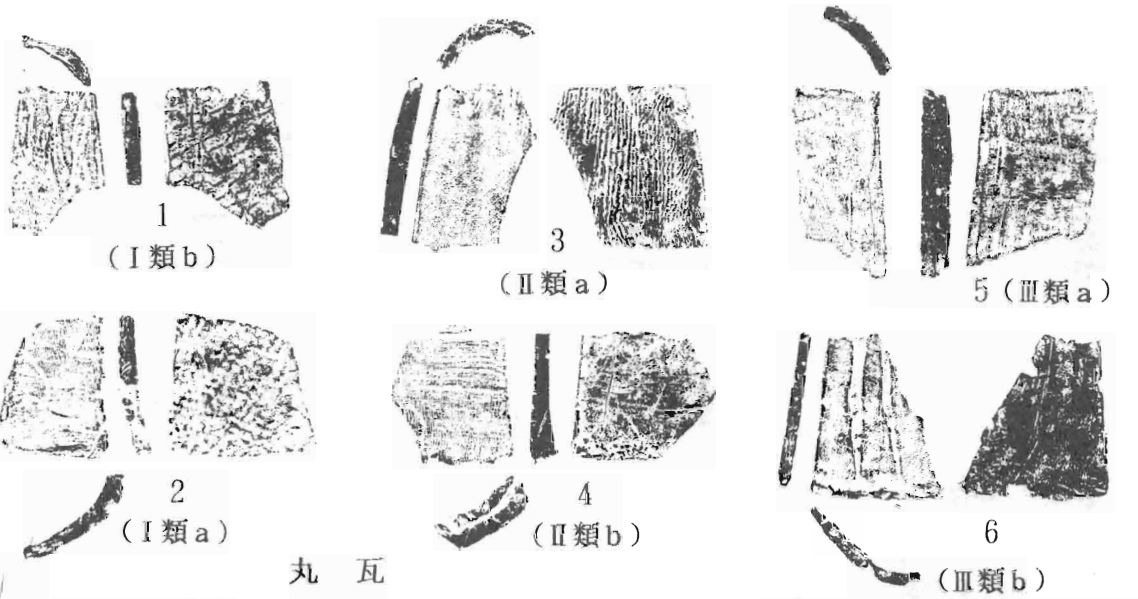
第５図　岡上廃寺(1)・三輪瓦窯(2) 出土の影向寺軒丸瓦Ⅲ類ａと同型式の軒丸瓦（1/4）

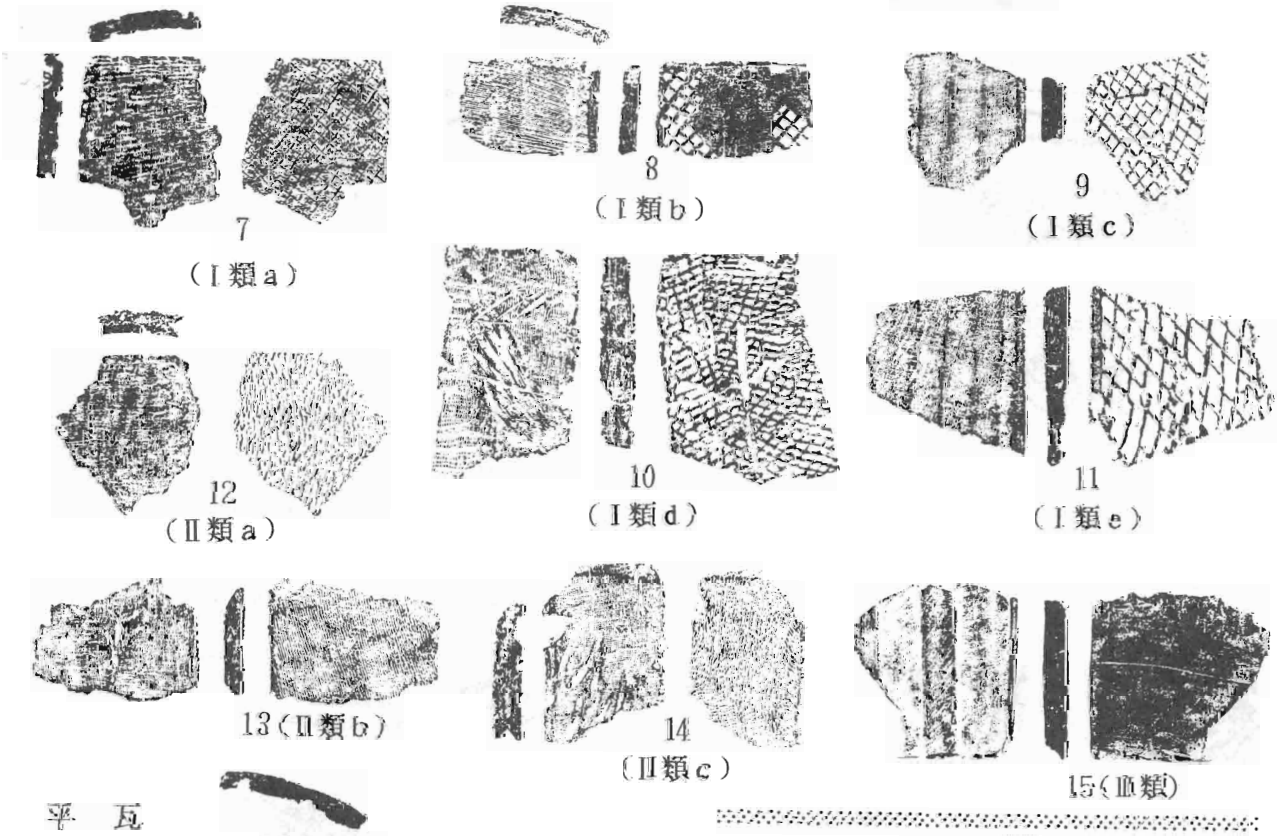


第6図　影向寺出土の軒丸瓦（1/4）



第７図　影向寺出土の軒瓦平（1/4）





第8図　影向寺出土の丸・平瓦（1/6）

1. 影向寺塔址

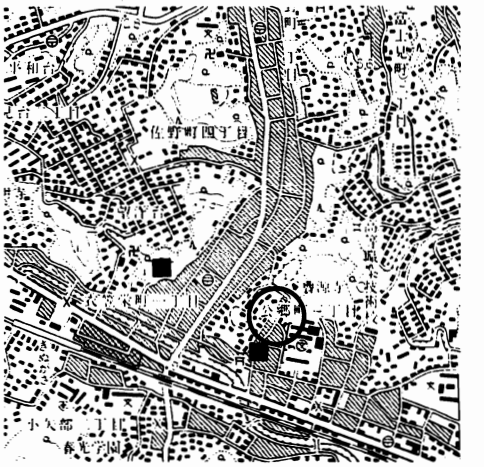
2. 千年伊勢山台遺跡全景（橘樹郡衙）

3. 千年伊勢山台北遺跡（橘樹郡衙正倉）

横須賀市　宗元寺跡

竹澤嘉範

所在地　横須賀市公郷（御浦郡御浦郷？）
創建年代　７世紀後半
伽藍配置　法起寺式か
規　模　不明



宗元寺跡位置図（1/25000）

はじめに

三浦半島のほぼ中央、横須賀市公郷町３丁目（相模国御浦郡御浦郷？）の丘陵中腹に曹洞宗寺院曹源寺がある。その南裾一町(109m)四方が宗元寺跡である。現在の神奈川県立横須賀高等学校敷地の一部を含み、南側を平作川が流れている。平作川沿いの道は鎌倉道の名が残り、この道と並行した北側の道は古東海道と推定されている。

宗元寺の跡は発掘調査を実施していないが、大正時代から研究を続けた赤星直忠博士が採集した多量の瓦などにより７世紀後半に創建され、８世紀初めから順次整備されて三浦郡の郡寺として整備したのは、８世紀末ないし９世紀初頭と推定されている。その後12世紀末頃まで宗元寺の沿革は明かではないが、鎌倉時代になると吾妻鏡が建久３年（1192）８月９日の条で、源頼朝夫人政子安産のため、宗元寺を含む相模国の十五寺院に祈祷したことを記しているので、この時代までは未だかなりの規模を有していたと思われる。しかし、当時の檀越は鎌倉幕府の有力御家人三浦氏であったので、宝冶合戦による三浦氏宗家の滅亡後は次第に衰退したと思われる。そして、江戸時代になり三浦代官長谷川長綱が僅かに残った宗元寺の小堂を曹洞宗の寺院として再興したのが現在の曹源寺である。

1　宗元寺研究の歩み

宗元寺の瓦を最初に紹介したのは住田正一氏で、大正７年(1918)『考古学雑誌』に「相模国曹源寺古瓦に就いて」を発表した。しかし、住田氏は現在の曹源寺蔵の忍冬蓮華文軒丸瓦、飛雲文軒平瓦各１点と３点の平瓦小片を紹介しただけで、それ以上の調査は行っていない。従って、本格的に宗元寺の調査研究をしたのは赤星直忠博士が最初である。赤星博士は明治35年(1902)神奈川県横須賀市に生まれ、大正10年神奈川県立横須賀中学校（現横須賀高等学校）を卒業した。横須賀中学校は敷地の西側が宗元寺の跡で、博士の自宅は宗元寺の西側で低い丘の中腹にあったので、中学校在学中から校庭や自宅周辺の畑に散布していた各種の瓦を採集した。そして役場で宗元寺跡周辺の切り図（部分地図）を薄紙に写し、当時10個以上残っていた礎石のある場所は○印、瓦を採集した場所は・印を打って「宗元寺跡切り図（礎石と瓦の分布図）」を作成した。

大正11年10月、兵役で軍隊に入営する直前に、それまでの研究をまとめて『宗元寺』（孔版印刷）を

作成した。本書は最初に当時現曹源寺が所蔵していた木版「三浦宗元寺薬師堂畧縁起」の版本をのせ、1章に吾妻鏡、新編相模国風土記稿など宗元寺関係の文献資料、2章と4章に古老から収集した宗元寺に関する口碑・伝説、3章には曹源寺蔵と博士が採集した瓦の種類と散布状況などを記している。5章以下は梵鐘・石塔・宗元寺跡及びその周辺にある民家の家名などの調査結果を記し、巻末に現曹源寺所蔵と赤星博士が採集した忍冬蓮華文瓦・単弁八葉蓮華文瓦・飛雲文瓦・鬼瓦及び瓦塔の実測図を収録している。昭和10年、赤星博士は宗元寺研究の集大成である「相模宗元寺址」を『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書—第三輯』に発表した。この報告書は①遺跡及遺物上の宗元寺・②記録上の宗元寺・③口碑伝説上の宗元寺・④宗元寺考で構成されている。

①遺跡及遺物上の宗元寺で最も注目すべきものは創建時瓦の忍冬蓮華文軒丸瓦で、赤星博士は奈良県王寺町西安寺跡から出土する白鳳時代の瓦と同文であることを報じている。ただし、瓦の年代については、赤星博士は昭和初年の現地調査記録（赤星ノート）で現曹源寺の縁起にある“行基(749年没)創建”より古いと記しているが、当時、畿内から東国への文化波及はかなりの年数を要すというのが通説で、石田茂作、保井芳太郎などの先覚が宗元寺の瓦を奈良時代後期に位置づけたため、本書ではこれに従い奈良時代後期としている。しかし、赤星博士はこの奈良時代後期の年代に、なお、疑問をもっていたらしく、現在(財)かながわ考古学財団が保管する「赤星ノート」の記録では、昭和25年に横須賀高等学校敷地内から発見された創建時瓦より退化の見られる完形瓦を奈良時代前期としている。次に伽藍配置については昭和初年の赤星ノートに複数の想定図を記しているが、本報告書では遺跡中央の道路の左右に多い古瓦の分布、礎石の位置、僅かに残る伝承などを考慮して法隆寺式と推定している。ところが赤星博士が昭和24年に作成した「宗元寺絵図」では塔と金堂の位置が法隆寺とは反対の法起寺式となっている。発掘調査を実施していないので法隆寺式か、法起寺式か不明であるが、相模国分寺及び同文の忍冬蓮華文瓦を出土する奈良県王寺町の西安寺が法隆寺式なので、法隆寺式と推定するに至ったと思われる。

赤星博士後の宗元寺研究で最も重要なのは、日本窯業史研究所の河野一也氏の研究である。河野氏は相模国国内の古代寺院跡、窯跡及び窯跡推定地から出土した瓦について、それぞれの瓦を構成する粘土の鉱物構成などを調べて、生産遺跡である窯跡から消費遺跡である寺跡への供給関係を明かにした。宗元寺跡については平成2年(1990)に発表した「奈良時代寺院成立の一端について－相模国宗元寺古瓦について－」で、宗元寺跡と周辺の窯跡及びその推定地から出土した瓦の胎土を分類し、宗元寺の瓦はいずれも横須賀市内の石井瓦窯系、法塔瓦窯系、乗越瓦窯系及び公郷瓦窯系の瓦で構成され、少数の不明瓦があると報じている。また、平瓦の製作技法が模骨で成形する桶巻き作り（四枚作り）なのか、蒲鉾型の成形台による一枚作りなのかを調査して、石井瓦窯系と法塔瓦窯系は桶巻き作りであるが、乗越瓦窯系と公郷瓦窯系は8世紀半ば頃から急増した大量生産に簡便な一枚作りであることを明かにした。このほか、河野氏は宗元寺から出土する軒瓦の中心をなす忍冬蓮華文瓦について、胎土、焼成、製作技法、文様構成などを考慮して編年を行った。忍冬蓮華文軒丸瓦の変遷は1～4の4形式に分けられるが、それぞれの胎土を各瓦窯系のものに対照させ、1形式は石井瓦窯系、2形式は法塔瓦窯系、3形式は乗越

瓦窯系、4形式は公郷瓦窯系であると記している。また、宗元寺跡から採集した丸瓦と平瓦の重量を各瓦窯別に調査した結果、最も多いのは法塔瓦窯系で石井瓦窯系がこれを補完し、両者で全体の75%を占め、乗越瓦窯系と公郷瓦窯系は合計で25%程度であることを明かにした。

以上により河野氏は宗元寺の忍冬蓮華文瓦の年代を奈良県西安寺跡出土瓦に酷似する1形式は7世紀第4四半期、3形式は相模国分寺（僧寺）の創建期瓦の約50%が乗越瓦窯系と公郷瓦窯系であることから8世紀第2四半期後半、4形式は公郷瓦窯がロストル式平窯であることから8世紀後半から9世紀初頭に位置づけている。

宗元寺創建時（1形式）の忍冬蓮華文瓦の年代については、河野氏の他に千葉大学教授岡本東三氏と京都大学教授上原真人氏の見解がある。岡本氏は平成8年発行の『東国の古代寺院と瓦』で、飛鳥寺系の素弁蓮華文瓦を出土する上野の山王廃寺、下野の浄法寺廃寺、武蔵の寺谷廃寺の創建時瓦と、大和西安寺の忍冬蓮華文瓦と同文の瓦を出土する相模の宗元寺の創建時瓦は、7世紀第4四半期に広く分布する山田寺式や川原寺式の軒瓦に先行するものとし、7世紀第2四半期まで遡る蓋然性が高いと言っている。

また、上原氏は平成9年発行の『瓦を読む』で、地方へ伝播した畿内系瓦がどのように展開したかを①畿内に類似する瓦がそのまま伝播するが、地方的、面的分布を示すに至らない・②同じ類似する瓦が旧交通路（七道）に沿って線的に分布する・③畿内系の瓦が独自の地方色を生み、面的広がりで分布する・④律令制の地方行政単位である国を限界として分布する・と①～④に類型化した。上原氏はこの4類型は基本的には古代日本の律令制の進行とほぼ並行し、①は拠点的に瓦生産を導入した段階、②は七道を地方行政単位として重視した段階、③は郡を地方行政単位として重視した段階、④は国衙を拠点とする地方支配が完成した段階、であると記している。そして、これらの類型の具体例として①については、7世紀中葉に上野山王廃寺などの飛鳥寺系素弁蓮華文瓦や相模宗元寺の忍冬蓮華文瓦が伝播したのは、殆どがこの類型に属すると言っている。

2　忍冬蓮華文軒丸瓦の地方伝播と東国の水路

忍冬蓮華文軒丸瓦は7世紀第2四半期に出現し8世紀初頭まで展開するが、素弁蓮華文の中に忍冬文を入れる斑鳩宮式と、素弁蓮華文と忍冬文を交互に配する西安寺式がある。

斑鳩宮式忍冬蓮華文瓦は奈良県の法隆寺東院伽藍の地にあったと推定される聖徳太子の斑鳩宮跡から出土する単弁六葉蓮華文瓦を原型とするもので、六葉の各弁内に三葉又は五葉の忍冬文（パルメット）を飾るものである。この種の瓦は大和の若草伽藍跡、中宮寺などのほか、近江・志那中、飛騨・古川の東山道沿いと河内・野中寺、安芸・横見寺跡、周防・国府跡の山陽道沿いに伝播している。なお、朝鮮半島益山の百済帝釈寺跡から、これらの瓦の祖型と思われる三葉の忍冬文を弁内に飾る蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐草文軒平瓦が出土している。

次に西安寺式忍冬蓮華文瓦は奈良県王寺町の西安寺跡から出土する瓦を原型とするもので、中房が小さく周環をもつ中央の蓮子を8個の小蓮子が巡っている。中房と弁区の間に幅の広い圏線を刻し、弁区

に有稜素弁蓮華文と忍冬文を交互に4個ずつ配し、忍冬文の両脇外縁近くにやや大きい珠文をおく珍しい文様構成をなしている。この瓦の有稜素弁蓮華文について京都大学の上原教授は、花弁中央の稜が二条なので、蓮の花弁というよりも蕾を表現した蓮蕾文の可能性があると言っている。なお、この種の瓦が出土するのは現在のところ西安寺跡と神奈川県横須賀市の宗元寺跡のみである。この西安寺式忍冬蓮華文瓦は朝鮮半島の平城土城里などから出土する高句麗瓦が祖型と思われるが、西安寺や宗元寺の瓦は蓮華文の弁端に反転の表現として珠文をおく百済的特色が加味されている。

宗元寺と同文の忍冬蓮華文瓦を出土する西安寺の跡は、奈良県北葛城郡王寺町の舟戸神社境内にある。王寺町は法隆寺の所在する斑鳩町に隣接し、北端を大和川が流れている。大和川は大和高原（笠置山地）に源を発し、桜井・斑鳩・王寺などを経て河内平野を西流している。江戸時代、宝永元年(1704)の治水工事で現在のように改修される以前は、王寺から北西流して恩智（八尾市）・玉串（東大阪市）などを経て淀川に合流していた。このため、大和川の水運は古代の大和と難波(津)を結ぶ重要な交通のルートであったから、王寺は斑鳩と共に古代の国際的水路に位置していたことになる。

西安寺は一名久度寺といい、聖徳太子建立四十六院の一つと言われる古寺であるが、同じ王寺町にある片岡王寺（放光寺）と共に百済系氏族関係の寺院とも伝えられている。その沿革は鎌倉時代は興福寺末であったこと、室町時代まで存続したことが考えられるだけで、それ以外は明らかでない。伽藍配置は金堂跡・塔跡の推定地、地勢などから法隆寺式と推定されている。７世紀から13世紀頃までの各種の瓦が採集されているが、完形資料は少なく大部分が小破片である。

地方における初期寺院の造営は技術者の集団と多くの資材を必要とするので、在地の力だけでは不可能で畿内の有力氏族や大寺院の援助なしでは考えられない。宗元寺の場合は次の３で詳説するように、宗元寺の所在する三浦郡が古東海道の房総に渡る交通上の要所なので大和政権の援助があったことと、同文の瓦を出土する西安寺の関係で百済系氏族の協力があったと想定される。

上記のように西安寺式忍冬蓮華文瓦が出土するのは、奈良県王寺町の西安寺跡と神奈川県横須賀市の宗元寺跡のみである。複数の遺跡で同笵又は同文の瓦が出土することは、一方から他方に瓦工などの技術者や各種資材の移動が考えられる。最近、河野一也氏の調査で西安寺の瓦と宗元寺の創建時の瓦は同笵であるが、その製作技法は異なることが明らかになった。このため、宗元寺に西安寺系の瓦工人が移動したとすることは問題が残るが、瓦工人が移動しないで瓦当笵のみを移動したとすることは、瓦の生産ができたと思われる須恵器関係の工人が当時の三浦半島にはいなかった可能性が強いので、より多くの問題を残すことになる。従って、宗元寺の創建時瓦の製作のため北武蔵地域など他の地域の須恵器工人が移動したこと、又は西安寺系以外の瓦工が寺工など他の造寺関係技術者と共に大和から移動したことが考えられる。後者の場合はこの種の忍冬蓮華文瓦が奈良県王寺町と遠く離れた神奈川県横須賀市にのみ出土することから、その移動は陸路ではなく、河川や海を媒介とする水路であった可能性が高いと思われる。王寺町は斑鳩町と同じように当時の大和と難波を結ぶ重要な水路である大和川に沿っているので、宗元寺造営のため大和からの技術者や各種の資材は大和川・淀川の水路で難波津に出て、難波津からは沿岸伝いの海路で三浦半島まで運ばれたと思われる。

3　深田廃寺と一郡二寺

相模国で7世紀末頃までに創建されたと推定される寺院は、いずれも旧東海道沿いの沿岸部に位置する足柄上郡（小田原市）の千代廃寺、余綾郡（大磯町）の吹切遺跡、高座郡（茅ヶ崎市）の下寺尾廃寺、鎌倉郡（鎌倉市）の千葉地遺跡及び三浦郡（横須賀市）の宗元寺と深田廃寺である。これらの寺院は三浦郡を除き一郡一寺で、後に郡司となる豪族たちの氏寺などとして創建され、8世紀の後半頃に公的性格の強い郡寺に発展したと推定されている。しかし、三浦郡のみは後に郡寺となったと考えられる宗元寺のほかに深田廃寺があり一郡二寺となっている。

深田廃寺は神奈川県横須賀市深田台（相模国御浦郡田津郷？）、現在の横須賀市文化会館の周辺に建てられていたと推定されている。この地は丘陵の頂部で東京湾に面し東方に房総半島を望むことが出来る景勝の地で、縄文時代（早期・中期・後期）の深田貝塚が隣接している。明治時代に海軍病院など軍関係施設の建設で旧地形が破壊され、発掘調査などを実施しても寺跡に関する遺構の確認は殆ど不可能と考えられている。しかし、丸瓦・平瓦のほか近江系瓦と言われる花弁の中央に稜をもつ素弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦を模したと思われる頭部分に条線を引く平瓦・鬼瓦と思われる大型の蓮華文瓦などが採集されるうえ、古代相模国の各瓦窯と寺院との供給関係を調査した河野一也氏が深田廃寺から採集された瓦は、横須賀市内の複数の瓦窯（法塔窯・乗越窯）から供給されたことを明かにしたので、瓦窯跡ではなく寺跡の可能性が非常に高いと思われる。なお、明治初年に新政府が国内市町村の実態を把握するために選修した『皇国地誌』の三浦郡佐野村の項に「海軍水兵病院　本村ノ丑ノ方飛地字寺宇ニアリ」とあるので、深田廃寺の地は明治初年頃まで寺院関係の地であったという伝承が残っていたと考えられる。

上記のように、地方における初期寺院の造営は在地の力だけでは不可能で、畿内の有力氏族や大寺院の援助なしには考えられない。この点、宗元寺と深田廃寺の二寺が造営された三浦郡の場合は、古事記の景行天皇段にある倭建命の御子、足鏡別王を祖とする鎌倉之別に属し、日本書紀の持統天皇6年(692)に“相模国司が三浦郡で獲た赤烏を朝廷に献上、朝廷は祥瑞として大赦を行い、関係者に位禄を与え、御浦郡の調役を三年間免除した”と記されている。また、やや時代が下がるが相模国天平7年(735)封戸交易帳に“従三位山形女王食封、御浦郡走水郷五十戸……従四位下檜前女王食封、御浦郡氷蛭郷四十戸……”とあるので、古くから大和政権との関係が考えられ、その協力と援助があったと思われる。更に三浦郡が古東海道の房総に渡る交通の要衝で、大和政権の上総・下総など東国諸国政策の拠点であったと考えられることも、その援助や協力のあった要因と思われる。

東国で7世紀末頃までに創建されたとされる寺院を二寺以上有する郡は、相模国の三浦郡の他に上総国の海上（うなかみ）郡（二日市場廃寺・今富廃寺）と市原郡（光善寺廃寺・武士(たけし)廃寺）、下総国の香取郡（龍正院廃寺・名木廃寺）がある。

古東海道は相模国三浦郡から上総国南部の天羽郡（現富津市）に渡り、北上して周淮(すえ)郡、望陀(もうだ)郡、海上郡（現君津市、木更津市など）を経て市原郡（現市原市）にあった上総国府に至ったとされている。上総国府からは北上して下総国に入り、一方は千葉郡（現千葉市、習志野市など）を経て葛

飾郡（現市川市、船橋市など）にあった下総国府に至り、他の一方は更に北上して千葉郡、印旛郡、埴生郡（現佐倉市、四街道市、成田市など）を経て香取郡（現佐原市など）に入り、香取郡からは常陸国に入って常陸国府に向かったとされている。以上のように南関東で7世紀末頃までに創建された複数の寺院を有する郡はいずれも旧交通路沿いに所在し、海上郡を除く三浦郡・市原郡・香取郡の三郡は国境に位置している。また、相模国との国境に位置する伊豆国の田方郡（現三島市、御殿場市、沼津市）には市ケ原廃寺・塔之森廃寺・天神原廃寺など7世紀末頃までに創建された複数の寺院がある。これらのことは単なる偶然ではなく、7世紀後半に大和政権が七道を地方行政単位として重視した政策の影響と思われる。

おわりに

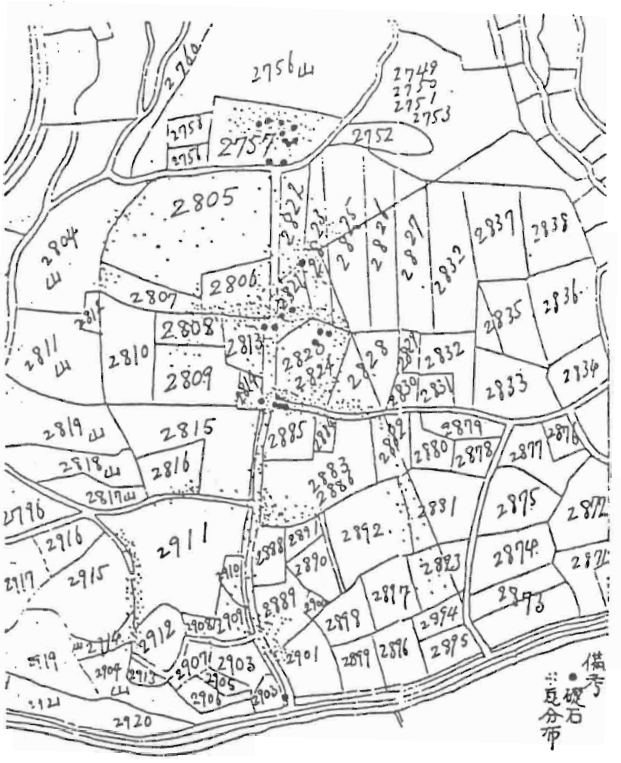
宗元寺跡は明治年間に神奈川県立横須賀中学校（現横須賀高等学校）の建設で東側は破壊されたが、西側は赤星直忠博士が研究を始めた大正時代末までは数軒の民家がたてられてはいたが、まだ相当部分が畑で現在は1個も残っていない礎石も10個以上散在していた。その後次第に宅地化が進み現在は発掘調査などの実施は非常に困難となっている。

上記のように宗元寺は赤星博士及び河野一也氏の研究により7世紀後半に創建されたこと、その瓦は横須賀市内の複数の瓦窯から供給されたことなどが明らかになった。しかし、伽藍配置や周辺に存在したと考えられる三浦郡衙のことなど解明すべき問題が多く残っている。いずれの日にか、これらのことを解明する発掘調査などの機会が与えられることを祈るものである。

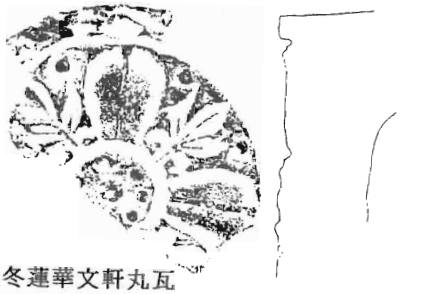
引用・参考文献

赤星直忠　「相模宗元寺址」『史跡名勝天然記念物調査報告書３』1935年　神奈川県
石田茂作　「西安寺址」『大和王寺文化史論』1937年　大和史学会
上原真人　『瓦を読む』（歴史発掘11）1997年　講談社
岡本東三　『東国の古代寺院と瓦』1996年　吉川弘文館
関東古瓦研究会　『シンポジウム関東の初期寺院－資料編-』1997年
河野一也　「奈良時代寺院成立の一端についてⅡ－相模国宗元寺の古瓦について－」『神奈川考古26』1990年　神奈川考古同人会
住田正一　「相模国曹源寺古瓦に就いて」『考古学雑誌８－５』1918年　日本考古学会
千葉県文化財センター　「房総古代仏教遺跡の諸問題」『研究紀要18』1997年
千葉県資料研究財団　『千葉県の歴史(資料編)考古3』1998年　千葉県
保井芳太郎　『大和上代寺院志』1932年　大和史学会

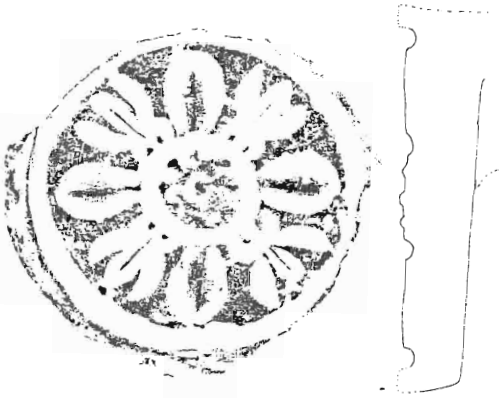
宗　元　寺　関　係



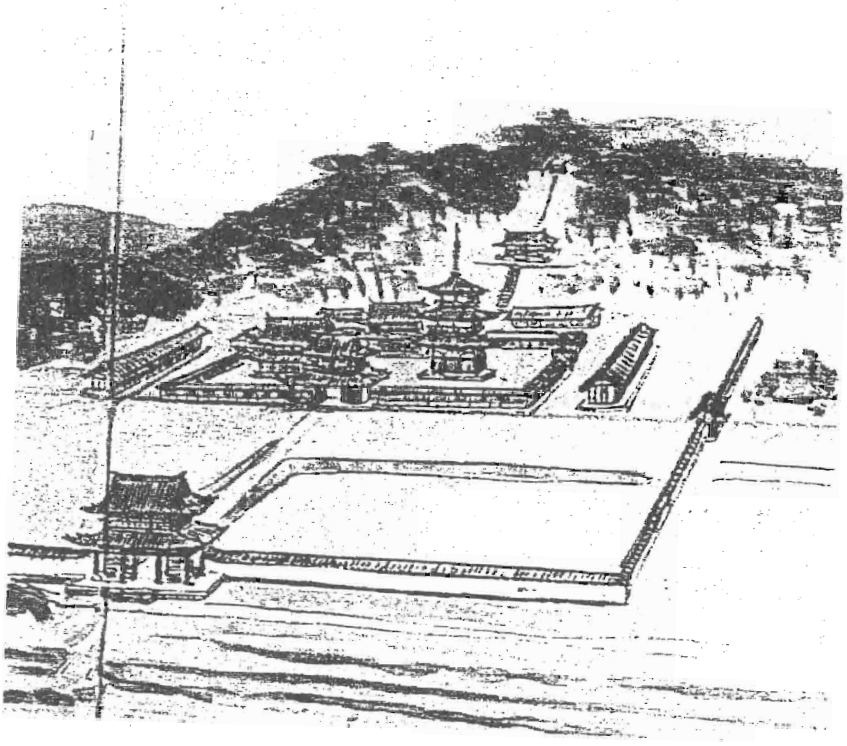
宗元寺跡付近切図
（赤星直忠「相模宗元寺址」より）



忍冬蓮華文軒丸瓦
（曹源寺蔵）

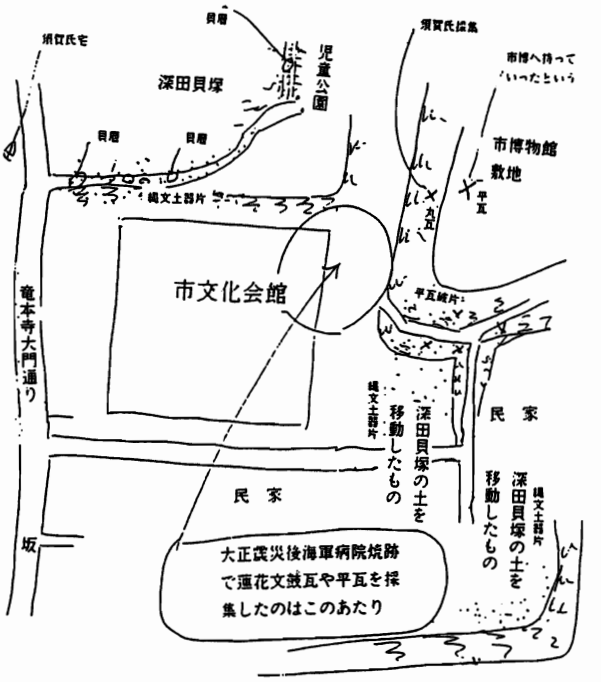


忍冬蓮華文軒丸瓦
（神奈川県立博物館保管）



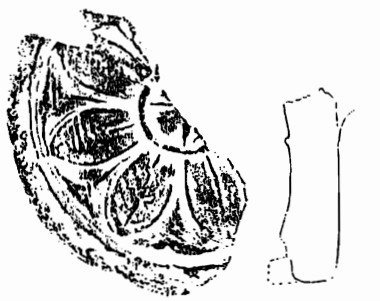
宗元寺復元図
（昭和24年作彩色図の部分）

深田廃寺関係

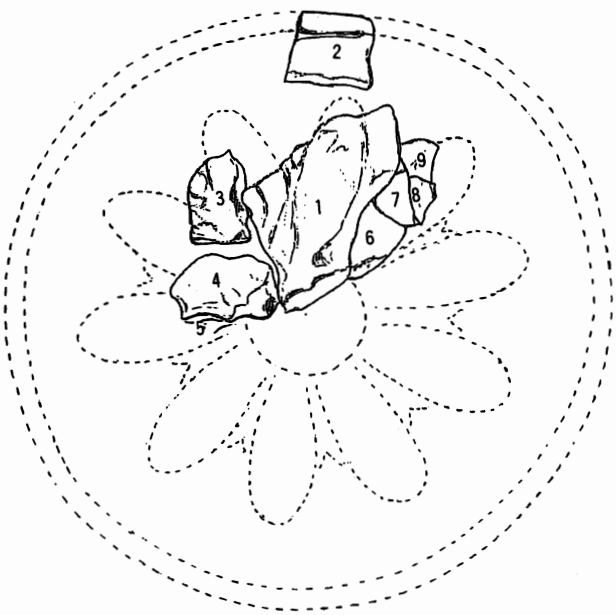


深田廃寺古瓦出土地点
（「赤星ノート」より）

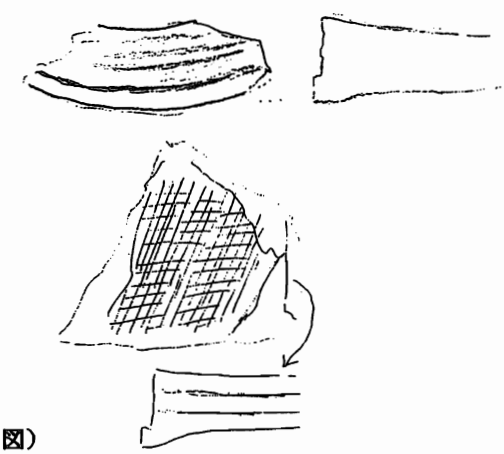
有稜素弁蓮華文軒丸瓦
赤星直忠「三浦記２」（『考古学雑誌17-8』）より



有稜素弁蓮華文軒丸瓦
（須賀理子氏蔵）



大形蓮華文瓦（須賀由也氏図）
（須賀理子氏蔵）



軒平瓦を擬す平瓦
側面にもヘラ描き二沈線あり
（「赤星ノート」より）

小田原市　千代寺院跡

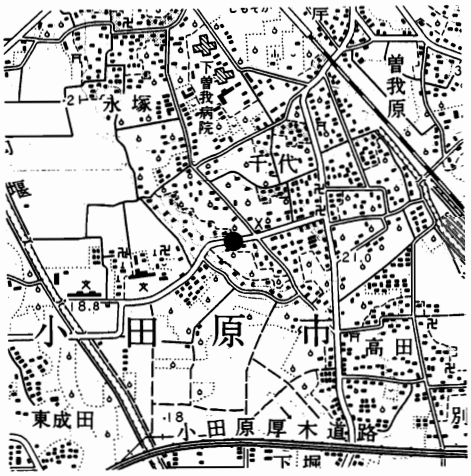
滝澤　亮・小池　聡

千代寺院跡は、神奈川県小田原市千代地内に存在する寺院跡である。古代律令制下に於ては、相模国足下郡高田郷に所在したものと考えられる。

古くは『新編相模国風土記稿』に瓦の出土地として知られていたことが知れている。

紙数の関係があるため最近の研究を見ながら千代寺院跡について知られていることを簡単に述べていきたい。

千代寺院跡についての研究史的な方面での研究は、すでに岡本孝之によってまとめられている（岡本　1998）。



第１図　位置図(1/25,000)

本日我々が、概略を述べていこうとしていることについても多々重複している部分は多いと考えている。詳細については、岡本論文を参照していただきたい。

また寺院跡研究の上で重要な役割をなすと考えている古瓦についての研究は、河野一也の論文でほぼその時点までの調査の成果がまとめられていると言って過言ではないであろう（河野　1993）。　河野論文によれば、瓦の研究から創建時期を霊亀～天平初年（715年～719年）の間におき、８世紀第４四半期から９世紀前半に修復が行なわれたと考えている。

また本日述べる予定の、千代寺院跡およびその周辺の調査についての再検討も、昨年に岡本孝之によってまとめられている（岡本1999）。岡本論文によれば、伽藍配置は南面する法隆寺式で、創建時期は８世紀前半で、出土土器資料から10世紀前半まで存続していたとしている。

我々が述べることもその成果に基づいている点が多い。この点についても同様に岡本論文を参照していただきたい。

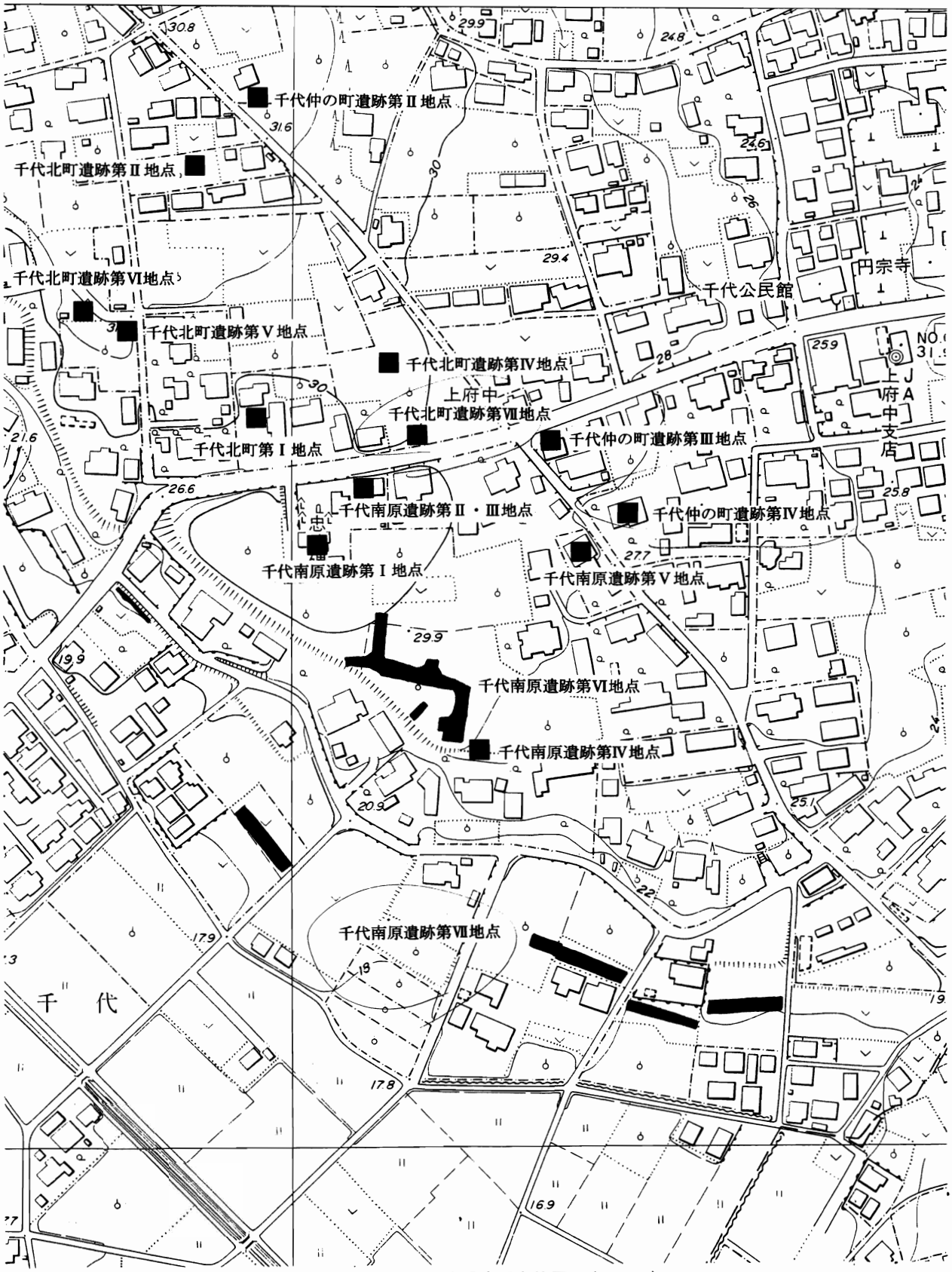
その後、昨年に我々が千代南原遺跡第Ⅶ地点の調査を行ない、低湿地の遺跡から２枚の木簡を発見した。そのことから千代寺院跡及び周辺の遺跡に対する関心が、考古学・文献史学両方から高まり10月にはシンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」と題した研究会が開かれた（注１）。

本日は、これらの点を踏まえた上で最新の研究成果から千代寺院跡について述べてみたい。

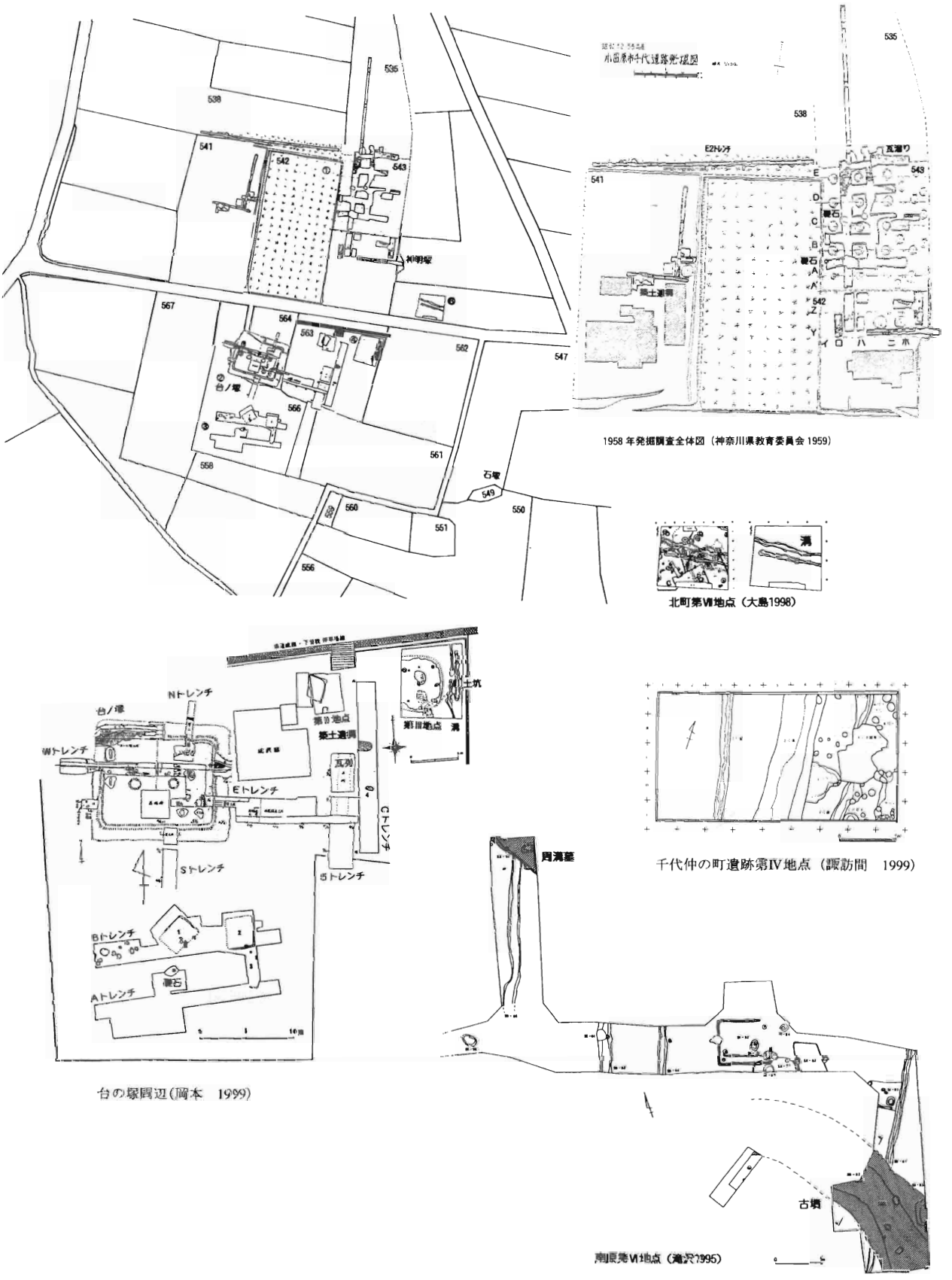
（注１）小田原市教育委員会・神奈川地域史研究会共催によるシンポジウムで、その成果は『神奈　川地域史研究』第18号（2000年３月刊行予定）に掲載されるはずである。

引用文献

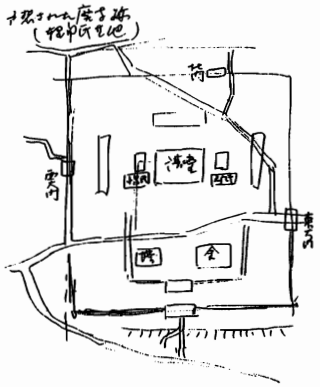
岡本孝之　1998「千代寺院跡の研究史的復元」『神奈川考古』第34号
1999「千代寺院跡の再検討」『小田原市郷土文化館研究報告』No.35（人文科学No.18）
河野一也　1993「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅳ）」『神奈川考古』第29号



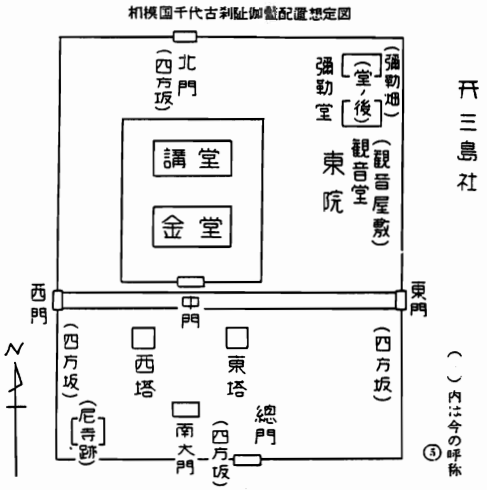
第２図　千代寺院跡関連調査位置図(1/2,500)



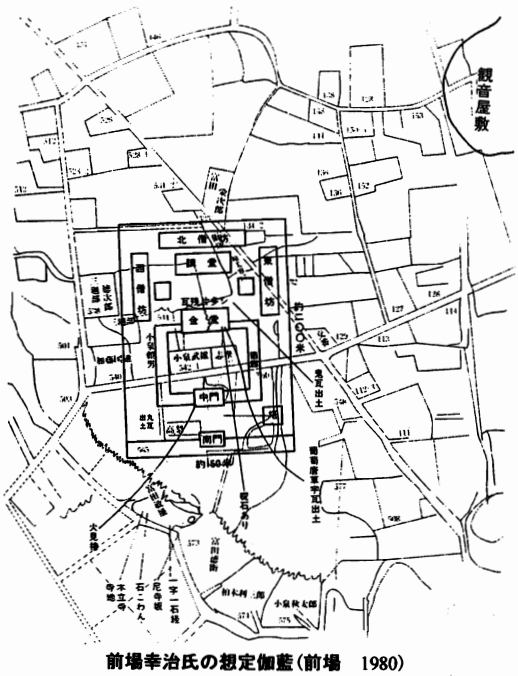
第３図　千代寺院跡調査位置全体図・関連調査全体図（岡本　1999を引用改変）



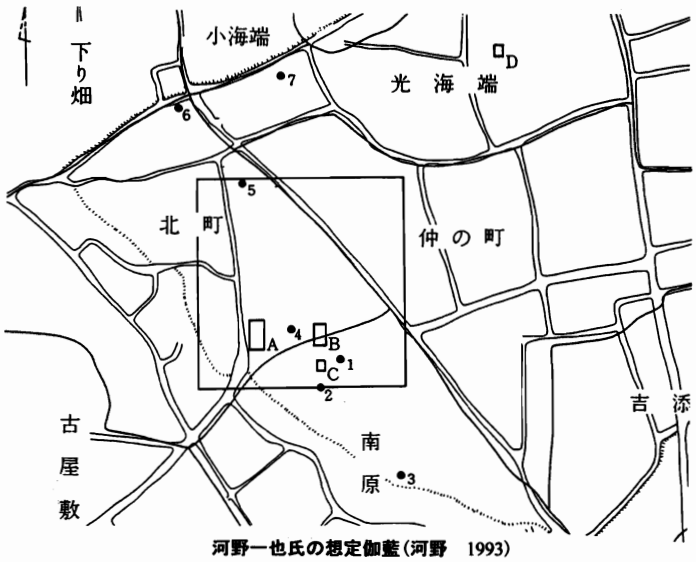
赤星直忠氏の想定伽藍(岡本　1998)



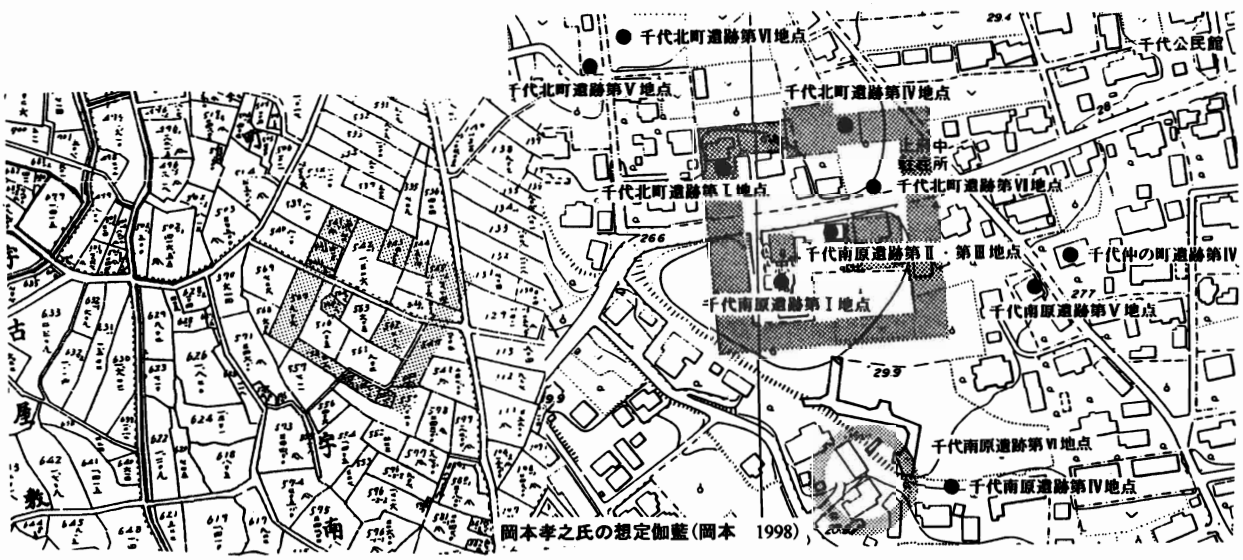
石野瑛氏の想定伽藍(石野　1961)



前場幸治氏の想定伽藍(前場　1980)

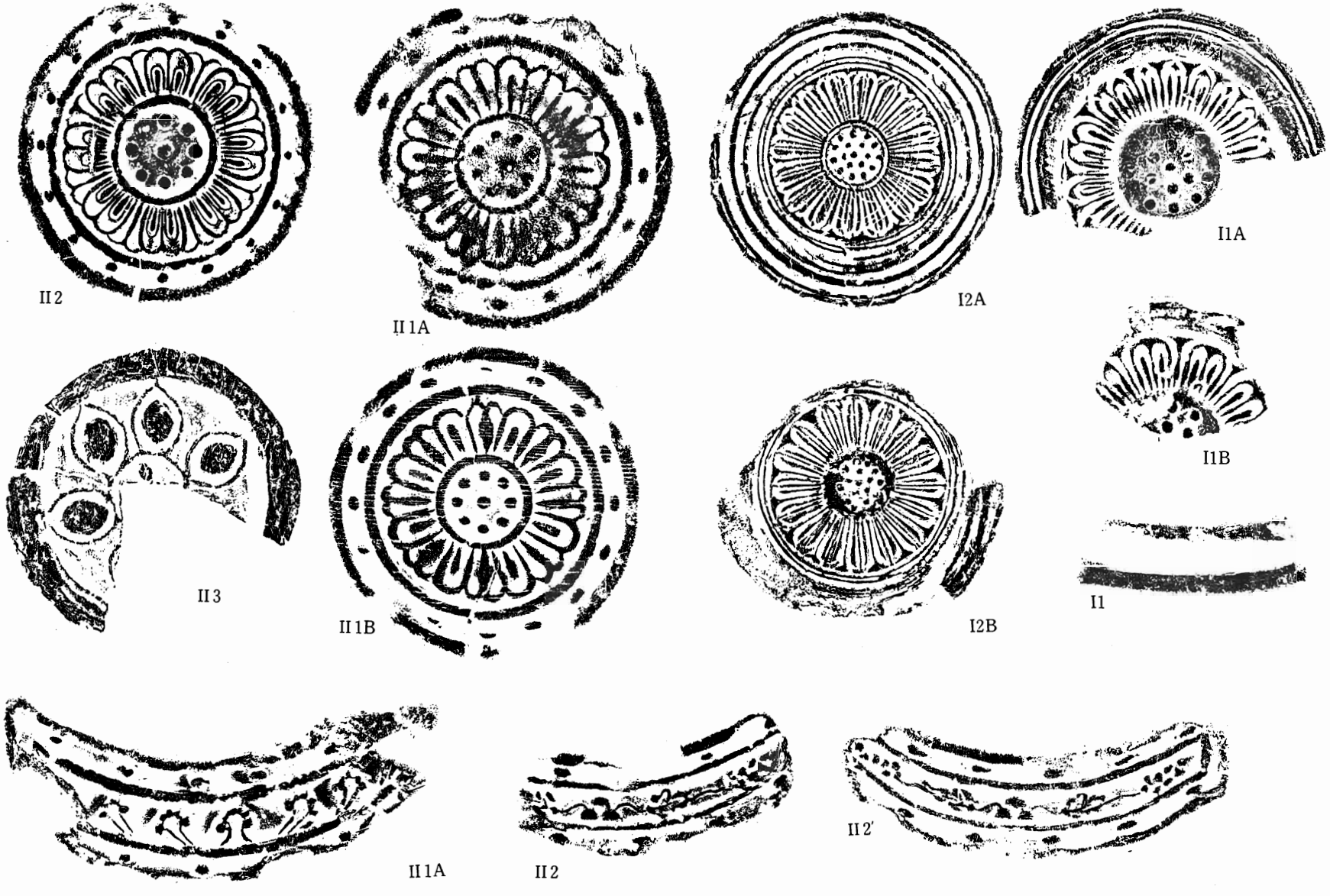


河野一也氏の想定伽藍(河野　1993)

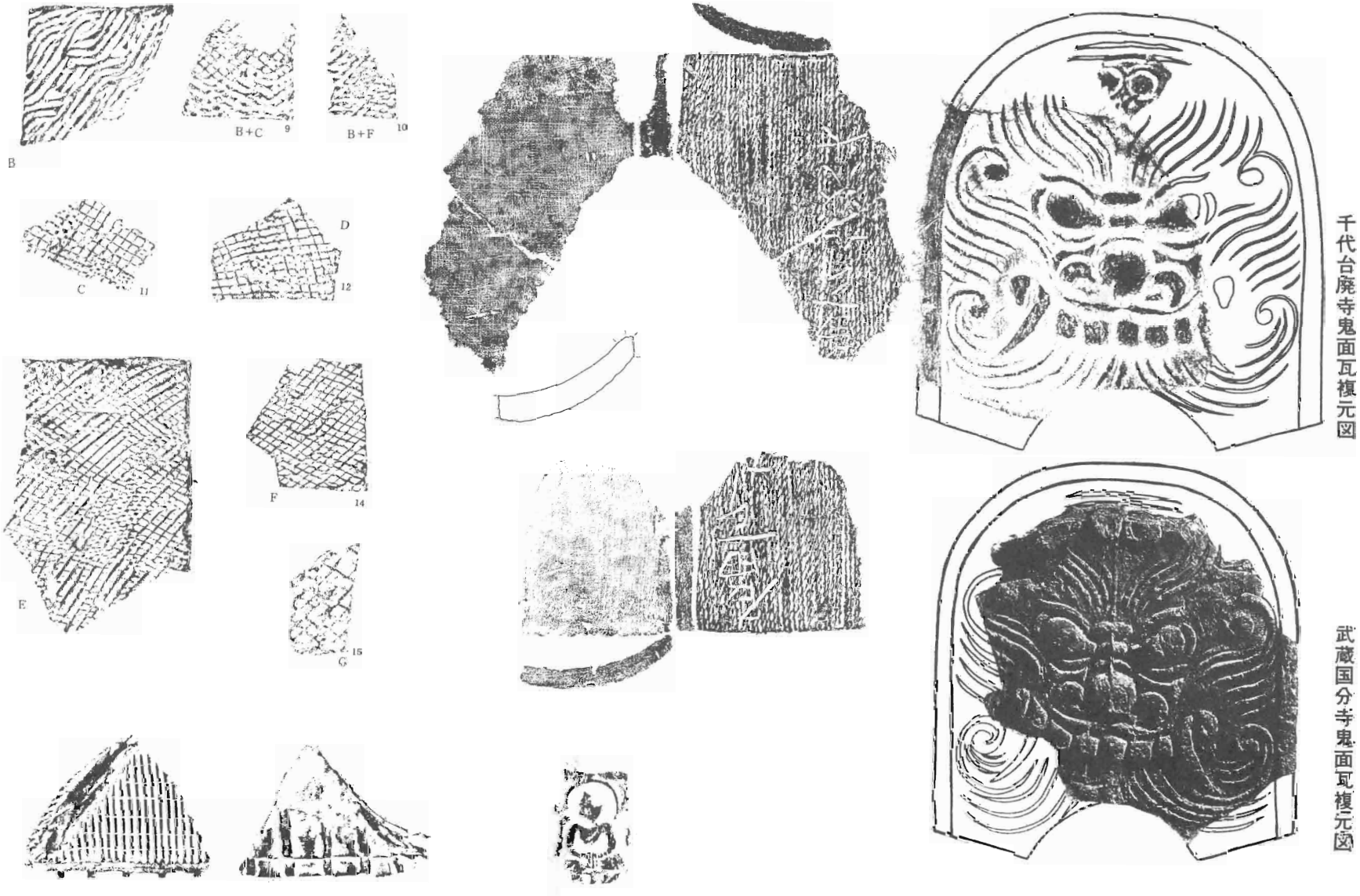


岡本孝之氏の想定伽藍(岡本　1998)

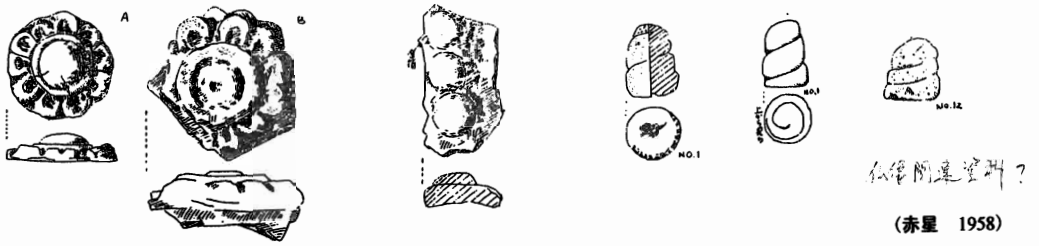
第４図　伽藍配置推定図



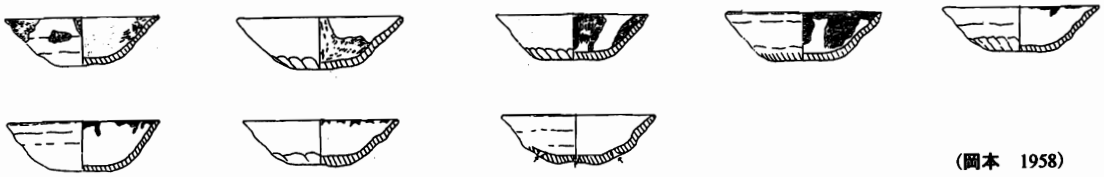
第５図　出土瓦（１）・（河野　1993 を引用改変）



第6図　出土瓦(2)・(河野　1993 を引用改変)・鬼瓦復元図・瓦塔(前場　1980)　・磚仏

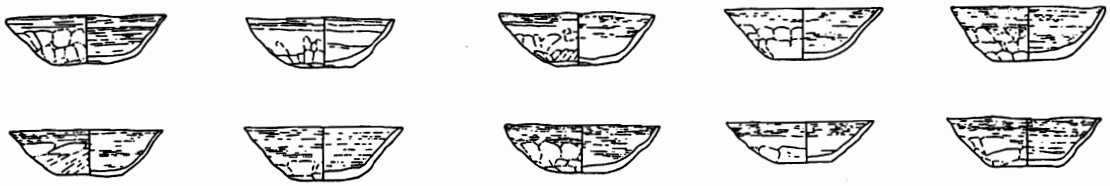


（赤星　1958）

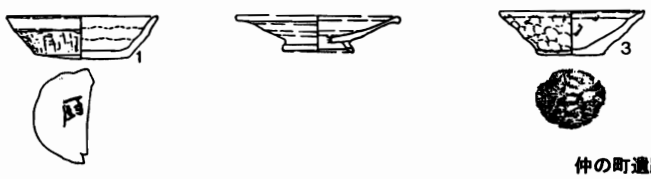


（岡本　1958）

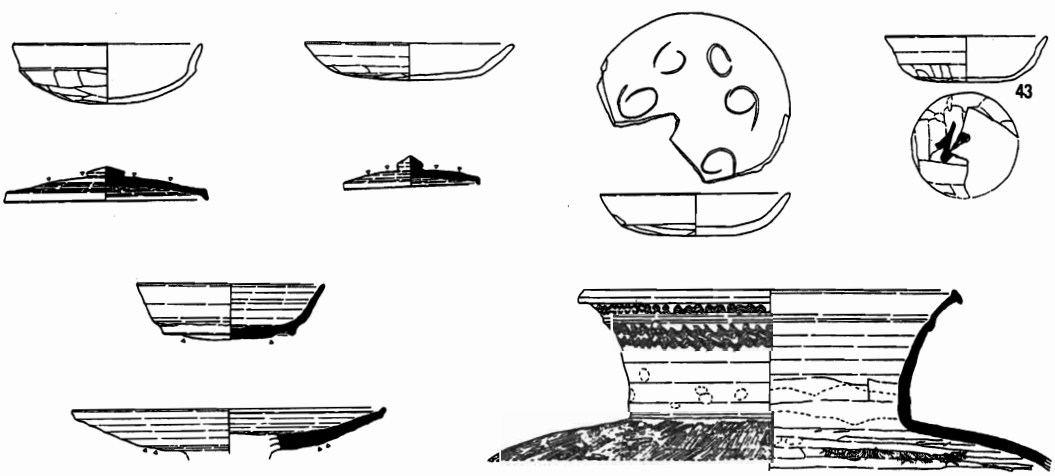
南原遺跡第Ⅰ地点（杉山 1972）



南原遺跡第Ⅲ地点（塚田　1986）

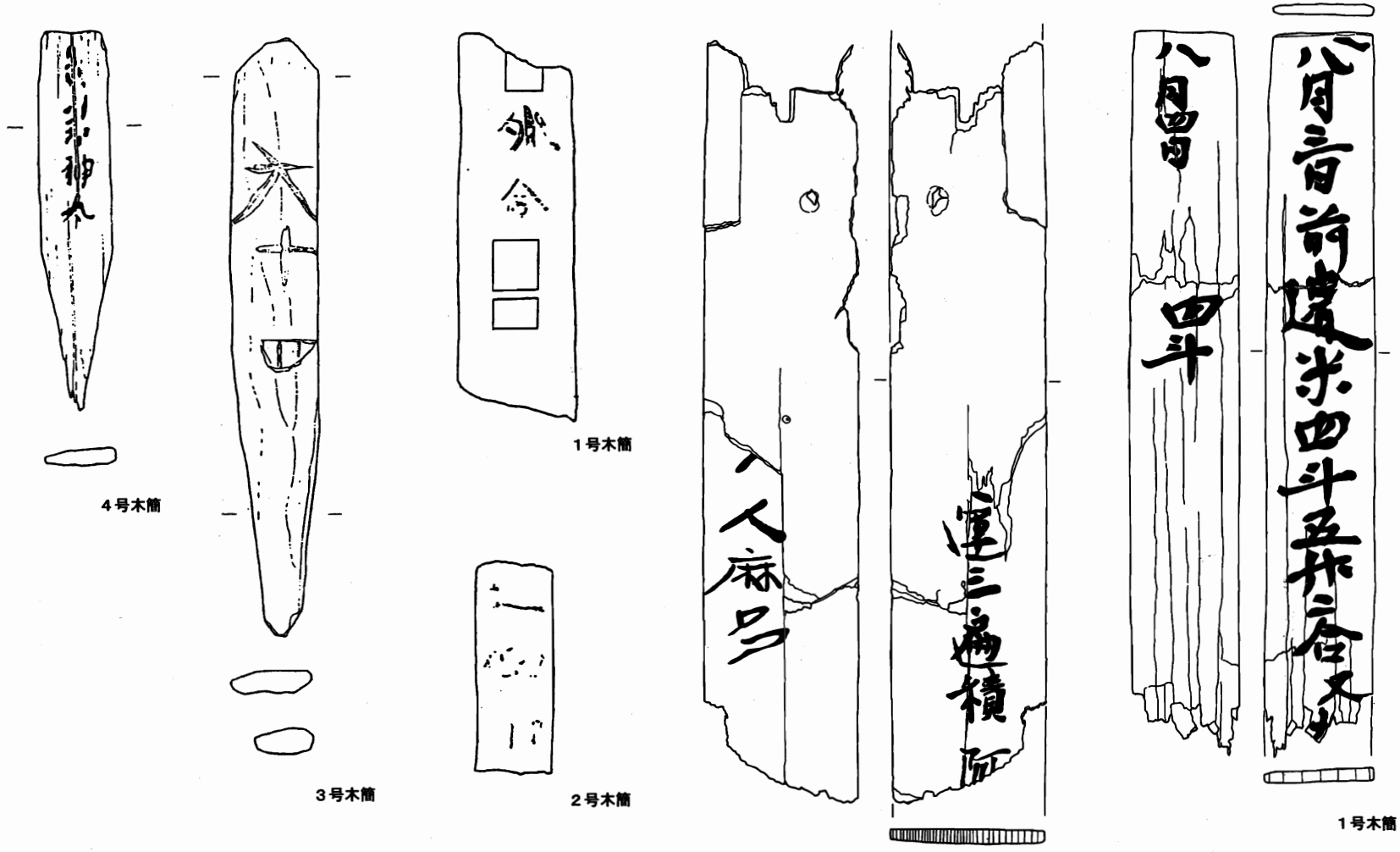


仲の町遺跡第Ⅳ地点（諏訪間　1999）



南原遺跡第Ⅶ地点（小出・小池　1999）

第７図　出土遺物



1号木簡　2号木簡

千代木簡

1号木簡　2号木簡　3号木簡　4号木簡

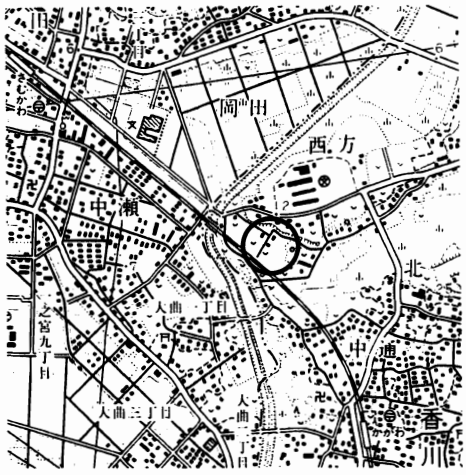
下曽我木簡

第8図　木簡

茅ヶ崎市　下寺尾寺院跡

岡本孝之

所 在 地　茅ヶ崎市下寺尾字西方（高座郡寒川郷？）
創建年代　７世紀後半
廃絶年代　10世紀頃
伽藍配置　推定法起寺式
規　　模　伽藍中枢部推定100m×50m
関連古墳　石神古墳



下寺尾寺院跡位置図（1/25000）

はじめに（第１図）

下寺尾寺院跡は今から60年前、木島鄰氏、鶴田栄太郎氏ら地元の郷土史家の関心にのぼり、石野瑛氏に知らされた。1941年に石野氏らの主宰する神奈川県郷土研究連盟らの史跡めぐりと講演会が市内で開催され、その成果は『相武研究』第10巻第８号に「相模茅ヶ崎史観」として報告され広く知られることになった。

茅ヶ崎の郷土史研究を積極的に進めた鶴田氏は、下寺尾寺院跡を七堂伽藍跡として相模国の曙光の地として位置づけ、1957年12月には郷土史を学習する農民ら142名を結集して七堂伽藍碑を建立した。石野氏は1952年に現地を始めて踏査し（石野1957）、発掘調査も計画した。

発掘調査は市制30周年の市史編纂事業のため、岡本勇氏により1978年夏に実施され、①礎石、瓦、灯明皿などの発見から寺院跡とした。②年代は平安時代中頃以降（後に前半ないし中頃と訂正）。③Ⅲトレンチの溝発見の瓦の出土状況から寺院は年代的に幅がある。④寺域を造成している。⑤テストピットからみて寺域は広大。などの諸点を知りえたのである（岡本勇1978・1981）。

赤星直忠氏は平安時代初期と考えたが（赤星1979）、河野一也氏らは瓦の製作技法から国分寺以前の寺院であることを指摘して（関東古瓦研究会1984、河野・山下1991）、考古学的な関心を深めることになった。折しも茅ヶ崎市教育委員会による発掘調査が西方Ａ遺跡（大村他1989）、西方Ｃ遺跡（富永1989）、七堂伽藍跡（下水道地点）（大村1997）などで実施され、寺院跡の再検討も小竹実佳子氏、國平健三氏らによって進み、７世紀後半にさかのぼることが認識されてきた。

川嶋（小竹）実佳子氏と川嶋慎一氏らが進めてきた瓦の整理研究を基礎に、もっと広く市民有志に広げて報告書を作成しようと下寺尾寺院跡研究会（会長岡本孝之）が1995年に結成され、1997年12月に『下寺尾寺院跡の研究』（以下報告書という）が刊行され、年代的に７世紀後半の建立説に加わるだけでなく、寺院の伽藍配置についても積極的に推定した。1994年からは下寺尾・香川地区の土地区画整理事業にともなう発掘調査が隣接地で継続的に実施され、寺院に関連する遺構・遺物が発見され（中村1997ab・1999）、寺域内においても1997年に下水道にともなう発掘が実施されて柱穴や礎石が発掘され（渡辺1998）、実態究明のための資料が増加してきた。

1　出土瓦（第8図、第2表）

瓦については河野一也氏らによって3群に分類されているが、報告書作成では国分寺以前のⅠ群と、国分寺以後のⅡ群に区分した。

Ⅰ群瓦　平瓦は表の布目面に製作台の模骨痕（小札痕）が残される瓦で桶巻きつくりと呼ばれるが、製作方法には疑問があり、ここではあえて桶巻きつくりとはいわない。裏面の調整は縄目の叩き文を残すものとそれをナデ消しているものがある。格子目の叩き痕は認められない。

これをＡＢＣと3分類した。Ａはもっとも丁寧なつくりで表面の模骨痕の凸凹の凸部を削り落としているもので、表裏両面が調整されおり表裏両面に対応する製作台が必要とされるものである。厚さも薄く、粘土も良質のもので砂分は少ない。Ⅰ・Ⅱトレンチと L 区で出土している。Ｂは表面の模骨痕をナデて消しているもので、裏面は縄目の叩き痕を残している。Ｃは模骨痕をそのまま残しているもので、裏面は縄目の叩き痕をナデ消している。砂分が多くなり厚みを増す。

丸瓦は無段式（行基葺き）と有段式（玉縁付き）とがある。有段式丸瓦は L 区でまとまって出土した。Ⅰ・Ⅱトレンチの丸瓦はⅡ群も含めて無段式だけで、Ⅲトレンチでは1点だけ出土した。

下寺尾Ⅰ群Ａ平瓦は鎌倉郡寺、宗元寺跡でも出土している。武蔵の弘明寺跡でも裏面は叩き痕を残すが同様なものがあり、影向寺跡では凸面布目瓦で裏面の凸面に同様な削りが認められる。このような表裏両面における作業が必要な手順が認められるのでいわゆる桶巻きづくりの技法とは違うものが復元されなければならないと思う。

また丸瓦は無段式の行基葺きが一般的であるが有段式が認められることが注意される。神奈川県内では国分寺以外ではほとんどなく、川崎市岡上寺院跡で有段式丸瓦が出土している程度である。

Ⅱ群瓦　いわゆる一枚つくりの平瓦をⅡ群瓦とした。粘土で2種に分けられ、裏面の叩き痕から板目（ａ）と縄目（ｂ）の2種に分けられた。ｂは国分寺瓦と一致し、生産地は瓦尾根瓦窯跡であり、ａは不明である（河野他1991）。丸瓦は無段式だけであった。Ⅰ・Ⅱトレンチでまとまって発見されたが、Ⅲトレンチや L 区ではごく少数しか発見されなかった。出土区別の瓦の点数と重量を第2表に示す。総点数は接合後のもので、約40点が接合している。

2　伽藍配置の復元（第1表、第1図）

Ⅰ・Ⅱトレンチ、Ⅲトレンチ、L 区での瓦の特徴や出土状況がそれぞれ異なることからその周辺に異なる建物があったと推定した。

西側に位置するⅠ・Ⅱトレンチでは多量の瓦の下から灯明皿一括が出土した。灯明皿群はもっとも深い位置から出土しているので祭祀に用いられた後に一括して土坑に埋納されたものと推定され、その後に寺院の建物が倒壊して瓦群が残されたものと考えられる。灯明皿群は寺院の建物の前面に埋納され、その北側に建物があったとみられる。

Ⅲトレンチでは溝状遺構に瓦が敷かれていた。北側に建物跡が想定される。L 区では集積状態の瓦が

発見されたと報告されたが、出土状態の写真と出土瓦の観察から小さく割れた瓦が一面に敷き詰められていた状態、瓦敷遺構と思われ、隣接して建物跡が存在する可能性が強い（ただし、想定図ではやや離れており第４の建物に関連する遺構・遺物と判断すべきものかもしれない）。

建物の規模はいずれも確認できないが、３棟の建物が推定されると配置は法隆寺式か法起寺式と思われる。そしてこれらを取り囲む回廊跡（第６図）が北西部の下水道工事関連の調査で確認されている。報告者はこれらの掘立柱列の性格については内容を明らかにするには至っていないとするが、未確定のものも含めると２組の掘立柱列が復元され、その方向性（N -76° - W）から回廊跡と判断され、伽藍地の方位性（N -14° - E）が決定されたのである。

礎石の原位置が判明しているものが２点あり、いずれもＬ区周辺の農地の出土で２点とも台座の造り出しのあるものである。Ｌ区の北側の下水道工事関連の調査（第１図10）（渡辺1998）では４点の礎石が移動させられた状態で出土したが、北側建物か東側建物に関連するものであろう。

3　伽藍域周辺の遺構（第１図）

西方Ａ遺跡（第１図４）の竪穴住居群（第２・３図）は７世紀中ころの１軒と後半の５軒、７世紀代の１軒がほぼ同一の方向性をもって発見されている。これらの竪穴住居群は寺院の建設の開始期（７世紀中頃）とほぼ竣工した時期（７世紀後半）を示しているものと推定される。

西方Ａ遺跡Ｉ区発見の区画溝（第３・４図）は大量の馬骨が出土して注目された平安時代のものであり、寺院の背後に位置していることから僧坊の区画溝と推定したものである。馬骨の解釈では松井章氏の研究に注目する（大村他1988）。

西方Ｃ遺跡（第１図６）の掘立柱穴（第５図）は部分的な緊急調査の成果（富永1988）であったためあまり注目はされてこなかったが、柱穴の規模が大きいこと、配置が複数あり企画性があると想定されること、重複もあることなどから大規模な建造物が想定できる。方位は確定できない。

旧河道と祭祀行為（第１図８）これは寺院跡の南側の遊水池建設用地の発掘（中村1997b）で小出川の支流の駒寄川の旧河道が発見され、その中から９世紀中葉～10世紀前半の土師器坏・須恵器坏の完形品15個体を含む遺物群が比較的まとまって出土しており、甲斐型土師器坏や墨書土器（具・大町・田３）５点が含まれていた。また浄瓶、厨の墨書土器（９世紀後半）なども出土した。この河道は10世紀前半頃を境に滞水、湿地化が始まったとみられている。

大形掘立柱建物跡（第１図９、第７図）これは寺院跡の存在する自然堤防地形の南東隅に位置する地点から大規模な掘立柱建物跡が２棟ほぼ向きを並べて発見されたものである（中村1999）。いずれも西側の調査が十分でなく東側のみ確認されたものであるが、１号は桁行３間（あるいは３間以上）の総柱建物と推定される。柱穴の掘り方は約１m四方である。その南側に位置する２号は桁行４間、梁行２間以上の側柱式の建物と推定されている。主軸の方位はN -3~5° - Eであり、柱筋はほぼ一致する。これらの柱穴からは７世紀後半の土師器、須恵器が発見され、性格については寺院創建期の倉庫などの雑舎

群、豪族の居宅などとも推定されるとしている。またこれらの西側で発見された１号焼土址からは７世紀後半の土師器（坏・甕・高坏など）、須恵器（坏・蓋など）が出土した。また時期不明の井戸が発見されている。

4　寺院跡周辺の遺跡

寺院を建立した主体としては近辺にある篠山横穴墓群、篠谷横穴墓群が注意されるが、茅ヶ崎駅構内で発見された石神古墳に注目したい。これまで前方後円墳説が石野瑛氏から提出されていたが、出土遺物や石室の形態から７世紀中頃であると推定されたこと、公図と隣接して確認された２号墳の形態からみて方墳の可能性が強い（岡本1996）。寺院建立直前の古墳である。

関連するものとして古代東海道の道路遺構が部分的ではあるが小和田の大山街道から昨年発見された。この古代東海道と現在の小出川が交差する香川間門（かっぱどっくり伝説がある）と西久保の堰の建設工事で出土した墨書土器群（大村1993）は年代的な幅が少しあり必ずしも一括出土とは決められないが、寺・市・東などの文字が認められて注目される。道路と川との交点であるので周辺に市の存在を想定したい。

また小出川の下流に国史跡の旧相模川橋脚跡があるが、この遺跡の年代や性格の問題は未解決であり、古代の可能性、港の施設であるという可能性が指摘されている。もし古代の港関係の施設の可能性が積極的に認められるならば寺院跡や郡の役所との関係で注目されよう。遺跡自体の保存の問題もあり、再調査の必要性が指摘されているが再調査することによってこれらの問題は解決できるものと考えている。

なお注目されるのは当時の自然環境の変化である。上本進二氏らによって地形の時代的変遷の復元が試みられているが（上本他1999）、古墳時代中後期に小出川の流路がそれまで旧相模川の自然堤防の東側を東流していたものが、その大規模な自然堤防を割って西に流路を変えていることに注目したいと思う。これは自然的な原因による変化ではなく、人為的な行為と考えられ、この流路の変更によって旧相模川の河道跡の排水が進められ耕地の確保が大幅に進められたのであろう。出土した墨書土器群はそのような場所における祭祀行為の痕跡と思われる。さらに木簡の発見された居村Ｂ遺跡の性格は郡の役所や寺院の関連する祭祀の場として理解したい。

5　今後の課題

軒丸瓦や軒平瓦が出土していないことから研究対象としての寺院とはなりにくかったのではあるが、大量に出土する平瓦や丸瓦の検討なくして何の瓦研究、寺院研究、古代の考古学研究であろうかといいたい。千代寺院跡や国分寺跡の調査では大量の瓦がトレンチに埋め戻されたり、麻袋に入れられて放置されていたのがこれまでの研究の現状であったのだが、そのような一見平凡にみえる平瓦や丸瓦を丁寧に観察することから神奈川県の古代寺院の実態にアプローチできるのである。

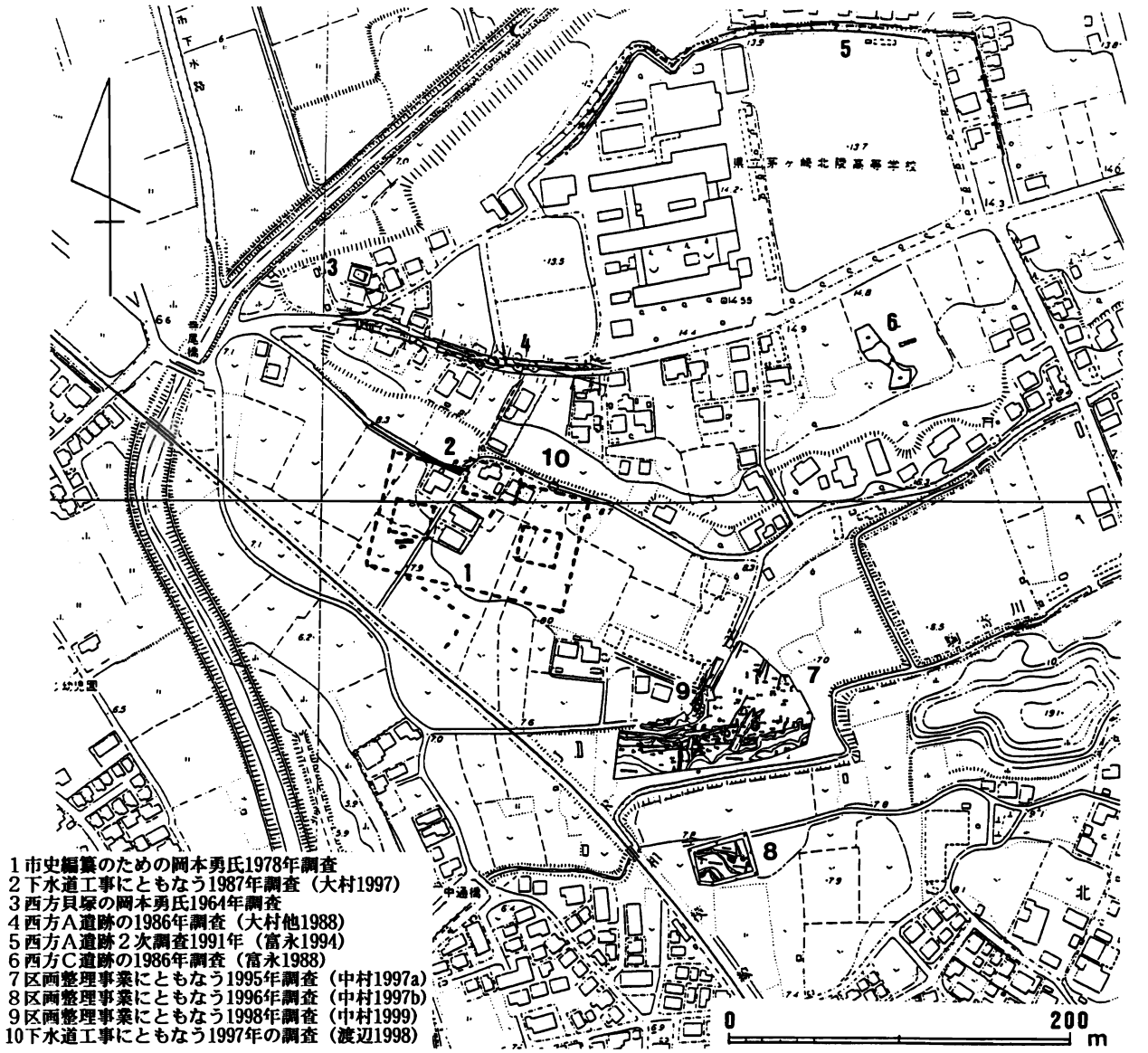
寺院の創建期については７世紀後半の竪穴住居だけでなく、大規模な掘立柱建物跡も発見され蓋然性

が強まった。伽藍域内でも７世紀後半の土師器坏が出土している（第９図上段３点）。Ⅱ群の瓦は９世紀前半と推定され、寺院の改修に使用されたとされるがⅠ・Ⅱトレンチ付近の西側建物が改修されていたことが判明しているだけで他の建物についてはまだ確認がとれていない。西側建物の前面に多量に埋納されていた灯明皿群（第９図中段６点）も９世紀前半のものである。Ⅲトレンチの溝より上の層位から９世紀後半から10世紀ころの土師器（第９図下段右）が出土しているのでその頃までは寺院は存続していたと考えられ、南側の旧河道の埋没が10世紀前半に始まることと符合する。ごく大つかみではあるが寺院の規模は地形的な制約から中心部の伽藍中枢部は100m×50m程度、周辺施設を含んだ寺院内は200m四方ほどと推定している。寺院の創建や改修は仏教文化の単なる流入や受け入れではなく古代政治社会の新たなる出発を象徴しており、東北の蝦夷戦争と密接に関連していることは明らかである。富士山の火山活動の活発な時期でもあり、自然災害の多い時代でもあった。寺院の性格究明には多方面からの検討が必要である。

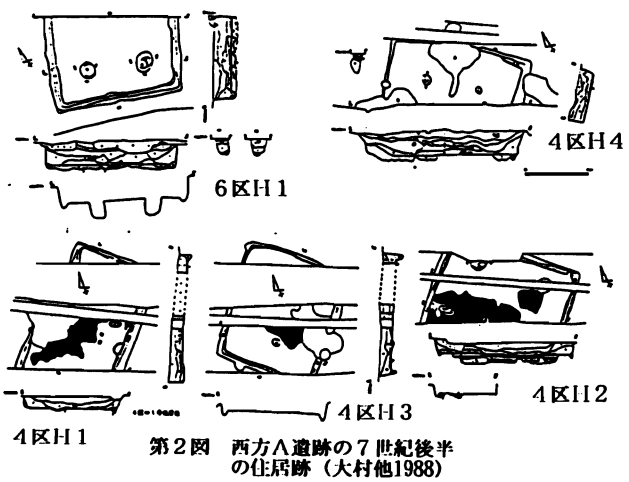
下寺尾寺院跡については、まだまだ情報が足らず、推定に推定を重ねている。今後は計画的な発掘調査を実施し、その実態を究明して寺院跡を遺跡公園として保存し、出土品などの研究・学習の場としての博物館の建設が大きな課題としてある。

文献

赤星直忠1979 『神奈川県史』資料編　20考古
石野　瑛1941 「相模茅ヶ崎の史的概観」『相武研究』10-8
石野　瑛1957 「茅ヶ崎市下寺尾廃寺址」『日本考古学年報』５
上本進二他1999 「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『茅ヶ崎市文化資料館調査研究報告』７
大村浩司他1988 『下寺尾西方Ａ遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告１
大村浩司1993 「間門川出土の墨書土器について」『茅ヶ崎市文化資料館調査研究報告』１
大村浩司1997 「七堂伽藍跡発掘調査報告　公共下水道工事に伴う事前調査」『下寺尾寺院跡の研究』茅ヶ崎市文化財資料集12
岡本　勇1978 「七堂伽藍跡を掘る－茅ヶ崎市下寺尾遺跡調査概報－」『茅ヶ崎市史研究』３
岡本　勇1981 「『七堂伽藍跡』とその周辺」『茅ヶ崎市史』４通史編
岡本孝之1996 「石神古墳の再検討」『茅ヶ崎市史研究』20
河野一也1997 「相模国」『関東の初期寺院』関東古瓦研究会
河野一也・山下守昭1991 「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅲ）－相模国高座郡下寺尾廃寺の古瓦について－」『神奈川考古』27
富永富士雄他1988 『下寺尾西方Ｃ遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告２
中村哲也1997a 「香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区の調査」『第７回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
中村哲也1997b 「香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区北Ｂ地点」『第８回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
中村哲也1999 「香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区下寺尾廃寺地点」『第10回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
渡辺清史1998 「公共下水道工事関連遺跡調査」『第９回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
関東古瓦研究会1984 『第８回関東古瓦研究会資料その壱　相模編』
下寺尾寺院跡研究会1997 『下寺尾寺院跡の研究』茅ヶ崎市文化財資料集12



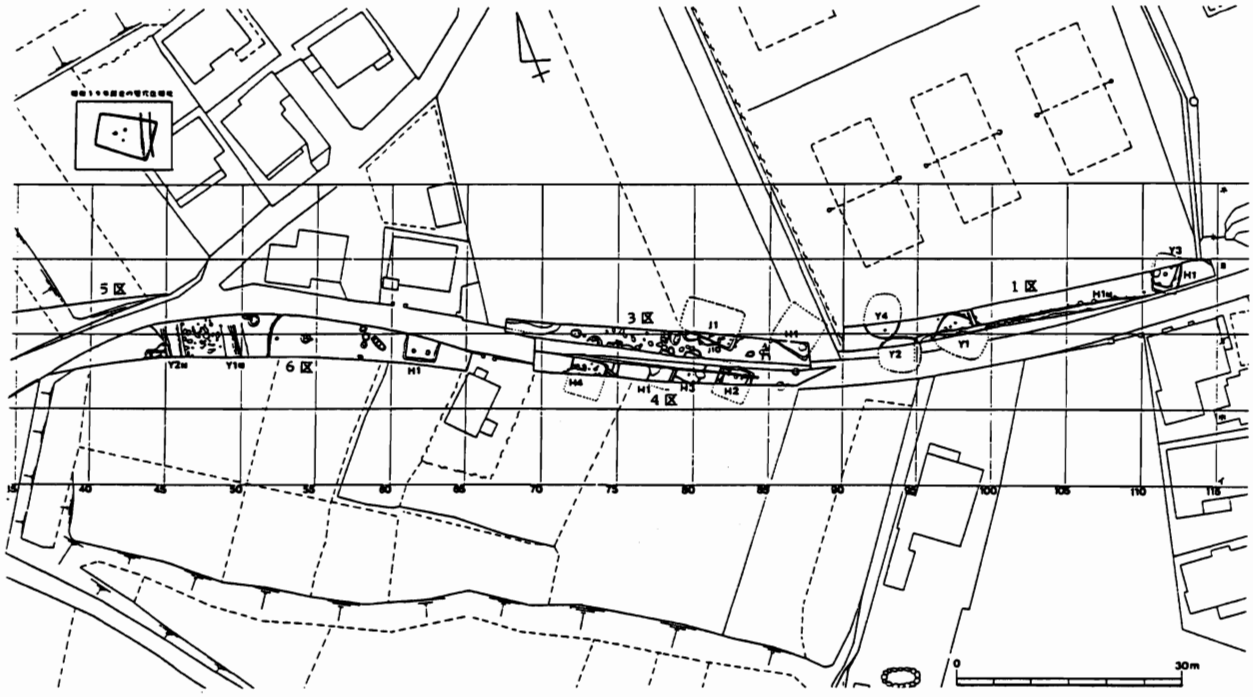
第1図　下寺尾寺院跡発掘調査と伽藍地想定図（1/4000）



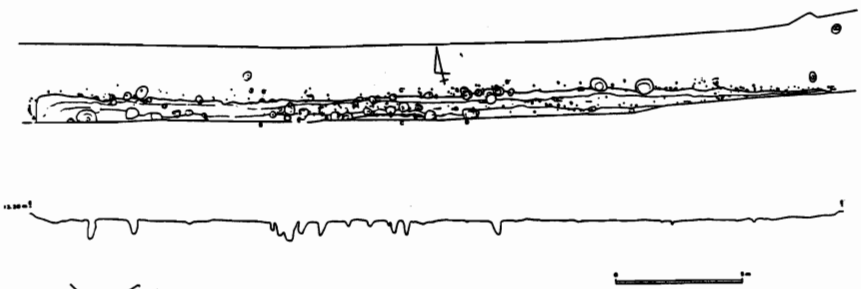
第2図　西方A遺跡の7世紀後半の住居跡（大村他1988）

第1表　下寺尾寺院跡伽藍配置復元の根拠

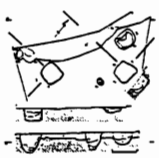
推定建物	西側建物	北側建物	東側建物
調査区	Ⅰ・Ⅱトレンチ	Ⅲトレンチ	L区
Ⅰ群丸瓦 平瓦 道具瓦	無段式 A・B・C 隅切瓦	無段式（有段式1点） B・C	有段式 A・B・C 面戸瓦
Ⅱ群丸瓦 平瓦	無段式 板目・縄目	なし 縄目	1点のみ なし
灯明皿	前面で万灯会か		
陶器類	灰釉陶器長頸瓶		
礎石	農道に移されたもの？	七堂伽藍碑周辺？	遺出礎石2点 1997年出土礎石4点
土壇		遺座堂跡（170番地か）	
関連遺構	前面に灯明皿埋納土坑	前面に区画溝（瓦出土）	瓦敷遺構？
推定堂塔	金堂か塔	講堂	塔か金堂
改修	9世紀に改修	不明	不明



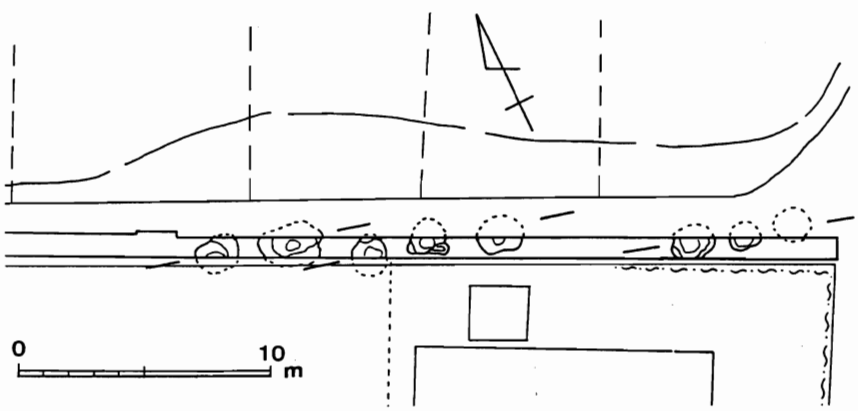
第３図　西方Ａ遺跡遺構配置図（1/1000）（大村他1988）



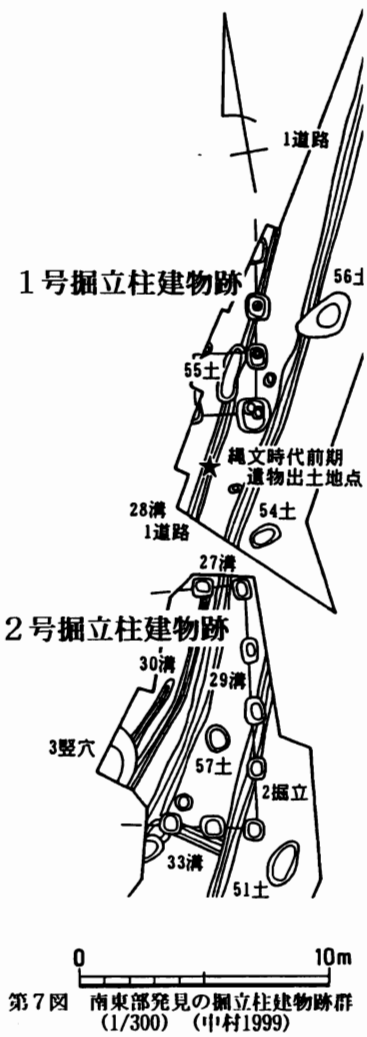
第４図　西方Ａ遺跡の区画溝（1/300）（大村他1988）



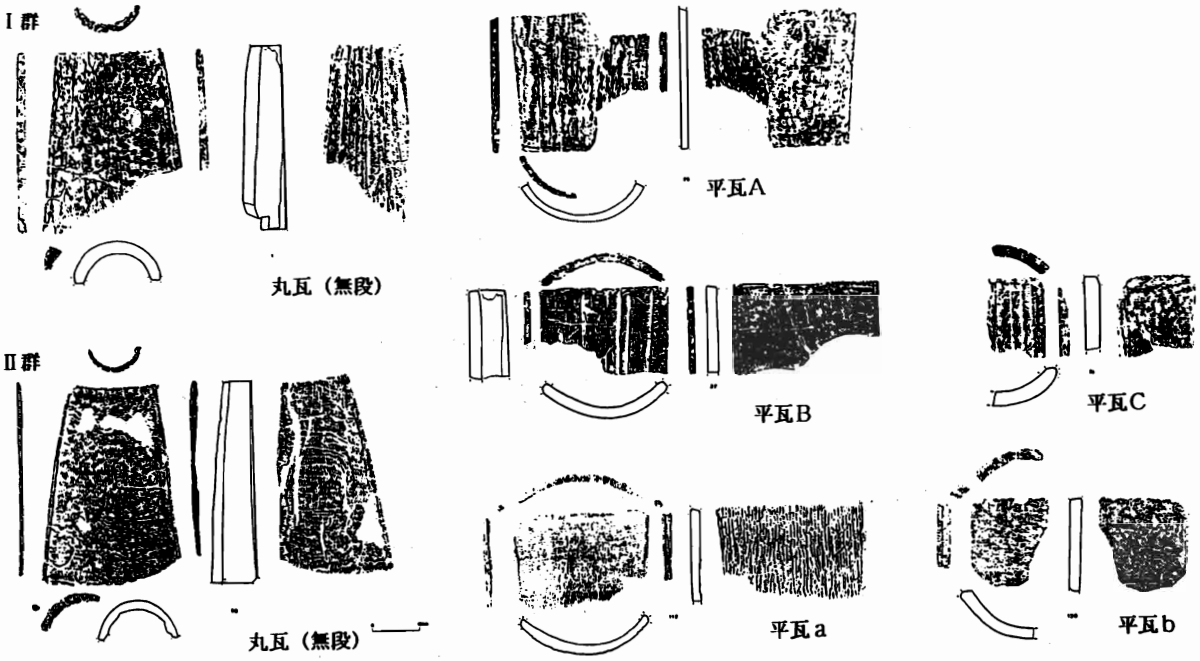
第５図　西方Ｃ遺跡の掘立柱建物跡（1/300）（富永1988）



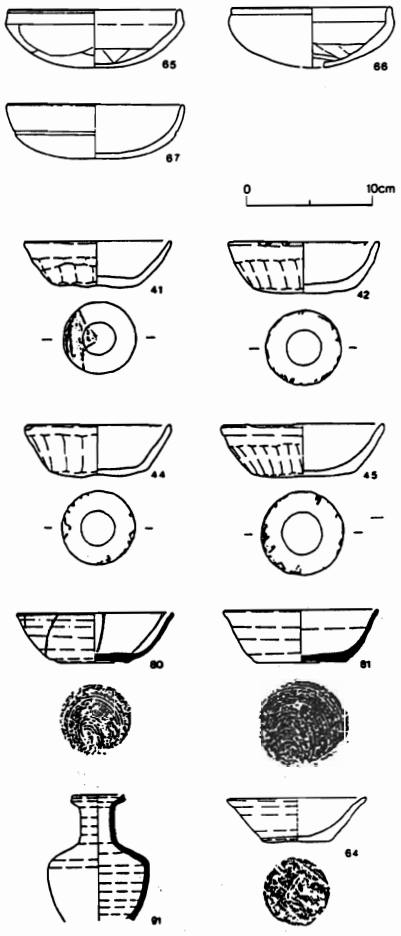
第６図　1987年発見の掘立柱建物跡（回廊？）（1/300）（大村1997）



第７図　南東部発見の掘立柱建物跡群（1/300）（中村1999）



第８図　下寺尾寺院跡出土瓦



第９図　下寺尾寺院跡出土土器

第２表　出土区別瓦点数・重量表

（上段：点数、下段：重量g）

	Ⅰ群丸瓦	Ⅰ群平瓦	Ⅰ群不明	ⅡA丸瓦	Ⅱa平瓦	ⅡB丸瓦	Ⅱb平瓦	合　計
Ⅰ・Ⅱトレ	33 10265.2	160 28716.6	11 176.1	16 9510.1	29 9281.0	7 2040.8	74 14243.4	330 74233.2
Ⅲ トレンチ	22 5014.6	103 11502.4	23 485.2				13 977.0	161 17979.2
A　区		2 271.5						2 271.5
B　区		1 30.8						1 30.8
C　区		7 319.3						7 319.3
D　区	1 145.0							1 145.0
E　区	2 116.1	9 497.6				1 25.7		12 639.4
F　区	1 100.2	1 69.8				1 46.1		3 216.1
G　区		1 26.7						1 26.7
H　区	1 50.2	1 52.1		1 52.6				3 154.9
I　区								
J　区		3 179.0						3 179.0
K　区	9 840.4	56 3834.6	5 61.4	1 16.4		1 43.9	2 96.8	74 4893.5
L　区	86 12827.5	223 18401.9	29 596.1	1 237.5				344 32063.0
M　区	1 74.7	5 340.6						6 415.3
N　区		3 216.5	1 6.4			1 8.5	2 74.6	7 306.0
その他	1 97.6	9 395.8		1 83.7			2 164.0	13 741.1
合　計	157 29531.5	589 64855.2	69 1325.2	20 9900.3	29 9281.0	11 2165.0	93 15555.8	968 132614.0

相模の古代寺院と瓦

河野一也

はじめに

相模国の古代寺院は８郡中の６郡に認められる。政策的には近江令から飛鳥浄御原律令をへて大宝律令に至る過程で、行政的な評(郡衙)と一帯となり、政治的な意図を持って必然的に発生したものと考えられる。古代寺院の認定が基壇と礎石の有無、古瓦の散布などによるため、掘立柱建物の草堂の建物を寺院と確定するには困難を極める。

近年は奈良時代中頃より発生する、いわゆる村落内寺院の類型化から、かなりの遺跡で寺院に関係する堂宇を推定出来るようになってきた。なかには瓦を使用しない建物が認められる。相模国の足柄下郡、愛甲郡の寺院もそういう形態であったものと考えられる。遺跡の調査で確認されることを希望したい。

隣国の武蔵国都築郡衙に付随する拝堂遺跡は時期的には７世紀代まで遡り、村落内寺院とは考えられず、瓦の出土もないが、布堀状の掘立柱建物であることなどから、都築郡衙に伴う郡寺と認めてよいであろう。

国分二寺についても国衙機構と一帯となった寺院としてまちがいないであろう。

今回は郡衙に伴う寺院と瓦を初期寺院、国分二寺と瓦との２時期に分けて考えてみたい。

1　相模国の初期寺院

初期寺院の中で文様瓦を出土する寺院は、足柄下郡の千代廃寺、鎌倉郡の千葉地廃寺、御浦郡の宗元寺と深田廃寺の４ヵ寺である。

千代廃寺の瓦は２時期に分けられ、創建段階の瓦はからさわ瓦窯で生産されたもので、鐙瓦は２種あり三重圏十葉複弁蓮花文鐙瓦で、中房が突出し蓮子は１＋６＋10、直立縁内側に線鋸歯文がみられるものと、みられないものがある。また、外区が剥離しているものもある。もう一種は三重圏十六葉細弁蓮花文鐙瓦で、中房は二重の圏線で表現され、蓮子は１＋６＋11である。男瓦部側面に「大佃工廿ノ」針書文字がある。さらに中房を改造し、突出させ、蓮子を１＋５＋10に配したものがある。男瓦との接合は凸面楔形に加工し、中央部付近に１ヵ所Ｖ字の切り込みを入れている。

宇瓦は二重弧文宇瓦で、幅12㎝の段顎、凹面に小札痕、凸面に縄叩きのものと、五重弧文宇瓦と最上弧を削り落とした四重弧文宇瓦がある。凹面に小札痕。凸面と顎部には格子、斜格子叩きがある。二重弧文宇瓦の生産瓦窯は不明である。また鬼面文鬼瓦が出土している。

Ⅱ期の鐙瓦も２種あり、殊文縁八葉単弁蓮花文鐙瓦、蓮子は１＋８、弁間には蓮弁状の間弁を配し珠文は16。大きさ、胎土、接合位置の違う２種があるが、笵キズより、同笵と思われる。もう１種は殊文縁八葉複弁蓮花文鐙瓦で、蓮子は１＋８、殊文は16である。瓦当厚が厚い。

宇瓦も２種ある。飛雲文宇瓦は凹面の３分の１程をヨコヘラケズリ、凸面は縄叩きで、下顎の部分に

線を入れている。胎土の違う２種がある。葡萄唐草文宇瓦は凹面側５㎝程をヨコヘラケズリし、凸面は縄叩きで下顎部分に線を入れているものと、凹面、凸面ともにヨコヘラケズリしている２種があり、胎土、焼成ともに違うが、同笵である。

千葉地廃寺からは三重圏六葉素弁蓮花文鐙瓦で、花弁端は円形反転形式で間弁は楔形で大きい。男瓦との接合は未加工の印篦付けで剥離面に反転された男瓦凹面の小札痕と布目が認められる。

宗元寺の文様瓦は２時期に分けられる。創建期の鐙瓦は、奈良・西安寺の忍冬文鐙瓦を同笵とするもので、宗元寺の鐙瓦の名称は、赤星直忠先生が呼称されたもので、敬意を表し、忍冬交飾蓮花文鐙瓦とする。西安寺と同笵品は現在２点が確認できる。その後、弁が短く、外区が高いもの、忍冬の割り込みが入り、４弁５忍冬になるもの、４弁４忍冬で全体が平坦になるもの、忍冬が剣菱状になるもの、４弁４忍冬で弁、忍冬とも簡略化したものなど、６段階の変遷が考えられるが、剣菱状のものからは時間的には若干遅れるであろう。宇瓦は三重弧文宇瓦で無顎である。胎土、技法より３種に分けられる。

２時期の鐙瓦は殊文縁八葉単弁鐙瓦で、千代廃寺と同笵である。宇瓦は飛雲文宇瓦で公郷瓦窯跡生産、千代廃寺、四之宮廃寺から出土している。

深田廃寺の鐙瓦は六葉有稜素弁鐙瓦と八葉有稜素弁鐙瓦がある。

相模国内の道具瓦（男瓦、女瓦、隅切瓦等）は各廃寺、瓦窯、推定瓦窯の出土瓦の検討から、からさわ瓦窯系、下寺尾型、三浦半島の石井瓦窯系、法塔瓦窯系、不明瓦窯のおおよそ５系統に分けられる。女瓦の叩き、胎土、作り方等から、古い順から見てみる。

下寺尾型は下寺尾廃寺、千葉地廃寺から出土し類似したものが宗元寺から１点出土している。石井瓦窯系は千葉地廃寺、宗元寺から出土し、生産瓦窯の不明な一群が、吹切遺跡にある。からさわ瓦窯系は叩きによりＡ～Ｇの７種あり、Ａ類は出土地は不明で現在のところ千代廃寺にも見られない。Ｇ類は千代廃寺と吹切遺跡から、Ｂ類は千代廃寺から、Ｃ類は千代廃寺、千葉地廃寺から、Ｄ類は千代廃寺、吹切遺跡から、Ｅ類は千代廃寺、吹切遺跡から、Ｆ類は千代廃寺、吹切遺跡、千葉地廃寺から出土している。これらの他に下寺尾に１枚作りで、板目叩きのⅡ群と縄叩きのⅢ群がありⅡ群の生産瓦窯は不明、Ⅲ群は瓦尾根瓦窯に類似している。また男瓦で特徴的なのは下寺尾型の男瓦で、凹面に小札痕が見られる。これは千葉地廃寺の男瓦にもみられる。下寺尾型の生産瓦窯は不明であるが、千葉地廃寺の生産瓦窯が石井瓦窯であることから、下寺尾廃寺の創建段階から石井瓦窯の初期の段階までは同一技法で作られたことがわかる。

これらのことから相模国の初期寺院は下寺尾廃寺を初現とし、千葉地廃寺、宗元寺、深田廃寺、吹切遺跡、千代廃寺の順に建立されていったものと推定される。

２　相模国分寺の造営

相模国の場合、国の仏教政策の一環として考えられる、初期寺院としての各郡の郡寺が完成に到る以前に、奈良仏教完遂の為の国分二寺の造営に着手した感が強い。

僧寺を南に尼寺を北に配し、僧寺・尼寺の中軸線で約６町の距離を置き、僧寺は東西約２町、南北約

3町の法隆寺式、尼寺は推定東西1町、南北2町の国分寺式の伽藍である。

僧寺の出土瓦は鐙瓦2種、宇瓦2種がある。

僧寺Ⅰ類鐙瓦は五葉単弁鐙瓦で中房の蓮子は1＋5、間弁は蕾状、外区には単弁と間弁に合わせて10個の珠文をめぐらす。文様は凸線で表現し、接合は接着法、2枚作りで男瓦との接合部に粘土を貼りつけ、裏面はナデ仕上げで中央が窪む。

僧寺Ⅱ類鐙瓦は六葉単弁鐙瓦と推定される。棒状子葉によって各弁がわかる。間弁は1本線によるが、みられない資料もあることから、弁数を推定とした。中房は1＋4、外区に16個の珠文がめぐる。接合はⅠ類に同じ。

僧寺Ⅰ類宇瓦は均正唐草文宇瓦で、中心飾りに僧寺Ⅰ類鐙瓦の間弁を配し、左右にC字状の唐草を下向きにし、さらに両端に向い上向きの唐草文を表現し、唐草文の先端の蕾も中心飾りと同じ表現をしている。直線顎で凹面は布目、広端面左右小口面をヘラ削りし、凸面は縄叩きで、顎部を横方向、それ以下は縦方向のものと、顎部から縦方向のものがある。

僧寺Ⅱ類宇瓦は均正唐草文宇瓦で、中心飾りから左右に上向きから下向きと二回転する簡略化された文様である。外区は設定されているが無文である。大振な宇瓦で、曲線顎の女瓦部との段が大きい。

鬼瓦は3種あり、うちの1点で3段に表現された鼻と吊り上がった目が突出し、歯牙があり、髭、髪、瞼は巻毛によって表現されている。

尼寺の文様瓦は鐙瓦2種、宇瓦2種ある。尼寺Ⅰ類鐙瓦は八葉単弁鐙瓦で、弁は重弁風、各弁の外側の線と接した線を組として2間弁を表現している。弁端には切り込みがある。中房は饅頭状に突出し、1＋8の蓮子がある。外区には16個の珠文がめぐる。接合は接着法で裏面は円周方向にナデ仕上げしている。

尼寺Ⅱ類鐙瓦は八葉単弁蓮花文鐙瓦で、尼寺Ⅰ類と同系で、弁の切り込みが深くなり、瓦当が薄くなる。

尼寺Ⅰ類宇瓦は左扁行唐草文で上向きで始まる唐草が7回転し、上向きで終わる。内外区の区別はなく、唐草上部に7個、下部に7個の珠文がある。凸面は縦方向の縄叩きで、直線顎と曲線顎がある。

尼寺Ⅱ類宇瓦は左扁行唐草文であるが、上向きから始まり、唐草が6回転し、下向きで終わり、尼寺Ⅱ類に比べて線が細い。珠文は上部に7個、下部に6個になる。凸面は縦方向の縄叩きの後、顎部下端をヘラ削りしている面取曲線顎である。

僧尼寺のⅠ・Ⅱ類はそれぞれⅠ類は創建期、Ⅱ類は再建期の瓦である。文様瓦に比して多量に出土する男瓦、女瓦類の生産瓦を含めて考えてみる。創建段階にはからさわ瓦窯のE・F類の瓦が5～7%、御浦郡の乗越系の瓦が10%前後含まれている。公郷系の瓦は40%前後あり、尼寺Ⅰ類の鐙瓦、宇瓦の生産瓦窯でもある。尼寺Ⅰ類の鐙瓦、宇瓦の生産瓦窯は不明である。僧尼寺Ⅱ類の再建期の鐙瓦、宇瓦、男瓦、女瓦類はすべて瓦尾根瓦窯で生産されている。また男瓦、女瓦類の中に模骨文字があり、男瓦は側端糸切り、女瓦は側端指ナデ仕上げという特徴的な一群がある。南多摩窯跡群から供給されたもので、補修瓦として使われたもので、時期的にはG25窯式期に含まれる。

3　まとめ

初期寺院の造営から相模国分寺の造営に至る過程を各寺院の古瓦と生産瓦窯の関係から、もう一度整理すると、下寺尾型と呼称したⅠ群とⅡ、Ⅲ群の間には作り方と出土量の比較から時期差があることは明らかである。つまり、下寺尾廃寺はⅠ群を創建瓦とする。次の千葉地廃寺の出土瓦は最も重要な出土傾向を示している。出土瓦は９分類でき、大きく６系統に分けられる。下寺尾型（Ⅰ群）、石井瓦窯系、生産瓦窯不明の一群、法塔瓦窯系、からさわ瓦窯系、乗越瓦窯系の順で生産されたものであろう。生産瓦窯不明の一群は板目平行叩きを消し、小札痕のあるものである。この中で主体を占めるのは石井瓦窯系で新たに築窯された。またからさわ瓦窯系、乗越瓦窯系は国分寺へも供給されている。宗元寺は石井瓦窯系、奈良・西安寺と同笵瓦を含む段階から造営が開始され、法塔瓦窯系が主体をなし、乗越瓦窯系、公郷瓦窯系で完成に至る。深田廃寺は法塔瓦窯系から造営を開始し、乗越瓦窯系で完成する。千代廃寺は深田廃寺と同時期頃に造営された。吹切遺跡は深田、千代廃寺と同時期に開始したが、完成は若干遅れたものと思われる。

相模国分二寺の造営には、僧寺と尼寺は別の造瓦体制で行なわれた。僧寺の創建瓦窯は文様瓦の生産瓦窯である公郷瓦窯が主体であるが造瓦体制が整うまでに、からさわ瓦窯系及び乗越瓦窯系の瓦が運ばれたものと思われる。千代廃寺出土の鬼面文鬼瓦と同笵あるいは同文の鬼瓦が武蔵国の大丸瓦窯から出土し、武蔵国分寺のⅠｂ期に当り、天平感宝元年（749）から天平勝宝７年（755）の年代が与えられている。僧寺からも千代廃寺と同文の鬼面文鬼瓦が出土している。

尼寺の創建瓦窯は不明であるが、同じくからさわ瓦窯系、乗越瓦窯系の瓦が出土していることから、僧寺にそれほど遅れることなく造営が開始されたものと思われる。

僧・尼寺の再建瓦窯は瓦尾根瓦窯で順次再建されたものであろう。

最後に実年代の示すものはないが、各寺院の造営順と少ない資料をもとに創建年代を推定したい。まず、からさわ瓦窯は横穴墓の墓道出土の湖西産須恵器、その上層から出土した畿内産土師器の高台付坏から８世紀第２四半期（神亀年間）から武蔵国分寺へ鬼面文鬼瓦の笵が移動した天平感宝元年（749）以前と考えられる。

千代廃寺の造営は養老年間から天平年間になる。また乗越瓦窯は１枚作りであり、恭仁宮造営後の天平14年（743）以後、公郷瓦窯は国分寺造営に伴って築窯されたロストル式平窯で、天平13～19年(741～747)頃には開窯されたものと推定される。国分僧寺の鬼面文鬼瓦も千代廃寺と同文であることからも天平感宝元年（749）以前には作られていたものと思われる。次に宗元寺の西安寺と同笵の忍冬交飾蓮花文鐙瓦は技法的には同時期にはしがたく、遡っても大津京以降と考えられ、造営の中心は持統朝から文武期と推定しておきたい。

深田廃寺は和銅から養老年間に造営が開始された。終了は天平初年であろう。千葉地廃寺は天武朝主体で持統朝まで、下寺尾廃寺は天智朝後半から天武朝の時期と推定しておきたい。

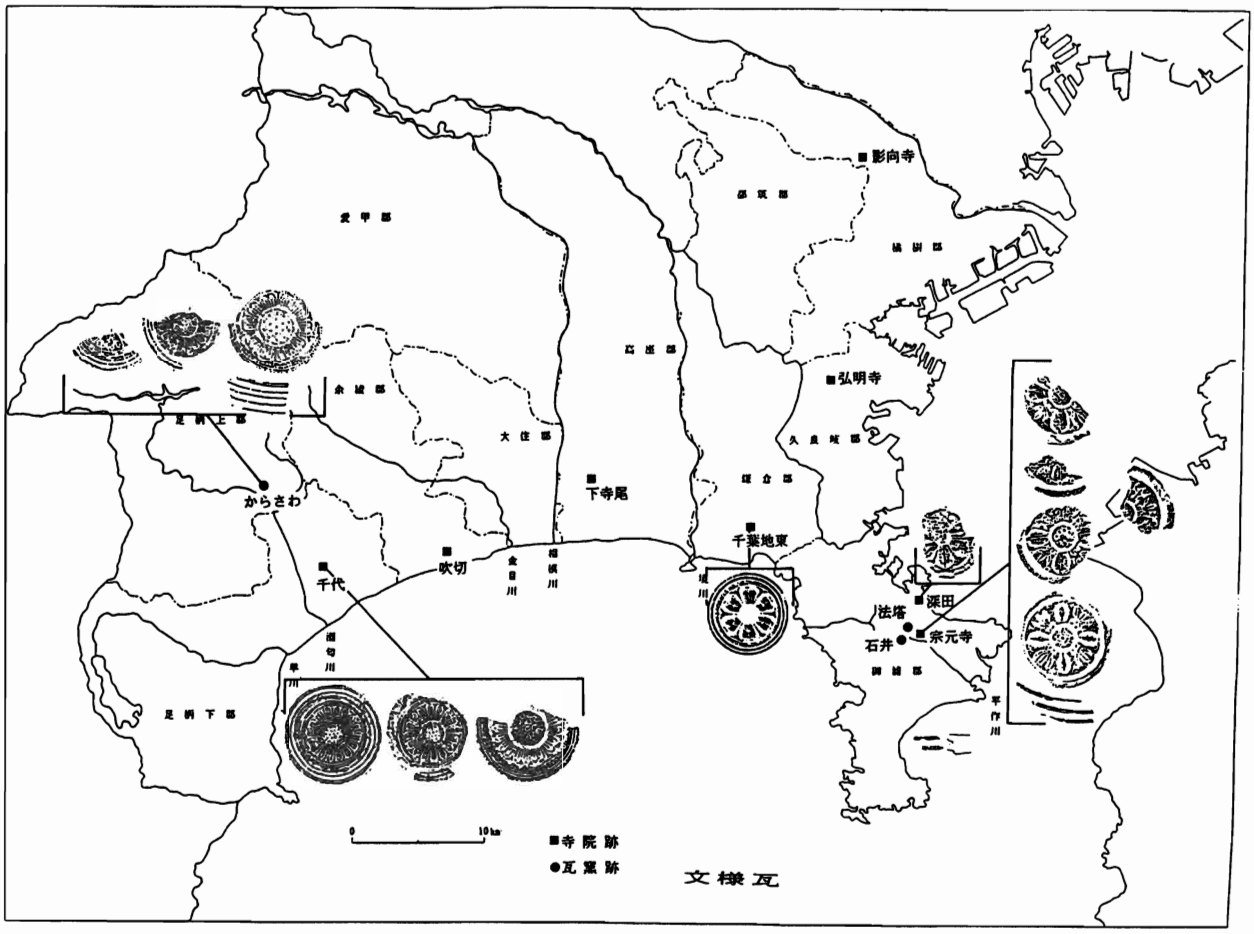
相模国分寺は天平年間には造営を開始し、再建は弘仁10年以降貞観元年頃までであろう。

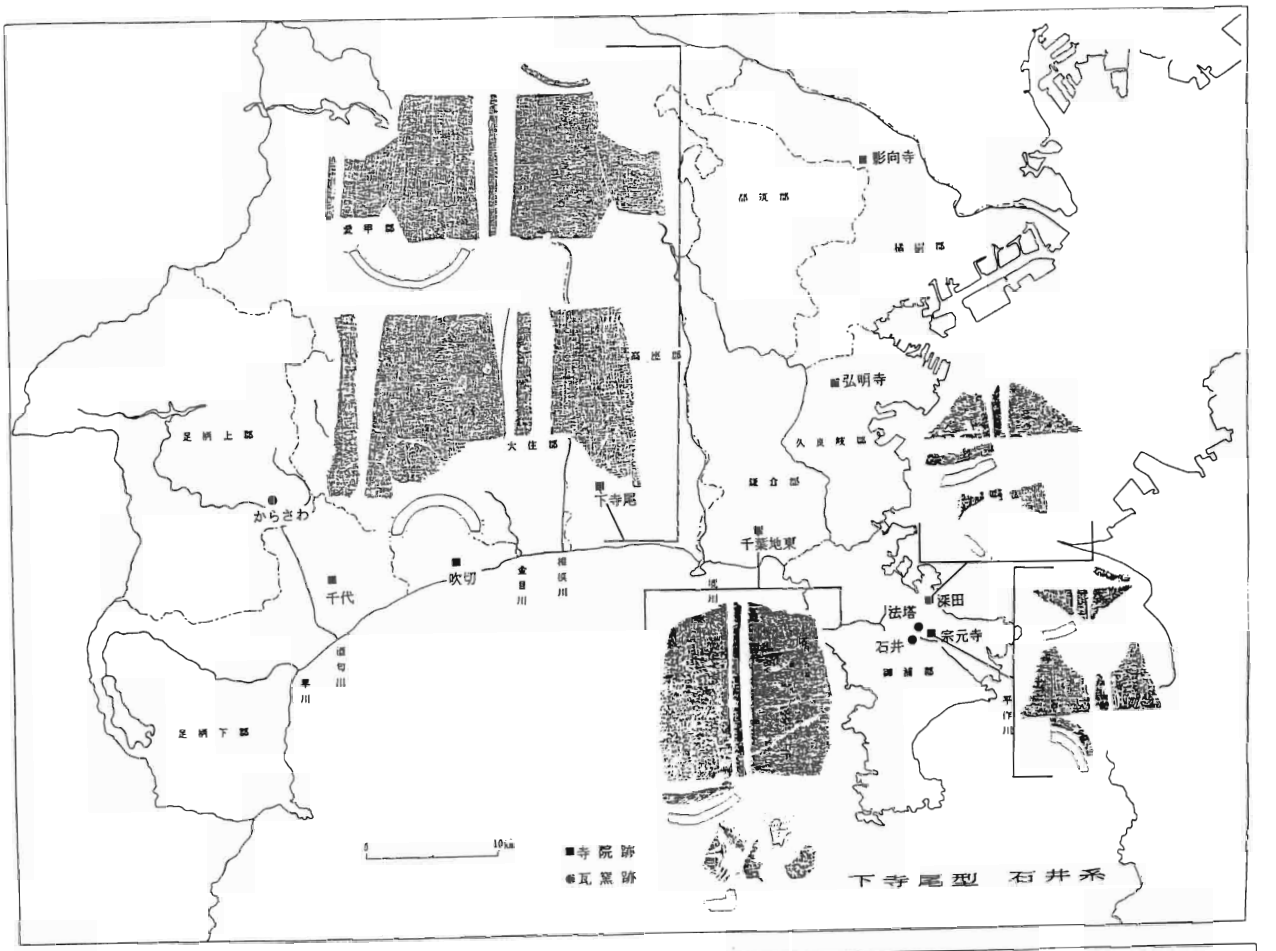
各寺院の造営氏族は各郡衙の評督層（郡司層）であろう。高座郡の下寺尾廃寺は壬生氏と後衛氏族の

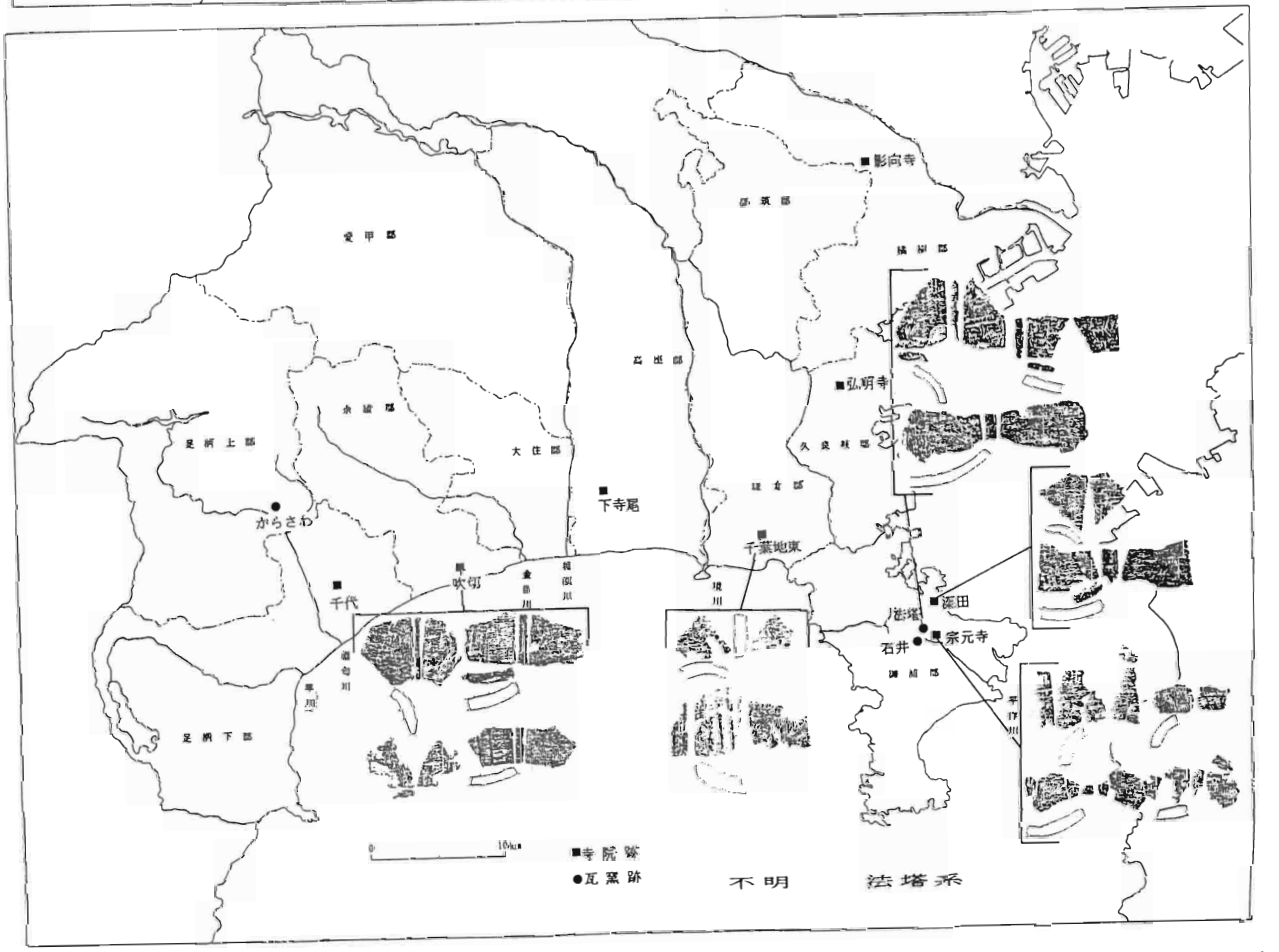
秦氏で、京都太秦の廣隆寺蔵『末寺別院記』にある「法承寺、隆城寺別院、相模国、高座郡在之、本尊丈六薬師全也、今者当寺不知之」とある法承寺であろう。鎌倉郡の千葉地廃寺は郡司少領、他田臣あるいは郡司代君子氏なども考えられよう。御浦郡の宗元寺、深田廃寺は少領、鹿島臣、あるいは郡司代、太田部直氏などが考えられるが、奈良・西安寺、斑鳩の地との関係から後衛氏族に天皇家との関係も想定される。足下郡の千代廃寺は中央官人で相模国造を賜った漆部直伊波の本貫地の人たちであろう。余綾郡の吹切遺跡も同じかもしれない。

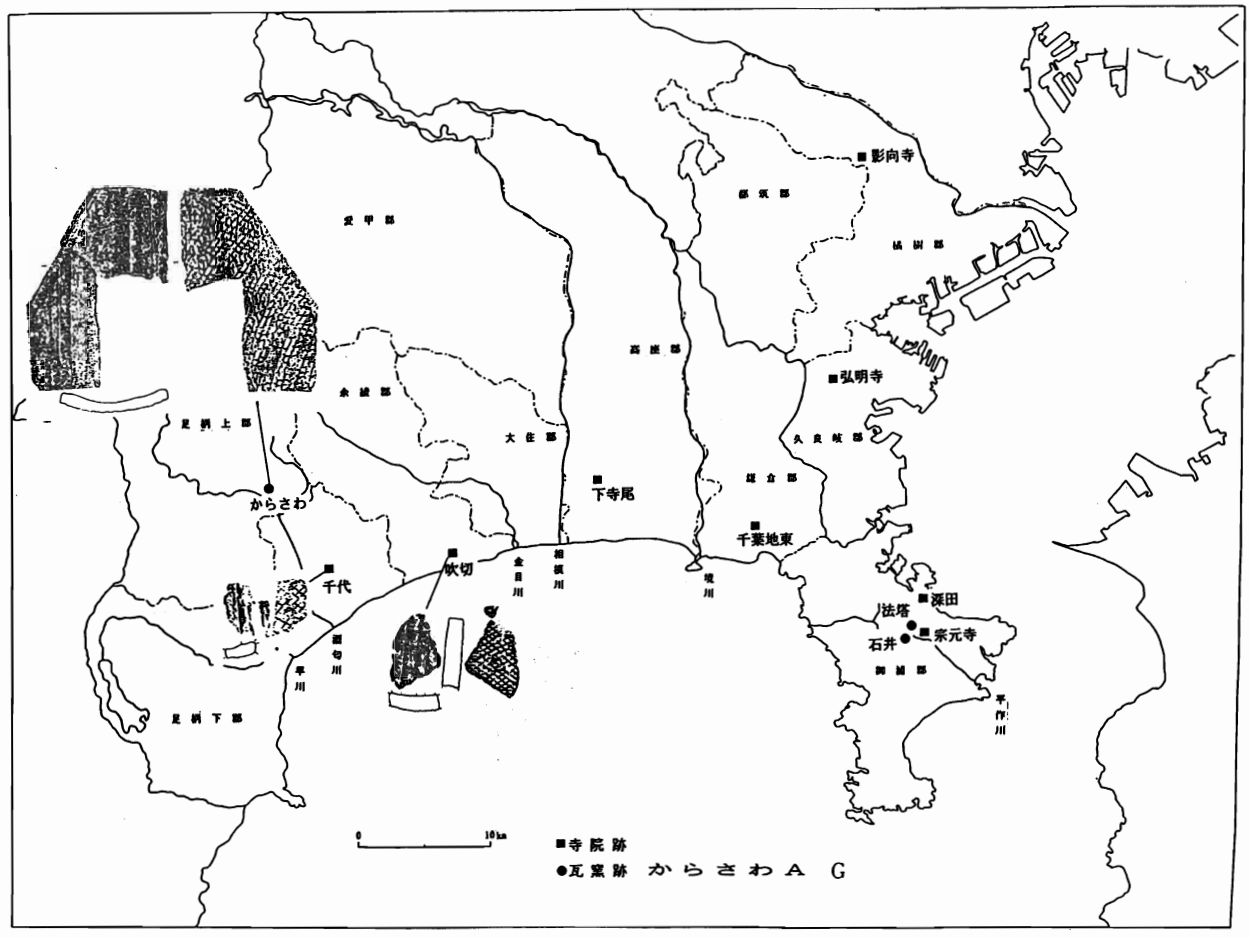
相模国分寺の創建はもちろん全郡体制で行なわれたものと思われるが、在地の高座郡壬生氏を中心に相模国司として赴任した秦井手乙麻呂、先の漆部直伊波、僧良弁などが考えられる。再建期には大住郡壬生氏を中心に百済王教義が関わっているように思える。

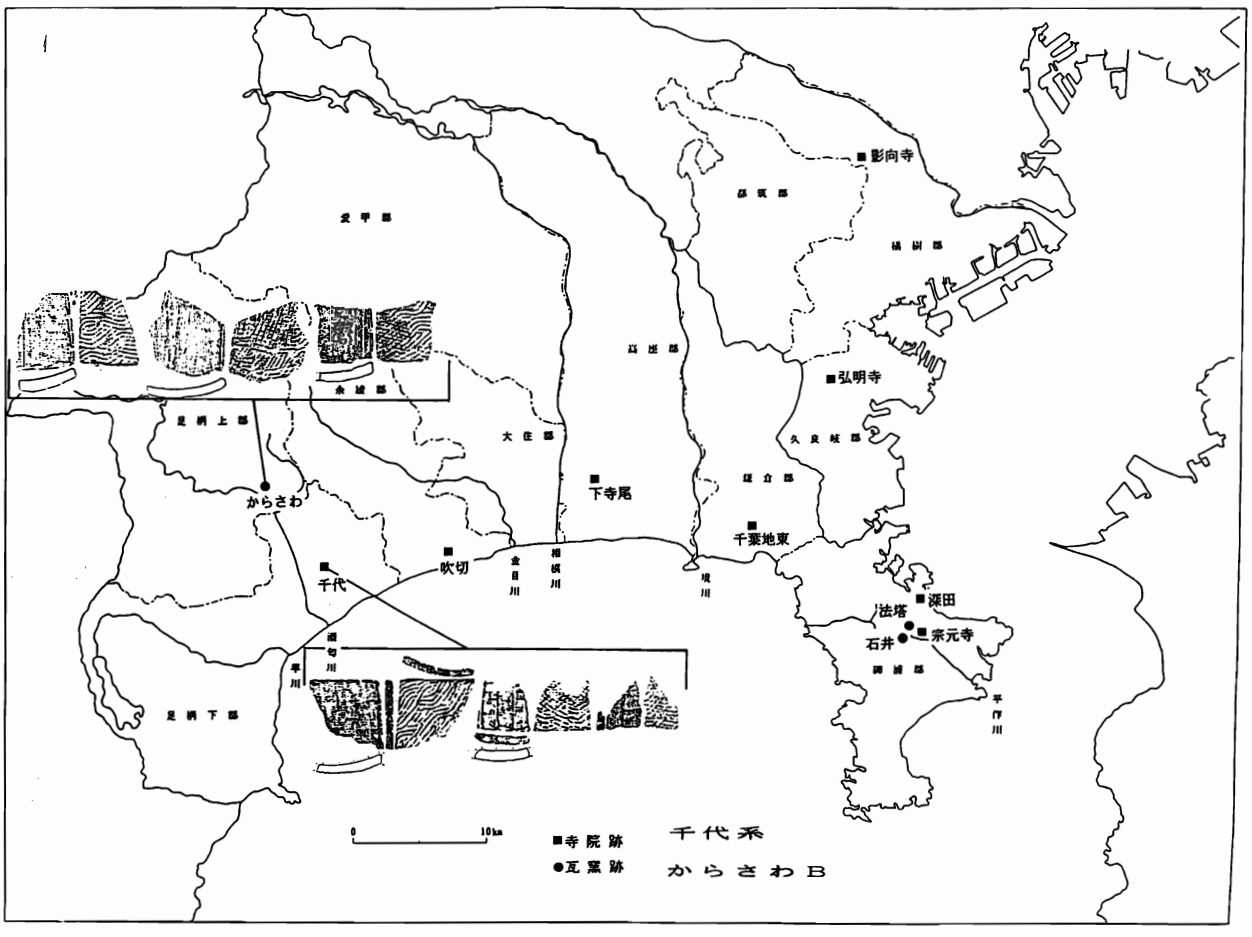
相模国の古代寺院とは言え、出土瓦の分析を通して推論を重ねて来たが、寺院跡の調査、古瓦のさらなる研究をすることによって訂正されることは多々あると思われるが、現時点での到達点と理解していただきたい。

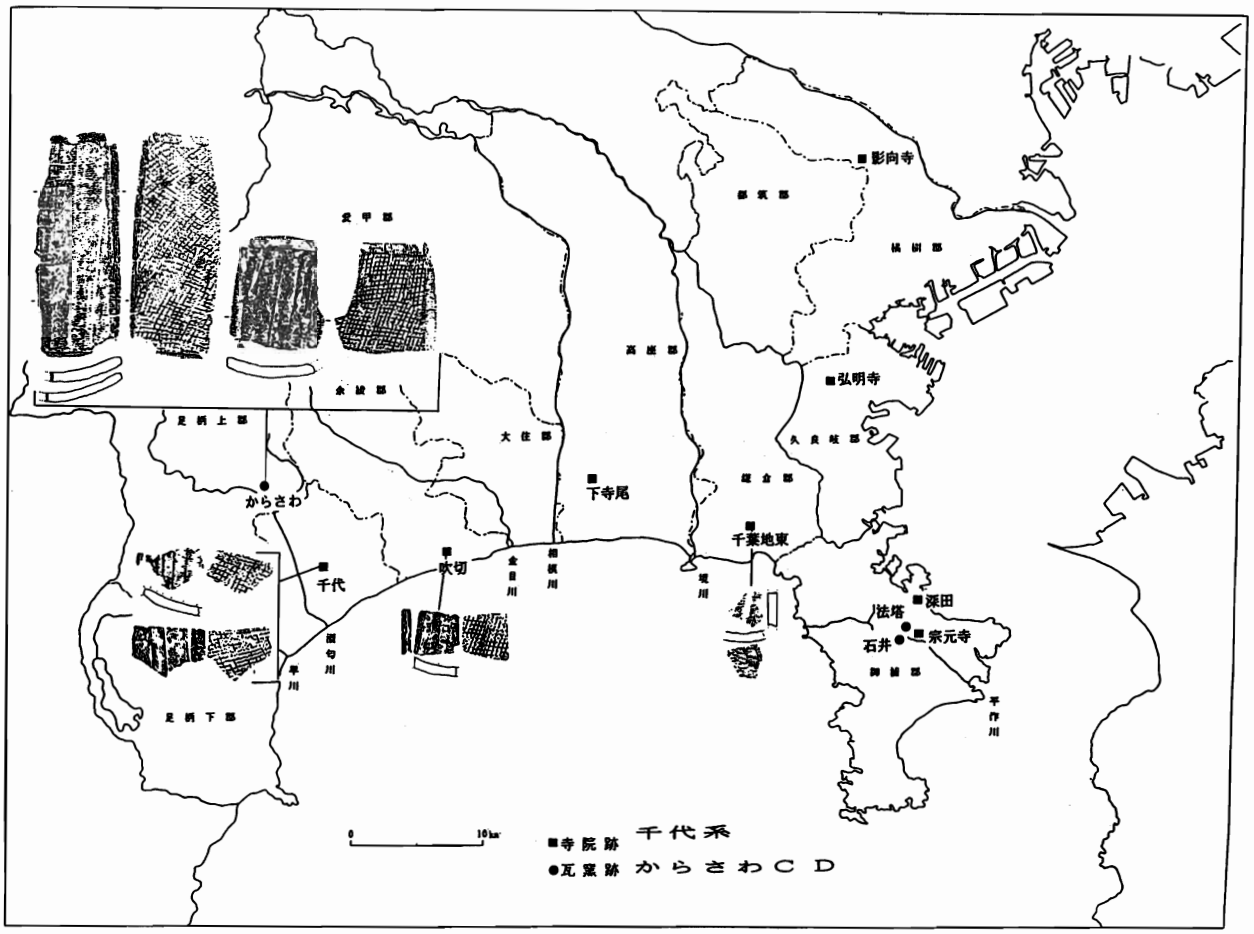


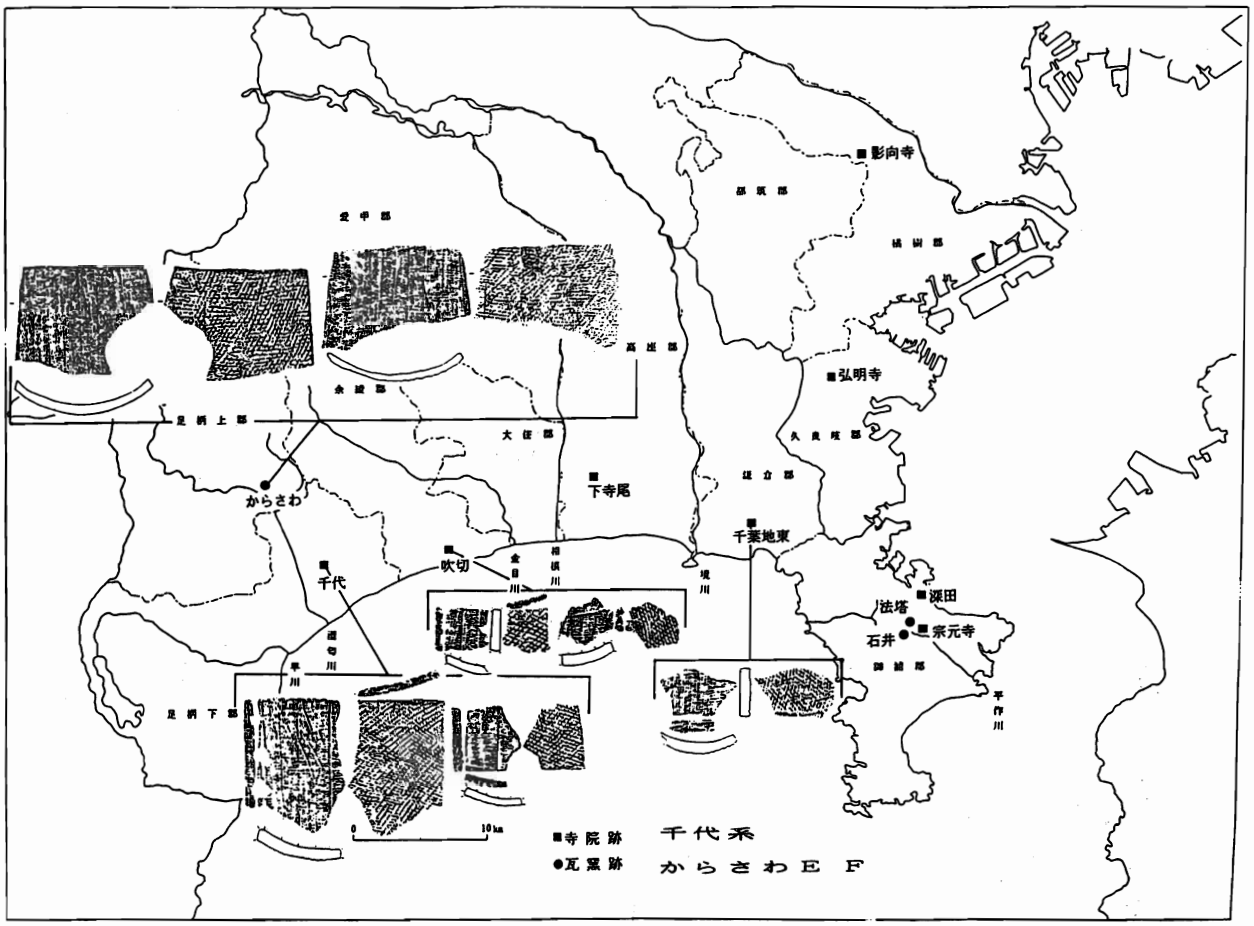

影向寺
弘明寺
千葉地東
千代
吹切
下寺尾
からさわ
法塔
石井
宗元寺
溝田
寺院跡
瓦窯跡
下寺尾型 石井系

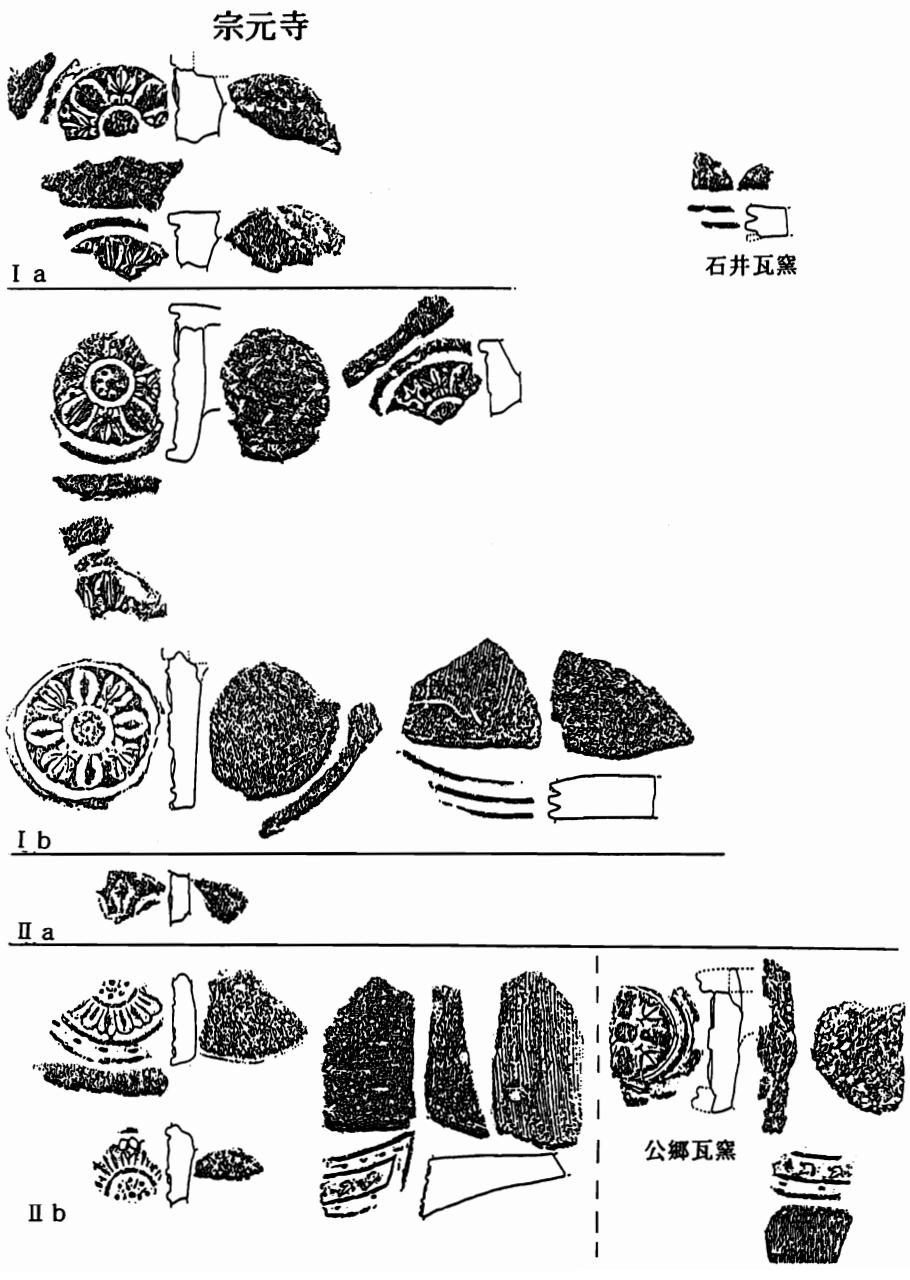

影向寺
弘明寺
千葉地東
千代
吹切
下寺尾
からさわ
法塔
石井
宗元寺
溝田
寺院跡
瓦窯跡
不明 法塔系

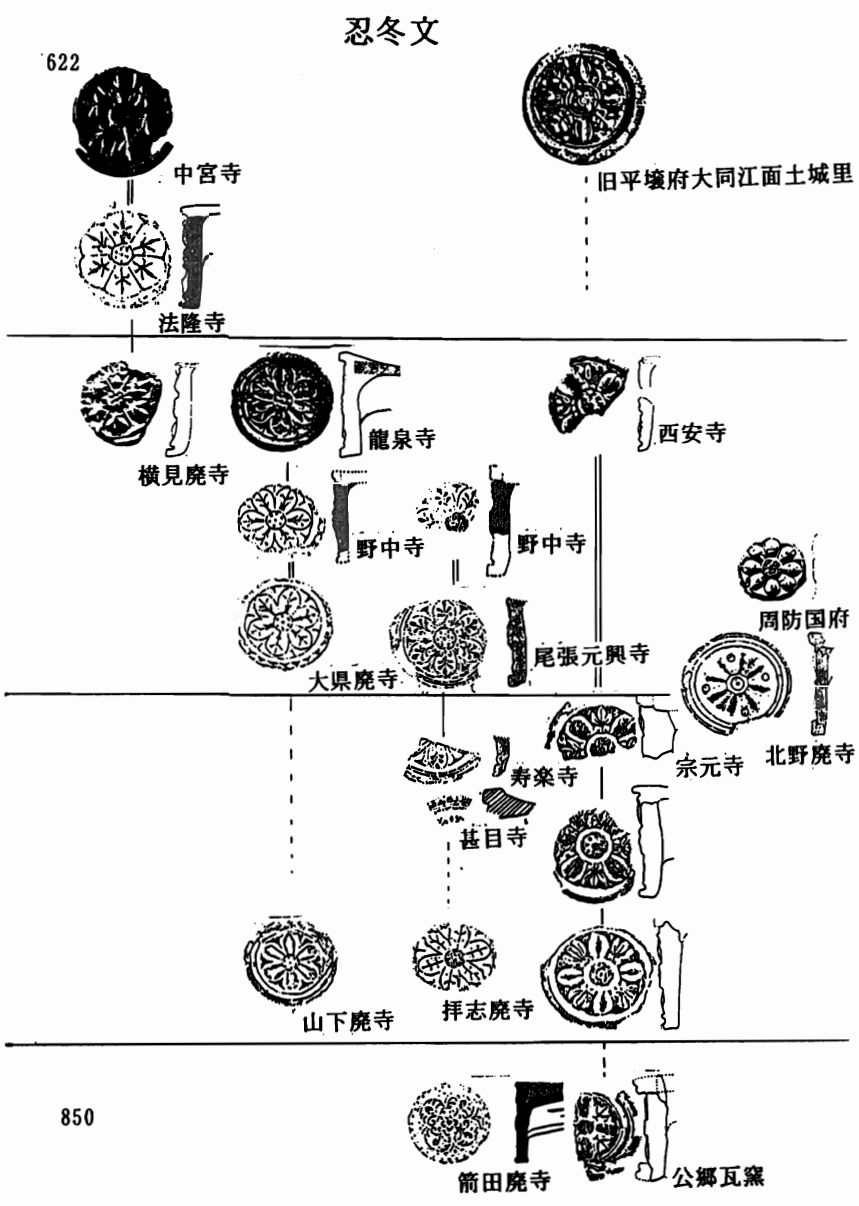

影向寺
弘明寺
下寺尾
千葉地東
吹切
千代
からさわ
深田
法塔
宗元寺
石井
0
10km
■寺院跡
●瓦窯跡
からさわA G


影向寺
弘明寺
下寺尾
千葉地東
吹切
千代
からさわ
深田
法塔
宗元寺
石井
0
10km
■寺院跡
●瓦窯跡
千代系
からさわB


影向寺
弘明寺
下寺尾
からさわ
千代
吹切
千葉地東
深田
法塔
宗元寺
石井
0
10km
■寺院跡 千代系
●瓦窯跡 からさわＣＤ

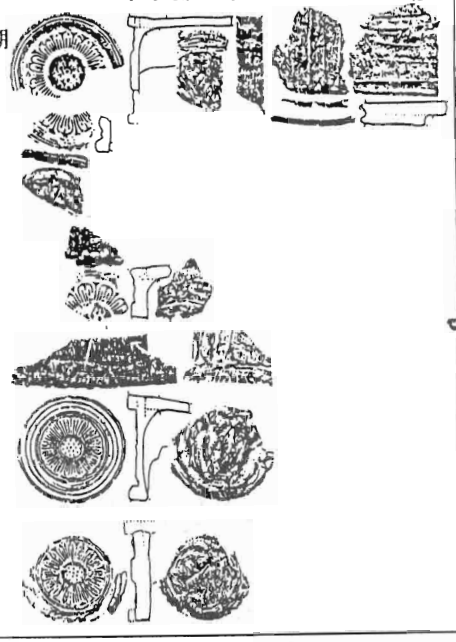

影向寺
弘明寺
下寺尾
からさわ
千代
吹切
千葉地東
深田
法塔
宗元寺
石井
0
10km
■寺院跡 千代系
●瓦窯跡 からさわＥＦ


宗元寺
Ⅰa
石井瓦窯
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
公郷瓦窯

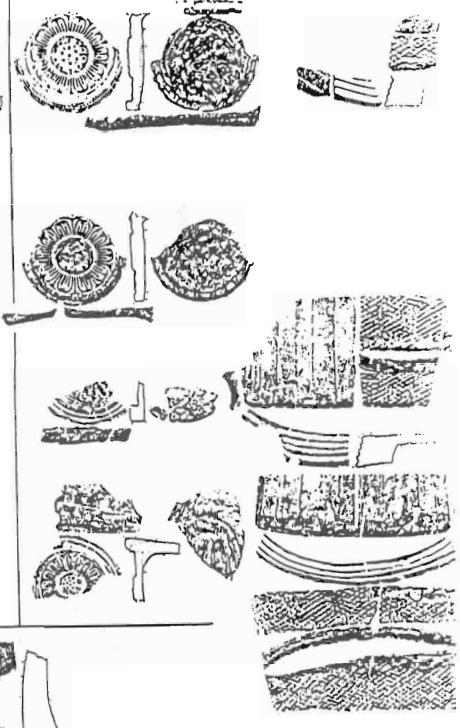

忍冬文
622
中宮寺
旧平壌府大同江面土城里
法隆寺
横見廃寺
龍泉寺
西安寺
野中寺
野中寺
周防国府
大県廃寺
尾張元興寺
北野廃寺
寿楽寺
宗元寺
甚目寺
山下廃寺
拝志廃寺
850
箭田廃寺
公郷瓦窯

千代廃寺

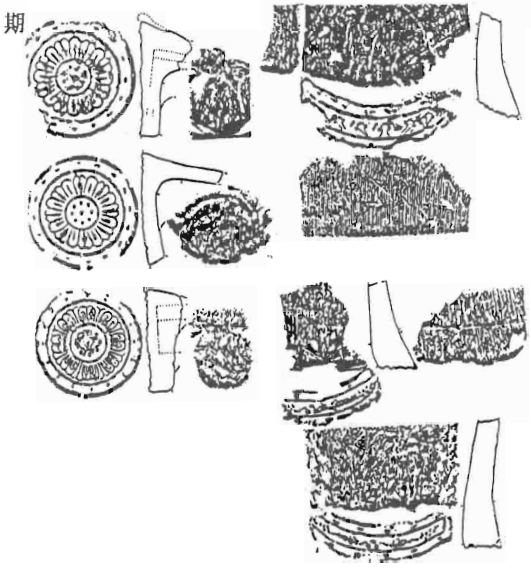
I期



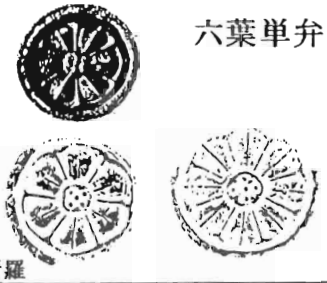
からさわ瓦窯



II期



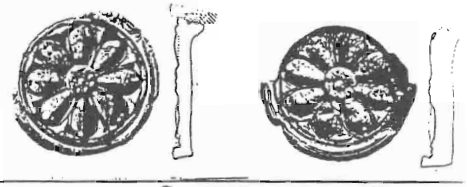
六葉単弁



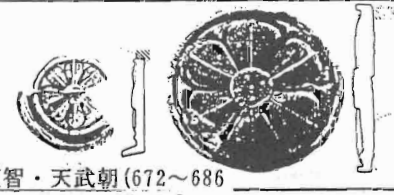
新羅

八葉単弁

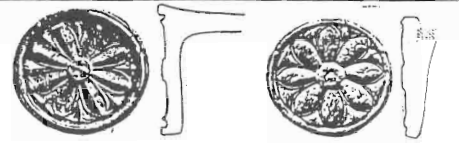
孝徳朝(645～655



天智・天武朝(672～686



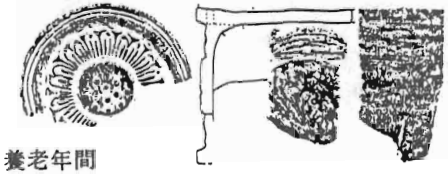
深田廃寺



持統朝(687～

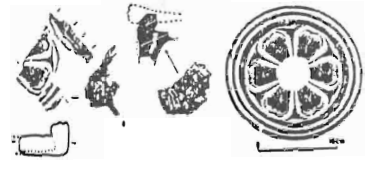
千代廃寺

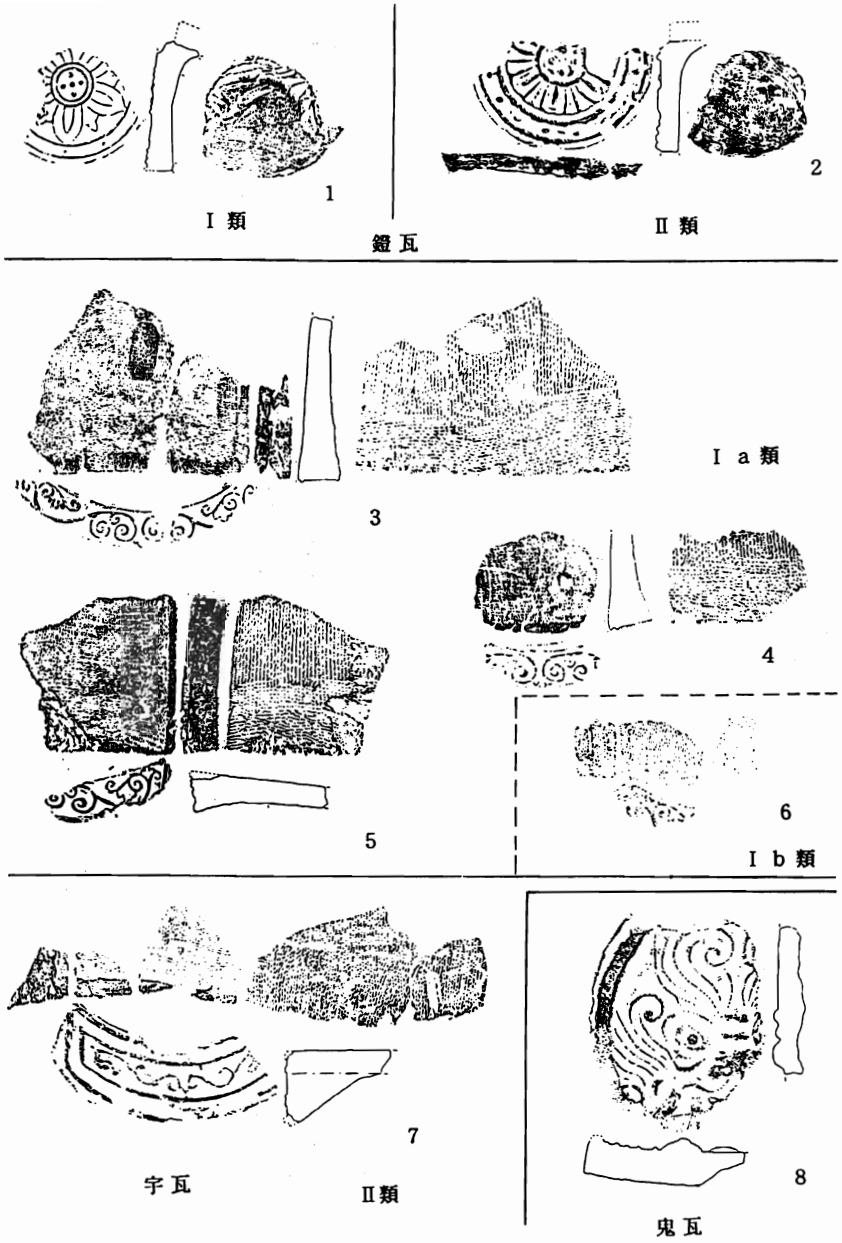
天武朝(672～686



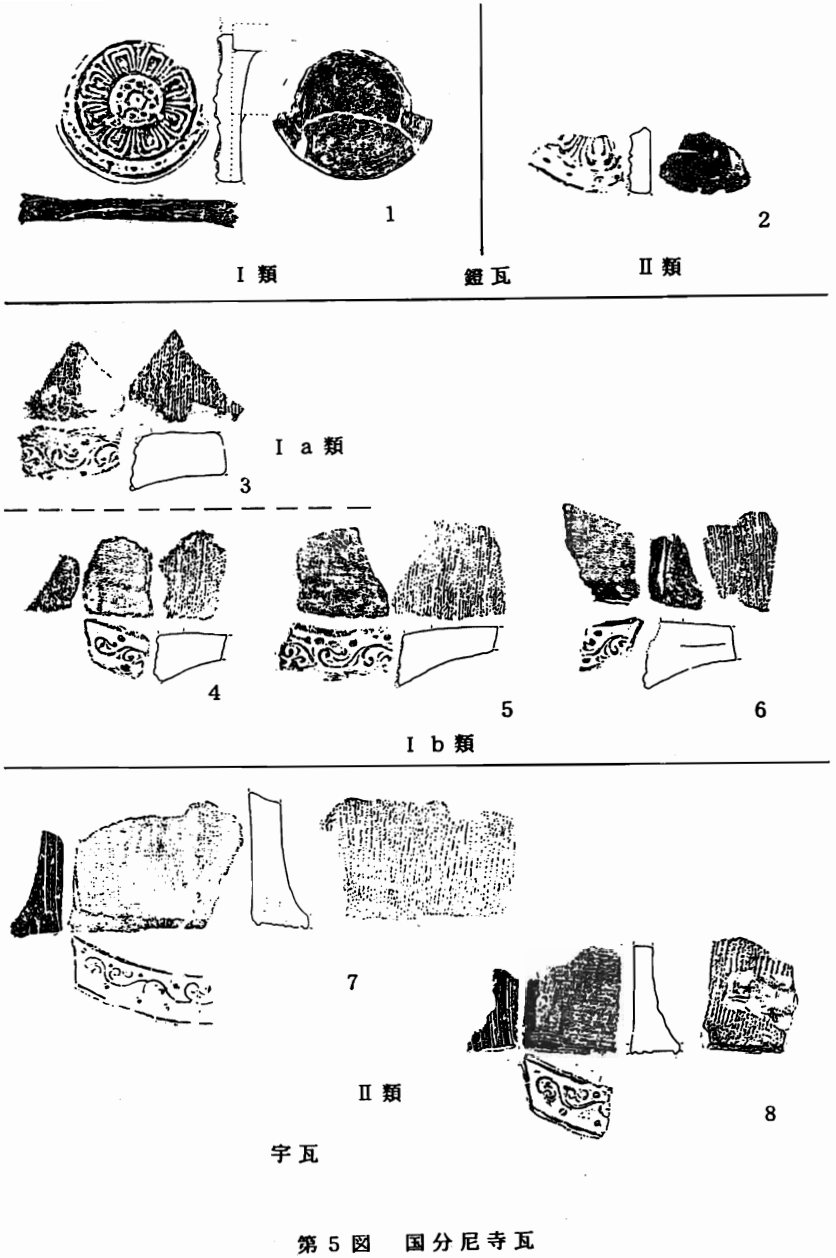
養老年間

千葉地東



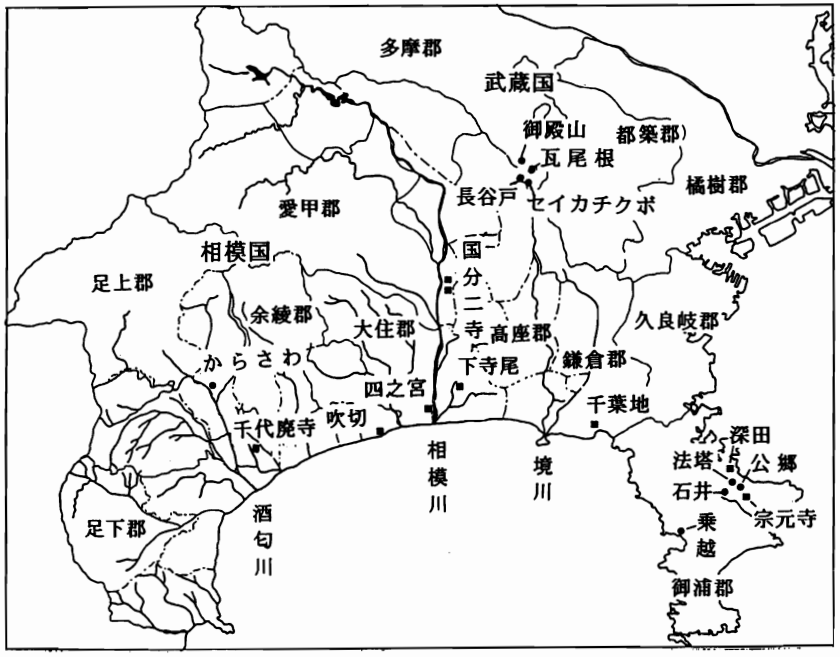


第４図　国分僧寺瓦

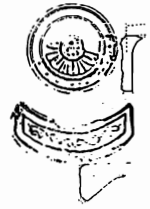


第５図　国分尼寺瓦

第６図　四之宮廃寺出土瓦　　6分の1



第７図　国分二寺と生産瓦窯図

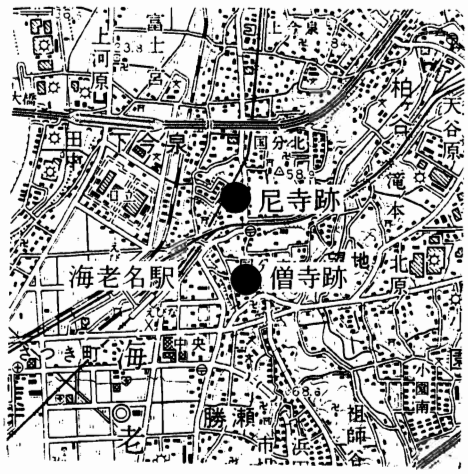
	僧寺	尼寺	生産瓦窯 文様瓦	生産瓦窯 道具瓦
創建期 天平末年～第三四半期内			僧寺公郷系（三浦郡） 尼寺不明	からさわ系（足上郡） 乗越系（三浦郡）
再建期 弘仁一〇年～第二四半期内			僧尼寺 瓦尾根系	武蔵国
補修期 貞観十五年～元慶年間	文様瓦なし	文様瓦なし	南多摩系	武蔵国

第８図　国分二寺瓦の諸段階

相模国分寺跡・国分尼寺跡

須田　誠

所 在 地　僧寺跡：海老名市国分南一丁目（旧地名：国分字宿）
　　尼寺跡：海老名市国分北二丁目（旧地名：国分字尼寺）
存続時期　僧寺跡：8世紀～
　　尼寺跡：8世紀～10世紀



1. 遺跡の立地

相模国分二寺跡は、相模平野を望む台地上に僧寺跡と尼寺跡が南北に並立して建立されている。僧寺跡の東側は丘陵裾部が迫り、尼寺跡の西側は小支谷が入っており両寺とも中津原台地の平坦部が、最も狭まった場所に立地している。

2. 過去の調査

明治時代から大正時代にかけて海老名小学校（当時は尋常高等小学校）の校長であった中山毎吉等による調査研究および保存運動が実り、僧寺跡は1920（大正10）年に国指定史跡となった。尼寺跡は、1997年（平成9年）に国指定史跡となっている。

僧寺跡の本格的な発掘調査は、1965･1966（昭和40･41）年度の国・県・町により行われた史跡指定地内の確認調査（史跡地内第1次）から始まり、環境整備事業に伴って範囲確認（2次・1992年）、塔跡（3次・1992年）、中門跡・南面廊跡（4次・1993年）、僧坊跡（5次・1996年）と主要建物を中心に発掘調査を行っている。史跡指定地外は、1986（昭和61）年の廊跡南側における集合住宅建設に先立つ発掘調査を初めとして現在までに18次を数えている（国分寺関連遺跡）。

尼寺跡は、1988（昭和63）年に金堂跡に隣接する開発に先立って実施された発掘調査を契機として範囲確認を含めて伽藍地内では22次、寺院地内と推定される範囲内では9地点（国分尼寺北方遺跡1・2・5・7・8・16次ほか）が調査されている。

3. 発掘された遺構

僧寺跡　塔･金堂･講堂の礎石が現存していることから古くから法隆寺式伽藍配置の国分寺として知られ、史跡指定の際にも「寺塔ノ配置特ニ注意スベキモノアルヲ知ルヲ得」とされている。

発掘調査によって塔基壇は、壇上積基壇外装で創建され、後に北辺だけが乱石積基壇に修理されていることと、基壇周辺の雨落石敷が2面、整地層1面の計3面の整地面が確認されている。

中門跡と西側廻廊は、削平されて現存せず、東面については廻廊でなく築地塀となっている。南面廊跡は、礎石が一部現存しており単廊であったことがわかっている。

僧坊跡は、東西棟の掘立柱建物で桁行き２間、梁行きは25間、８坊分が確認されている（東端は未調査）。柱穴には掘り直しが認められるものがあるため、最低１回の建て替えがあると推定される。２時期目の掘立柱の柱穴には(１)焼土・炭化物が多く含まれること、(２)柱抜き取り痕が認められること、(３)柱の抜き取り後に瓦等が廃棄されたものもあること、(４)柱穴の直上に径40㎝程度の礎石と思われる川原石が据え付けられている柱穴が１基確認されたこと、(５)礎石状の川原石が柱穴の直上から出土しているものがいくつか見受けられること等から２時期目の掘立柱建物の焼失後に礎石建物に建て替えられたものと思われる。

伽藍中軸線から西に約120ｍと約112.5ｍの地点で南北方向に走る溝が３条出土し、伽藍地の区画溝と思われる（SD-a～c)。SD-aとSD-bは、重複しており、やや西に振れているSD-aの方が古いが南側で調査された部分では重複状況が認められない。11次調査地点ではSD-a・bからはほとんど遺物が出土しなかったことに対し、SD-cからは埋没段階で瓦・土器等が多く混入しているという異なる状況が確認されている。

尼寺跡　地上部に現存するのは金堂跡のみであるが、発掘調査により鐘楼・経蔵・廻廊・石敷通路・伽藍地区画溝等が出土し、廻廊が講堂へとりつくいわゆる国分寺式伽藍配置であることが確認された。また、寺院地内と推定される国分尼寺北方遺跡からは、掘立柱建物・区画溝・竪穴建物等が出土している。

金堂建物は、梁行きが70尺（21.2ｍ)、桁行きが46尺（13.9ｍ）で５間×４間の四面庇付きの礎石建物であり、この礎石建物の焼失後に掘立柱建物が再建されている。基壇上からは焼土とともに灯明皿等として使われた坏が多く出土した（第５図)。

鐘楼跡・経蔵跡は、掘込地業（基壇）を伴う掘立柱建物であり、鐘楼跡では柱穴底面に礎石を据えている。廻廊跡は、東・西・南面の一部が調査され、鐘楼と同様に柱穴の底面に礎石を据えており、掘方や根石の状況から少なくとも１回の建て替えがあったものと推定される。

伽藍地区画溝は、伽藍中軸線から東へ約87ｍの地点で出土し、１回の掘り直しが認められた。

国分尼寺北方遺跡７次調査地点では西側に庇を持つ大型の掘立柱建物が出土し、この建物跡の柱穴から「法華寺」の墨書土器が出土している（第６図16～18)。また、南北方向の溝と東西方向の道と推定される硬化面、根石を伴う総柱の掘立柱建物が１棟出土している。８次調査地点では９世紀代と推定される東西方向の大溝が出土しており、寺院地の区画溝の可能性がある。

４．出土した遺物

軒瓦については僧寺跡の五葉単弁蓮華文軒丸瓦＋均正唐草文軒平瓦（僧寺Ⅰ類)・六葉単弁蓮華文軒丸瓦（僧寺Ⅱ類・尼寺Ⅲ類）が、尼寺跡の八葉単弁蓮華文軒丸瓦２種＋扁行唐草文軒平瓦２種（尼寺Ⅰ・Ⅱ類)・六葉単弁蓮華文軒丸瓦＋均正唐草文軒平瓦（尼寺Ⅲ類）が知られている。

僧寺・尼寺に共通するのは六葉単弁蓮華文軒丸瓦＋均正唐草文軒平瓦のみであり、同笵(？)瓦が瓦尾根瓦窯と平塚市四之宮下郷廃寺跡付近から出土しているが、僧寺・尼寺ともその出土量は少なく、特に僧寺跡からは発掘調査で出土したのは今のところ小破片が１点のみである（第３図４)。

尼寺の軒瓦は、八葉単弁蓮華文軒丸瓦、扁行唐草文軒平瓦が最も多く出土している。軒丸瓦・軒平瓦ともに珠文が丸く全体的に笵が甘いⅠ類と珠文が楕円で笵がしっかりしているⅡ類がある。

出土品は、大半が瓦・土器であるが、僧寺塔跡から青銅製の相輪の破片が出土している。

5. 時期変遷

僧寺の瓦については２種しか認められていないが、遺構については塔跡の３面の石敷・整地層、３条の伽藍地区画溝、僧坊跡柱穴の重複状況から３時期あったことはほぼ確実といえる。

塔跡周辺部の整地層中から出土した金銅製水煙と遺構上から出土した銅製水煙とは(１)理化学分析により銅の成分が全く異なっていること、(２)金銅製水煙には補修と見られる痕跡が認められること、(３)銅製水煙の方が砒素分を多く含んでおり、より新しい時期の鋳造と推定されること等から水煙についても「鋳造→補修→再鋳造」の３段階を想定できる。

尼寺跡については、伽藍地区画溝の掘り直しと金堂雨落石敷の下層に基壇外装の切石破片が混入していること、および基壇上に掘立柱建物が再建されていることから僧寺ほど明確ではないものの３時期に区分できると思われる。これは軒瓦が３種あることとも一致する。

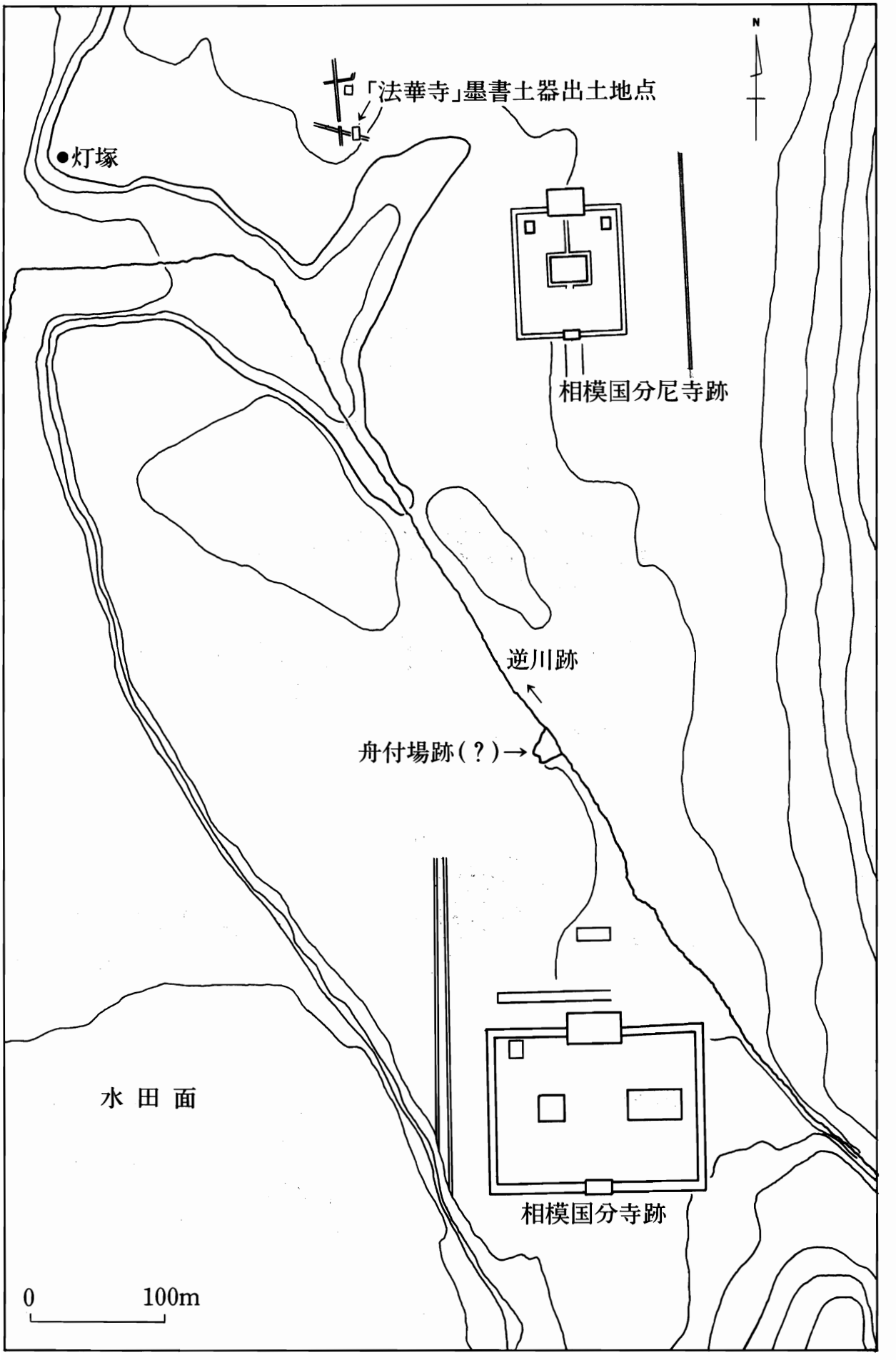
便宜上、この３期区分を古い段階からＡ期、Ｂ期、Ｃ期と仮称する。

Ａ期からＢ期へ移行は、(１)伽藍地区画溝の掘り直し、(２)基壇外装・水煙の補修、(３)僧坊跡・尼寺廻廊の建て替え等に見られるようにどちらかといえば「補修・修理」といえる。Ｂ期からＣ期への移行は、(１)水煙の再鋳、(２)僧寺の伽藍地区画溝を新しく掘削していること、(３)僧坊跡の掘立柱建物から礎石建物への建て替え、(３)塔基壇外装の壇上積から乱石積への改修、(４)尼寺金堂の礎石建物から掘立柱建物への建て替え、(５)僧寺・尼寺への共通の軒瓦（六葉単弁蓮華文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦）の供給等から「再建」に近いものではないかと考えている。

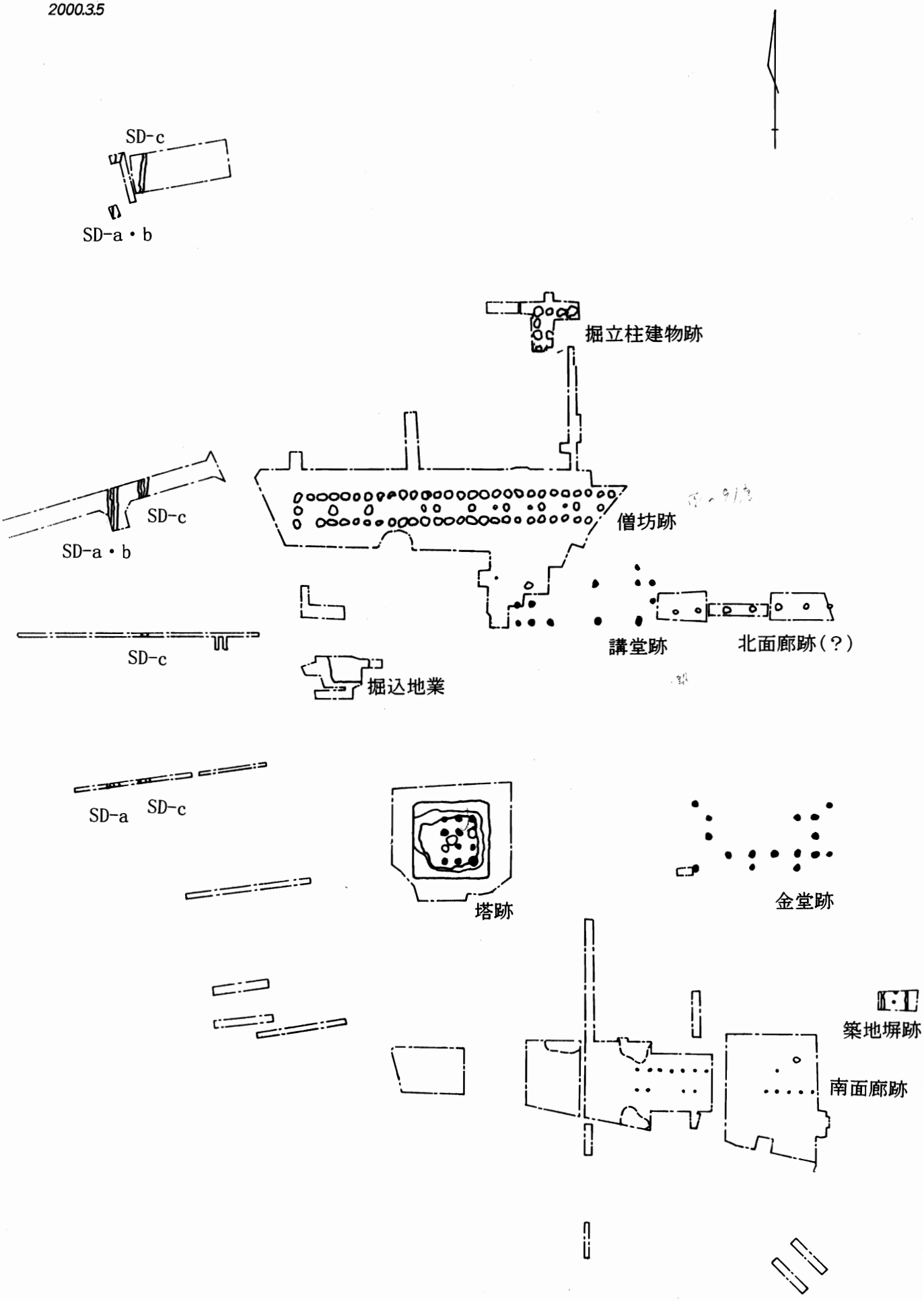
文書記録では(１)819（弘仁10）年の２度の相模国分寺被災、(２)879（元慶３）年の相模・武蔵で発生した地震による相模国分寺の焼失、(３)873（貞観15）年に漢河寺（湧河寺）に移転した尼寺が878（元慶２）年に旧地に戻るという３つの記事が知られている。これは文献的にも(１)819年以前、(２)819～878（879）年、(３)878（879）年以降という３時期を想定できることになる。

また、僧寺においてはＡ期に先行する伽藍造営計画があった可能性がある。これは僧寺の伽藍中軸線が金堂・講堂・塔の位置関係からN-55°-Wであるのに対して僧坊軸線の方位がN-91°-Wと微妙なずれがあることとSD-aがやや西に振れていることから、法隆寺式伽藍配置が当初からの造営計画ではなかったという想定である。これは、「シンポジウム関東の国分寺　資料編」（関東古瓦研究会　1994年）において「国分寺は、塔が先行して建立され、その後、金堂・講堂等が拡充整備されていく」という指摘が相模国分寺にも当てはめられるのではないかと考えている。ただし、SD-aがSD-bと重複していることや、先行する瓦の存在が確認されていないこと等不明確な部分も多い。

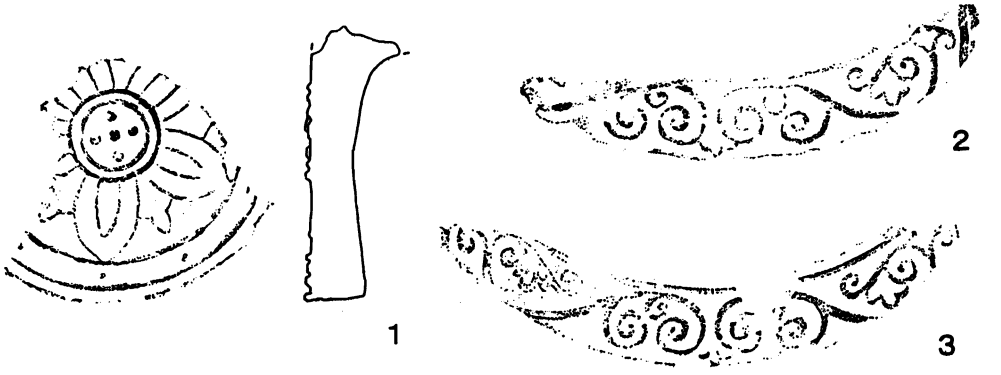
Ａ～Ｃ期の使用瓦や年代がどう当てはめられるかは推測の域を出ない。今後、僧坊跡・僧寺伽藍地区画溝・尼寺金堂跡から出土した土器等とあわせてさらに検討したい。



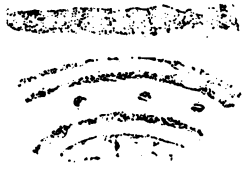
第１図　相模国分二寺跡全体図（Ｓ＝１/4000）



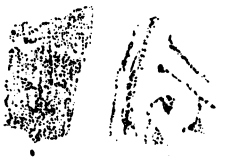
第２図　相模国分寺跡伽藍地全体図（Ｓ＝１/1300）



僧寺Ⅰ類

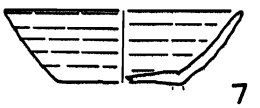


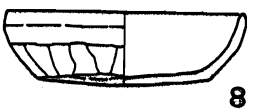
僧寺Ⅱ類（尼寺Ⅲ類）

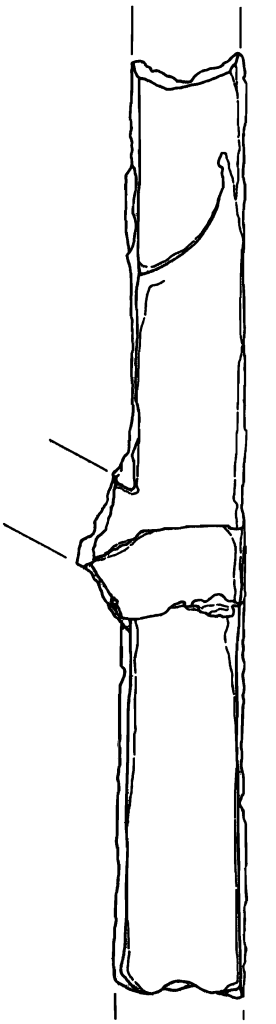


鬼瓦

鬼瓦



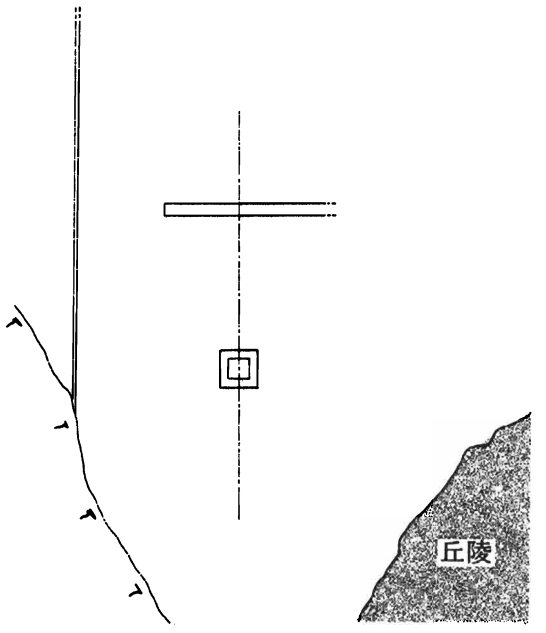




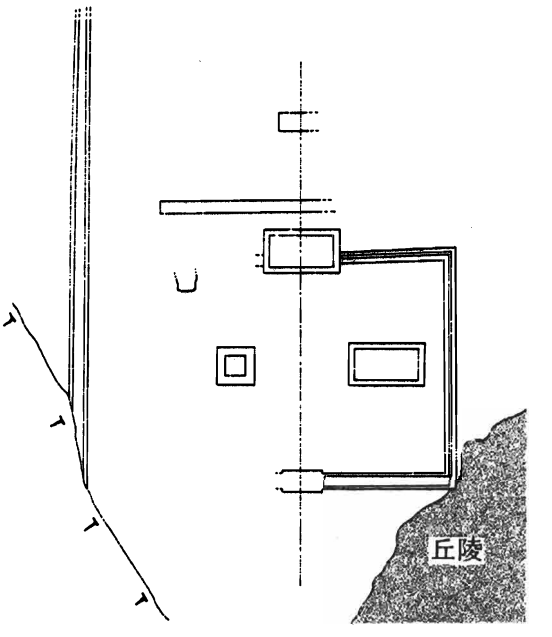
金銅製水煙

1～3・6：地点不明
4・5・7・8：僧坊跡付近
9：塔跡

第３図　相模国分寺跡出土遺物（Ｓ＝１／４）

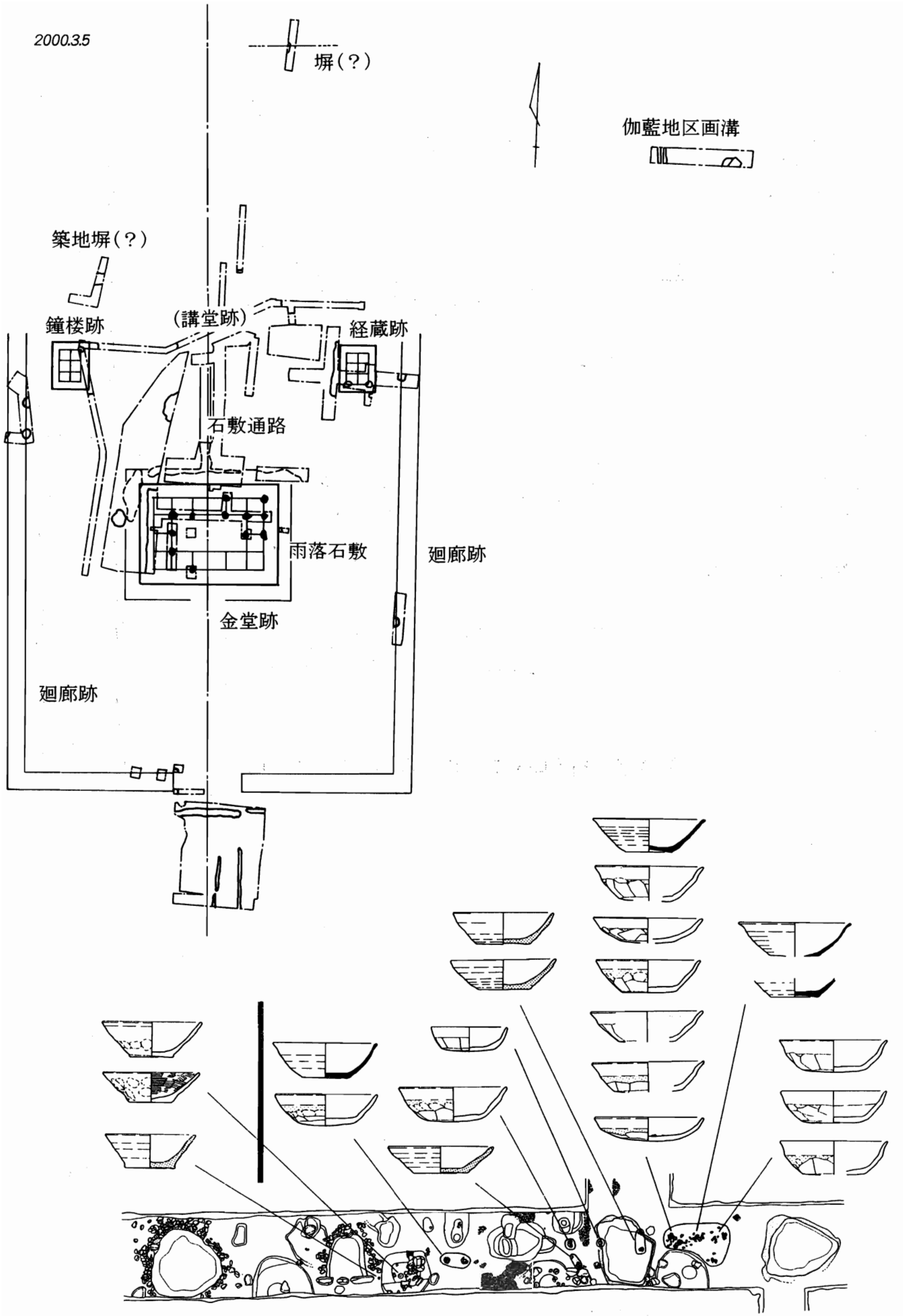


Ａ期以前（？）

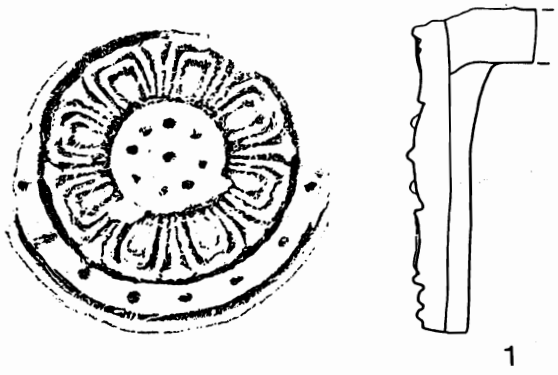


Ａ～Ｃ期

第４図　相模国分寺変遷想定図

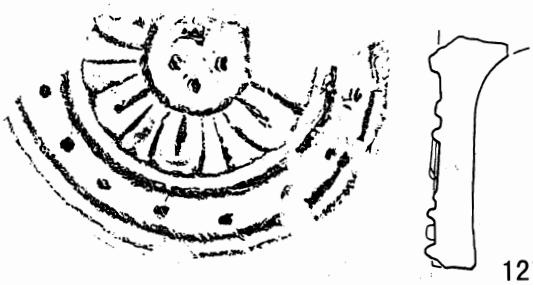


第５図　相模国分尼寺跡伽藍地全体図・金堂跡遺物出土状況（Ｓ＝１/1000ほか）

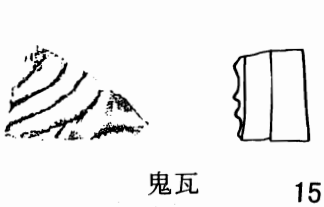


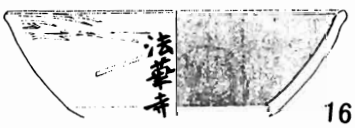
尼寺Ⅰ類

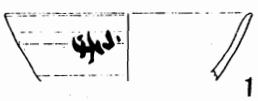
尼寺Ⅱ類

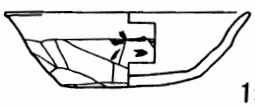


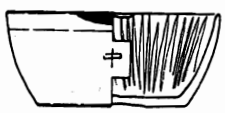
尼寺Ⅲ類











1・15：中門跡付近　2・13：地点不明　3～9・11：金堂跡
10：経蔵跡　12・14・19：金堂付近
16～18：国分尼寺北方遺跡第８次調査
20：伽藍地区画溝付近

第６図　相模国分尼寺跡出土遺物（Ｓ＝１／４）

2000.3.5

民間における仏教の受容－神奈川県内の村落内寺院と火葬墓－

大坪宣雄

はじめに

神奈川県内における古代寺院以外の仏教関連遺跡としては、寺の墨書土器や瓦塔が伴出する村落内寺院と考えられる遺構、蔵骨器を伴う火葬墓跡があげられる。須田勉によって提唱された「村落内寺院」(1985　須田）の研究は資料の増加もあって、下総・上総、下野・上野については近年その規模や形態と、仏堂とそれを取り巻く施設の有無によって分類されている。双堂式の建物配置や僧坊を有する寺院地を構成するような規模の大きなものから、側柱式の単独の仏堂まで５分類（須田）または６分類（笹生）されている。

県内では冨永樹之によって村落内寺院の集成と論考がなされ（1994・95・96　冨永)、一方で村田文夫・増子章二によって川崎市内の火葬墓の集成・論考がなされている（1989・90　村田・増子)。県内では、関東の他の県と比較しても仏教遺跡例が極端に少なく、資料も少ないのが現状である。ここでは現段階で収集される資料をもとに紹介をしてみたい。

1　県内の仏教関連遺跡

県内では、「村落内寺院」の仏堂と確定される遺跡は９遺跡が認められ、仏教関連遺物の検出がなくとも遺構の形態や規模から仏堂と考えられる遺跡は４遺跡がある。この他に遺構が確認されていなくても、「寺」の墨書、奈良三彩小薬壺、鉄鉢形土器、浄瓶・水瓶、蔵骨器などの仏教関連の遺物が検出する遺跡も多数認められることから、小規模な仏堂を含めた「村落内寺院」の遺跡が今後増加するものと思われる。

（１）宮添遺跡（図１）　川崎市麻生区黒川字宮添113－４・他に所在する。丘陵の平坦部に２時期以上に重複する２×３間の掘立柱建物跡２棟、南側斜面に展開する奈良・平安時代の竪穴住居跡33軒と竪穴状遺構５基が検出されている。掘立柱建物跡は規模・形態不明の建物が先行し、次いでやや規模の大きな柱穴からなる側柱式の２×３間の建物が構築され、最終的にはやや柱穴の規模が小さくなる２×３間の建物となり、束柱の存在によって板敷きの建物の可能性がある。掘立柱建物跡の位置する平坦部から斜面にかけては瓦塔片８点と奈良三彩小薬壺破片、「寺」墨書土師器坏、水瓶、須恵器鉄鉢形土器各１点が出土し、灯明皿に使われたと思われる北武蔵型の土師器坏が多量に出土している。住居跡内から「寺」刻書土師器坏、須恵器鉄鉢形土器各１点が出土している。18号住居跡出土の刻書土師器坏（第５図2-001）は共伴する赤彩盤状坏の年代観からみて８世紀第２四半期に相当する。仏堂の建立当初から居住民の中に「寺」が意識されている証左と考えられる。奈良三彩小薬壺は舎利骨の容器として瓦塔の中に収納されていたものであろう。

掘立柱建物跡は周辺から出土する仏教関連の遺物のからみて仏堂と考えられる。宮添遺跡の遺跡範囲

は斜面上にさらに広がるものと推測されるので、山寺のような単独のものではなく、集落との関わりは大きいものといえる。2時期以上にわたる建物の機能としてはその規模の小さいことから考えて僧の常駐は考えられず、村落の住民によって維持された仏堂といえる。集落開始の時期から仏堂が存在することから集落の成立に深い係わりをもっていると推測される。

（2）東耕地遺跡（図1） 横浜市港北区に所在する。段丘面の平坦部のに位置する。数棟の掘立柱建物跡の組み合わせからなる遺構群で、ほぼ中央部に3面庇付の2×3間の掘立柱建物跡とこれに重複する南1面庇付の2×3間の掘立柱建物跡がみられる。東側には軸方向を同一とする2×3間の掘立柱建物跡が位置する。西側に軸方向が多少ずれているが、ほぼ同位置で重複し、同軸方向に並立する2×6間と2×3間の掘立柱建物跡と、この他に奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されている。遺物には「本寺」と墨書された土師器高坏・蓋（第1図1-004・005）が出土している。この他には直接的な仏教関連の遺物は検出されていない。

（3）権田原遺跡（図1） 横浜市港北区新吉田町4528番地・他に所在する。台地上の平坦部に位置する。F区の2号掘立柱建物跡は2×2間の4面庇付の建物で、4棟が重複している。直接的な仏教関連の遺物は検出されていない。

（4）薮根不動原遺跡（池辺第28遺跡）（図2） 横浜市都筑区池辺町に所在する。段丘面の平坦部に位置する。2箇所で2棟以上の組み合わせからなる庇付掘立柱建物跡群の組み合わせがみられる。昭和53年度調査で奈良・平安時代の竪穴住居跡23軒と掘立柱建物跡10棟、墓壙などを検出、平成7・8年度の調査で、奈良・平安時代の竪穴住居跡32軒と掘立柱建物跡23棟、墓壙、焼成遺構などが検出されている（未報告）。A地区では、内部に束柱と考えられる小柱穴をもつ4×5間の17号建物とその前面に位置する2×5間の長方形を呈し、重複する15・16号建物と、さらにそれと重複する4面庇付の2×3間の14号建物、4面庇付の2×2間の18号建物の遺構群が検出されている。この建物跡群の間の空閑地から灰釉陶器の浄瓶が出土している。米B地区では4面庇付の2×3間の34号建物とその前面に重複する2×3間の32・33号建物がみられ、A・B地区ともに双堂式の建物配置がみられ、付近から竪穴住居跡や区画溝は発見されておらず、掘立柱建物跡群のみがある程度の面積を占有する遺構配置がみられる。

（5）本郷遺跡（図2・3） 海老名市本郷2274番地・他の富士ゼロックス海老名事業所内に所在する。河岸段丘面の平坦部に展開する大集落遺跡で、昭和46年から平成11年までの調査で、奈良・平安時代の竪穴住居跡447軒と掘立柱建物跡92棟、鍛冶跡1基、井戸跡1基、墓壙、土坑、溝などが検出されている。KE・RC地区には3面庇付の2×3間のKE11号掘立柱建物跡があり、柱穴の埋め土の中に地鎮と考えられる「生」の墨書土器や錠前、鉄製攝子、鑓が出土している。「生」の墨書は「高座郡大領壬生直氏」に由来するものと思われ、集落成立の背景に郡司層の関与が想起される資料と考えられる。庇付の掘立柱建物跡は集落の中心的な建物として存在しており、本郷遺跡例では大型掘立柱建物跡の組み合わせの中に仏教関連の遺物が集中している。錠前や風字硯の出土からみて律令制の中の政治的・経済的な一面を推測させる点もあり、集落の中心となる支配層の居住建物の一部が仏堂として機能してい

た可能性もあり、「小僧」の墨書から私渡僧の居住が考えられる。

（6）愛名宮地遺跡（図3） 厚木市愛名字宮地229－3外に所在する。丘陵谷戸の緩斜面上に基壇の上に礎石をもつ建物跡とそれと重複する竪穴状遺構内の掘立柱建物跡からなる。付近から平安時代の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟、土坑などが検出されている。遺物は基壇上から土師器坏、須恵器坏、鉄鉢形土器の他に瓦塔片、少し離れた地点からもまとまった瓦塔片の出土が確認されている。灯明皿に使われたと思われる土師器坏が多量に出土している。

基壇を伴う建物跡は1×3間の建物跡で、周辺から瓦の出土がないことから草葺き又は板葺きの仏堂と考えられる。基壇の直下の1号掘立柱建物跡とされる遺構は特異な構築方法をとり、長方形の竪穴状遺構を一旦埋め戻して、3×5間の柱穴を掘りこんんで掘立柱建物跡を構築している。竪穴の壁外に4面庇をもつ。重複している点からみて基壇建物跡と同じ性格をもつ遺構と推測される。1号掘立柱建物跡の構築時期は出土する土師器坏からみて8世紀中頃と考えられ、礎石建物跡は基壇上から出土する遺物からみて9世紀中頃と考えられる。2号掘立柱建物跡から出土する土器からみて10世紀頃まで継続するようである。付属する2軒の竪穴住居跡は出土土器からみて礎石建物跡と時期的に併行するものと考えられ、遺跡の性格が集落遺跡ではないところから、仏堂を維持する住人の居住施設と考えられる。

（7）南鍛冶山遺跡（図4） 藤沢市石川字南鍛冶山に所在する。南北に流れる境川を望む台地上の平坦面に展開し、北は石川遺跡、谷を挟んで位置する下ノ根遺跡を含む大集落遺跡である。古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡400軒以上、掘立柱建物跡200棟以上、長方形竪穴状遺構、溝、道路状遺構などの多数の遺構が検出されている。遺物としては土師器・須恵器の土器類に、「寺一万」31点、「寺」11点、「寺□」2点、「奉佛」「佛」「仏」各1点の寺関係の墨書や土師器甕に描かれた人面墨書土器2点を含めた689点の墨書土器が出土している。この他に線刻土器、線刻紡錘車、帯具15点、海老錠、鍵、閂金具などの鉄製品、皇朝銭、銅滓などが出土している。この中で調査区東側中央部で検出された道路状遺構に連なる3棟の掘立柱建物跡があり、道路状遺構に続く3×4間の5－SB67、3×4間の5-SB52・57、3×4間の5－SB51の3棟の建物が軸方向を同一にして並列している。調査区南西端で検出された庇付の4×5間の7－SB9の建物があり、周辺の竪穴住居からは「寺」の墨書が多く出土している。

これらの建物は、5－SB51、5－SB52・57、5－SB67の3棟一対の遺構群は集落開始の時期から8世紀中葉まで機能し、9世紀に入って7－SB9の遺構群に中心が移り、9世紀後半以降には谷を挟んだ下ノ根遺跡3－SB1遺構への変遷が辿れるとされている。寺に関係する墨書の多量の出土は仏堂として機能している建物と考えられる。

（8）下ノ根遺跡 藤沢市石川字下ノ根外に所在する。南鍛冶山遺跡とは谷を挟んだ南側の台地上に位置し、遺跡の中央部には庇をもつ2×3間の3－SB1掘立柱建物跡がある。奈良・平安時代の竪穴住居跡12軒と掘立柱建物跡8棟、溝1基が検出されている（未報告）。遺物としては土師器・須恵器に、「寺」3点、「一万寺」2点、「寺芳」「守寺」「上佛」各1点の寺関係を含めて56点の墨書土器が出土している。

（9）馬場（№3）遺跡（図4） 愛甲郡清川村宮ケ瀬字馬場1447・他に所在する。丘陵の緩斜面に位置する。段切りによって作り出された方形の平坦面に礎石と根石からなるＨ１号礎石建物跡２×３間の総柱による建物跡とその南側に位置するＨ７号土坑より、９世紀中頃の土師器坏に書かれた「寺」の墨書が出土している。付近から平安時代の竪穴住居跡４軒と土坑などが検出されている。

（10）上台遺跡（図5） 川崎市麻生区・他に所在する。丘陵地の平坦部に位置する。並立する２×３間の３面庇付のＨＯ－６号掘立柱建物跡と、２×３間の北１面の庇付建物のＨＯ－７号掘立柱建物跡の２棟があり、コの字形に２×３間、２×４間の建物が並び、軸が異なる掘立柱建物跡も数棟がみられる。遺物には灰釉陶器・緑釉陶器・土師器等が出土している。直接的な仏教関連の遺物は検出されていない。

（11）矢掛・久保遺跡 相模原市東橋本４－２－28他に所在する。境川に沿った相模野面の平坦部の集落遺跡である。奈良・平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、墓壙焼成遺構が検出されている。鉄道軌道建設のため集落の一面しか調査がなされていないが、庇をもつ掘立柱建物跡の一部が検出されている。立地などからみてこの地域での大集落の一つと考えられ、「村落内寺院」の存在する可能性が高い遺跡である。

（12）後山田南遺跡第２地点（図5） 横浜市戸塚区川上町254－１・他に所在する。丘陵地の南向き緩斜面に位置する。４号掘立柱建物跡は２×３間の３面庇付で、南面は欠落している可能性がある。外側には方形の段切りがなされ、外側の庇部分の一部は溝で繋がっている。建て替えが考えられる。遺物は灰釉陶器・緑釉陶器・土師器等が出土している。直接的な仏教関連の遺物は検出されていない。

2　遺物

（1）墨書土器（第1～5図）

県内で「寺または寺を含む文字」、「仏」「上佛」「卍」などの墨書土器は24遺跡、68点が知られ、藤沢市南鍛冶山遺跡の41点、同じく下ノ根遺跡の６点が特筆される出土点数である。寺関連の墨書土器の出土している周辺には必ず庇付の掘立柱建物跡が存在しており、庇付掘立柱建物跡の一部が仏堂である可能性が指摘できると考えられる。

（2）刻書土器（第5図）

県内で「寺または寺を含む文字」などの刻書土器は４遺跡、４点が知られ、川崎市宮添遺跡、海老名市本郷遺跡、平塚市向原遺跡では「寺」の刻書が各１点づつ、藤沢市若尾山遺跡からは「与寺」が出土している。

（3）瓦塔（第6～14図）

瓦塔は東日本各地での出土が知られているが、関東の神奈川・東京を除く群馬・栃木・茨城・千葉には数多くの遺跡が知られている。神奈川での出土例は極端に少ない。

県内で瓦塔の出土する遺跡は、川崎市影向寺跡、川崎市宮添遺跡、横浜市薮根不動原遺跡（池辺第28遺跡）、相模原市矢掛・久保遺跡、海老名市本郷遺跡、厚木市愛名宮地遺跡、平塚市神明久保遺跡第１・８地点、小田原市千代廃寺跡、小田原市三ツ俣遺跡、横須賀市宗元寺跡の10遺跡である。この中で３

遺跡は古代寺院跡からの出土であり、1遺跡は国府域周辺の集落遺跡で、1遺跡は国府津の港湾関連遺跡である。集落遺跡での出土例は5遺跡といえる。

瓦塔の年代は共伴する遺物が少ない点から時期を特定することはできないが、平塚市神明久保遺跡や小田原市千代廃寺跡、横浜市薮根不動原遺跡の出土瓦塔は、丸瓦表現が幅狭で、瓦継ぎ目も数段にわたる表現がみられ、隅棟の表現が精緻である。垂木表現も瓦先端部より奥まで長く表出されており、丁寧な作りとなっている。比較的古い様相の形態がみられ、8世紀後半代と考えられる。その他の瓦塔は丸瓦や垂木表現が後出的で、9世紀代と考えられる。愛名宮地遺跡の丸瓦表現は類年代が9世紀後半以降と考えられるので、その時期の製品と考えられる。

(4) 奈良三彩・二彩壺（第14図）

神奈川県内で奈良三彩壺が出土している遺跡は、蔵骨器と考えられる伝川崎市登戸出土の奈良三彩薬壺が1点ある他は、奈良三彩小薬壺片が川崎市宮添遺跡1点、相模原市田名坂上遺跡1点、綾瀬市宮久保遺跡2点の3箇所で発見されている。坂上遺跡例は不明であるが、宮添遺跡例では舎利容器として機能していた仏教関連の強い遺物と考えられ、宮久保遺跡例でも祭祀関連と考えられる宗教色の強い遺物といえよう。奈良二彩小薬壺片は平塚市四之宮下郷遺跡から1点が出土している。

(5) 鉄鉢形土器（第15・16図）

仏具の鉄鉢や銅鉢などの金属器を模倣して作られた製品であり、土器類では須恵器の製品が大半を占め、ロクロ土師器、内黒土器、灰釉陶器・緑釉陶器などの製品がわずかに作られている。僧の托鉢には必要な品物であることから、その出土遺跡例をみても「村落内寺院」と考えられる遺跡からは必ず検出されている。

(6) 浄瓶・水瓶（第16・17図）

金属器の仏具を模倣して作られた製品であり、土器類では須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器のみで作られた特殊な製品である。器種の特異性によって完形品は少ないが、横須賀市上吉井南遺跡では復元ではあるが、ほぼ原形を推測できる浄瓶が出土している。

(7) 蔵骨器（第17図）

蔵骨器は、火葬骨を埋納するための容器であり、仏教の受容によって火葬の風習が定着した結果によるものである。川崎市の北部市域では集中して36遺跡56例の火葬蔵骨器の出土が知られている（村田・増子　1989・1990）。これらの火葬の普及に関しては仏教の流布と信仰の定着に渡来系氏族との関連性が指摘されている。

蔵骨器に使用される土器は、須恵器壺・獣足付短頸壺などの優品と、一般の日常雑器である土師器甕が使用されている。一部で専用に作られたと考えられる土師質の壺形容器（川崎市菅生長坂遺跡出土）。土師質の筒状容器（川崎市有馬台坂上遺跡出土）がある。平安時代になると灰釉陶器や緑釉陶器も使用されてくる。土師器甕を使用した蔵骨器は、時期的には平安時代になって普及してくる。蓋に須恵器蓋や坏、灰釉陶器碗などが使われる。

初期の段階では石櫃や優品の須恵器獣足付壺などの銭貨の負担によって取得したと考えられる製品を

取得できる階層を中心に、儀式としての火葬が経済的負担を伴うと推測されるので、これらは集落内の富裕層に限られる可能性が高い。儀式であることによって庶民の参加は可能であり、仏教の受容の度合いを否定するものではない。次第に火葬を受け入れる信仰の深さの度合によって、安価な土師器甕を使用しながら、火葬に伴う費用を負担できる階層にまで普及してくることになる。

3　今後の課題

県内の初期寺院は各郡単位で建立され、地域の郡司層を含めた有力者の仏教への帰依が端緒となる。高塚古墳に変わる寺院造立者の先祖供養を目的として寺院が建立され、さらに現世的な利益を目的とすることによって、一般庶民への伝教が可能になり、仏教の普及が比較的早く定着していったものと思われる。

集落での「村落内寺院」の仏堂建立の時期は、本郷遺跡の「小僧」墨書の畿内系土器や宮添遺跡の「寺」刻書土器は8世紀第2四半期に比定され、愛名宮地遺跡の1号掘立柱建物跡出土の土師器坏が8世紀中頃の時期に比定されることから、集落内における仏教の受容は8世紀第2四半期から中頃にかけて成立していったものと思われる。これには、初期寺院の成立が7世紀末から8世紀初頭にかけて成立していった流れの上に、奈良時代初期の新規開墾による集落の成立、開始においての精神的な支柱になっていったものと考えられる。

火葬墓にみられる蔵骨器の初現の時期も8世紀後半の時期に比定されることから、集落において仏教に帰依し、火葬の風習を取り入れるまでの経過期間を考慮した時に、これだけの時間差は当然といえよう。

県内の「村落内寺院」の発見された遺跡例は少ないが、いくつか分類が可能と思われる。薮根不動原遺跡では集落の中に庇付の建物からなる双堂式の建物と付属の建物によって囲いの無い寺地を有するタイプ、本郷遺跡・南鍛冶山遺跡・下ノ根遺跡はこれに含まれるかもしれない。愛名宮地遺跡、馬場（No.3）遺跡のように比較的山間部に近い地域で、礎石や基壇をもった建物が存在し、修行の場として集落とは独立したタイプ、宮添遺跡のような側柱式の単独の掘立柱建物跡からなり、小規模な集落の中で維持されるタイプなどに分類されよう。

おわりに

県内の考古学的な資料に基づいて、民間における仏教の受容と題してみてきたが、この事象を如実に示しているのは、土器に書かれた「寺」の文字であろう。墨書にみられる「寺」の概念は、信仰の対象の場所としとての仏堂を介して、集落内に定着していったものと思われる。草山遺跡での「神罡本寺」、下ノ根遺跡の「一万寺」、南鍛冶山遺跡での「寺一万」、東耕地遺跡での「罡本寺」など寺名が明らかな例もあり、集落居住地の周辺域の共通の認識の結果として寺名が定められていったものと考えられる。

伽藍配置をもつ建物を「寺院」とすれば、単独の四面庇や三面庇を伴う掘立柱建物跡は、仏堂として機能していて、どちらも「寺」としての仏教を信仰する対象として存在していたと思われ、国分寺や郡

寺などの寺院は国家や郡司層の寺として存在し、庶民である一般農民は仏堂としての「村落内寺院」を中心に共同体的な精神性の繋がりの中で集落の維持に務めたものと考えられる。

最後に、瓦塔の実測や資料の発表に便宜をはかっていただいた平塚市博物館明石 新氏、平塚市教育委員会大野　悟氏、小田原市教育委員会諏訪間 順氏、東海大学田尾誠敏、資料収集でお世話になった（財）かながわ考古財団大上周三氏にはここに記して感謝いたします。

参考文献

池田敏広 1996 「瓦塔屋蓋部編年試論－北武蔵６～８類瓦塔、類似資料を中心にして」『土曜考古』第19号
池田敏広 1998 「瓦塔屋蓋部編年試論Ⅱ－北武蔵１～５類瓦塔、類似資料を中心にして」『土曜考古』第22号
池田敏広 1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要』第７号 （財）栃木県文化振興事業団
笹生　衛 1994 「「村落内寺院」における堂宇建物と信仰」『中野徹先生還暦記念論集』
笹生　衛 1994 「古代仏教信仰の一側面－房総における８９世紀の事例を中心に」『古代文化』46巻２号
笹生　衛 1998 「古代集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中心に」『仏のすまう空間－古代霞ヶ浦の仏教信仰』
須田　勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』Ⅱ
須田　勉 1999 「東国における古代民間仏教の展開」『仏堂のある風景　－古代のムラと仏教信仰－』
千葉県文化財センター 1996 「古代仏教遺跡の諸問題」『研究紀要18』
冨永樹之　1994・1995・1996 「「村落内寺院」の展開」『神奈川考古』第30・31・32号
村田文夫・増子章二　1989・1990 「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究－川崎市域における事例研究をふまえて」『川崎市市民ミュージアム紀要』第２・３集

遺物一覧表出典文献

文献01　1986　竹石健二 『川崎市麻生区岡上小学校遺跡略報』岡上小学校遺跡発掘調査団
文献02　1987　大川清・北原徳 『川崎市麻生区　山口台遺跡群』日本窯業史研究所
文献03　1995　玉口時雄・大坪宣雄 『黒川地区遺跡群報告書Ⅶ　宮添遺跡－奈良・平安編－』黒川地区遺跡調査団
文献04　1989・90　村田文夫・増子章二 「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究ー川崎市域における事例研究をふまえて」『川崎市市民ミュージアム紀要』第２・３集
文献05　1971　合田芳正 『上谷本第二遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査概報』上谷本第二遺跡遺跡発掘調査団
文献06　1986　『古代のよこはま』横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
文献07　1981　須山幸雄・廣瀬有紀雄 『薮根不動原遺跡発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会
文献08　1986　大上周三・山本暉久 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告14　東耕地遺跡』
文献09　1999　伊丹 徹・他 『かながわ考古学財団調査報告58　長津田遺跡群Ⅴ　宮之前遺跡』
文献10　1979　青木 豊・他 『相原二本松遺跡』
文献11　1980　青木 豊・他 『相原田ノ上遺跡』
文献12　1986　土井永好 『橋本遺跡　歴史時代編』
文献13　1989　久保哲三・柳谷　博 『矢掛・久保遺跡の調査』 矢掛・久保遺跡調査会
文献14　1997　『相模原市田名坂上遺跡』
文献15　1977　金子皓彦 『座間市文化財調査報告第３　鷹番塚横穴』 座間市教育委員会
文献16　1990　國平健三・他 『宮久保遺跡Ⅲ　本文編』神奈川県立埋蔵文化財センター
文献17　1979　國平健三・他 『海老名市上浜田遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター
文献18　1987　久保哲三・後藤喜八郎 『海老名本郷　Ⅳ』 本郷遺跡調査団
文献19　1989　久保哲三・星野達雄 『海老名本郷　Ⅶ』 本郷遺跡調査団
文献20　1991　稲生典太郎・合田芳正 『海老名本郷　Ⅷ』 本郷遺跡調査団
文献21　1995　伊東秀吉・大坪宣雄 『海老名本郷　ＸＩ』 本郷遺跡調査団
文献22　1998　伊東秀吉・大坪宣雄・合田芳正 『海老名本郷　ＸⅢ』 本郷遺跡調査団
文献23　1996　伊東秀吉・大坪宣雄・小林克利 『海老名市国分尼寺北方遺跡　第７・８次調査』 国分尼寺北方遺跡調査団

文献24　1970　『藤沢市史』第1巻「若尾山遺跡」藤沢市史編纂委員会
文献25　1981　『藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査報告書』
文献26　1991　加藤信夫・他　「南鍛冶山遺跡を考えるシンポジウム」資料集『藤沢市史研究24』
文献27　1993　小出義治・他　『石川遺跡1』
文献28　1997　笹倉義邦・望月　芳　『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第4巻　墨書・刻書資料』藤沢市教育委員会
文献29　1998　望月　芳　『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第5巻　古代1』藤沢市教育委員会
文献30　1993　大村浩司　「間門川出土の墨書土器について」『茅ヶ崎市文化資料館調査研究報告1』
文献31　1985　『新湘南国道埋蔵文化財報告』　新湘南国道埋蔵文化財調査会
文献32　1986　鈴木次郎・冨永樹之　『かながわ考古学財団調査報告9　宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ　馬場（No.3）遺跡』
文献33　1975　河野喜映・他　『神奈川県埋蔵文化財調査報告7　鳶尾遺跡』　神奈川県教育委員会
文献34　1996　日野一郎・香村紘一　『及川宮ノ西遺跡　国道412号線本厚木・上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書』国道412号線遺跡発掘調査団
文献35　1997　日野一郎・香村紘一　『及川天台遺跡　国道412号線本厚木・上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書』国道412号線遺跡発掘調査団
文献36　1998　西川修一　『かながわ考古学財団調査報告33　御屋敷添遺跡』
文献37　1999　日野一郎・境　雅仁　『愛名宮地遺跡　県営厚木愛名団地に伴う発掘調査報告書』愛名宮地遺跡調査団
文献38　1990　河合英夫・他　『伊勢原市文化財調査報告書　第15集　東大竹遺跡群Ⅰ』伊勢原市教育委員会
文献39　1989　大上周三・他　『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18　草山遺跡Ⅱ』
文献40　1983　中田　英・他　『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1　向原遺跡　第4分冊』
文献41　1984　小島弘義・他　『四之宮下郷』　平塚市神田・大野遺跡調査団
文献42　1986　小島弘義・他　『平塚市埋蔵文化財シリーズ2　四ノ宮高林寺Ⅲ』
文献43　1987　小島弘義・他　『平塚市埋蔵文化財シリーズ3　真土六の域遺跡Ⅱ』
文献44　1988　小島弘義・他　『平塚市埋蔵文化財調査報告書第5集　四ノ宮天神前遺跡』
文献45　1990　日野一郎・小島弘義　『平塚市埋蔵文化財シリーズ16　梶谷原・高林寺』
文献46　1991　明石　新・若林勝司　『平塚市埋蔵文化財調査報告書第8集　神明久保遺跡－第四地区－』
文献47　1991　明石　新　『平塚市埋蔵文化財シリーズ19　神明久保遺跡－第1地区』
文献48　1992　明石　新・青地俊郎　『平塚市埋蔵文化財シリーズ20　真土六の域遺跡Ⅲ－第9地点』
文献49　1992　明石　新・上原正人　『平塚市埋蔵文化財シリーズ21　天神前・桜畑遺跡他』
文献50　1993　明石　新・上原正人　『平塚市埋蔵文化財調査報告書第10集　山王A遺跡－第2・3地点』
文献51　1996　明石　新　『平塚市埋蔵文化財シリーズ27　山王B・大会原遺跡・他』
文献52　1997　稲垣久美子・奥村明子　『諏訪町C遺跡』諏訪町C遺跡発掘調査団
文献53　1999　近藤英夫・田尾誠敏　『王子ノ台遺跡　第Ⅱ巻　歴史時代編』東海大学校地内遺跡調査団
文献54　1973　『國學院大學考古学資料室要覧』
文献55　1986　市川正史・伊丹　徹『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13　三ツ俣遺跡』
文献56　1999　岡本孝之　「千代寺院跡の復元と木簡の出土位置　赤星直忠先生の野帳と最近の発掘から」『シンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」』
文献57　1982　手塚直樹・河野真知郎・他　『千葉地遺跡』
文献58　1993　『考古資料図録Ⅷ』　横須賀市人文博物館
文献59　1996　伊東秀吉・大坪宣雄・他『大町谷東遺跡B地点第1・2次調査』
文献60　1997　玉口時雄・大坪宣雄　『神奈川県横須賀市　吉井・池田地区遺跡群Ⅰ　上吉井南遺跡』横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団
文献61　1997　玉口時雄・大坪宣雄　『神奈川県横須賀市　横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』横須賀市リサーチパーク発掘調査団
文献62　1987　久保哲三・後藤喜八郎　『海老名本郷　Ⅳ』　本郷遺跡調査団

遺物一覧表

1　墨書

遺跡名	番号	器種	部位	文字	出土位置		文献
宮添遺跡	1-001	須恵器坏	底部内面	寺	遺構外		文献03
拝堂遺跡	1-002	土師器坏	底部外面	寺	遺構外		文献06
	1-003	土師器坏	底部外面	寺	遺構外		
東耕地遺跡	1-004	土師器蓋	体部外面	定本寺	4号住		文献08
	1-005	土師器高坏	体部外面	定本寺	4号住		
矢掛・久保遺跡	1-006	土師器坏	体部外面	寺	16号住		文献13
本郷遺跡ＳＯＥⅡ	1-007	土師器坏	体部外面	上寺	31号住		文献18
本郷遺跡ＫＥ	1-008	土師器坏	体部外面	小僧	遺構外		文献20
本郷遺跡ＫＯＥⅡ	1-009	土師器坏	体部外面	□僧	遺構外		文献21
国分尼寺北方遺跡	1-010	内黒土器椀	体部外面	法華寺	遺構外		文献23
	1-011	土師器坏	体部外面	□寺	遺構外		
	1-012	土師器坏	体部外面	□寺	遺構外		
下ノ根遺跡		土師器坏	体部外面	寺	1－14号住		文献26
		土師器坏	体部外面	□寺	1－14号住		
		土師器坏	体部外面	寺芳	1－15号住		
		土師器坏	体部外面	一万寺	3－2号住		
		土師器坏	体部外面	守寺	3－3号住		
		土師器坏	体部外面	上佛	3－7号住		
南鍛冶山遺跡	1-013	土師器坏	体部外面	寺一万	2－30号住	P01	文献26
	1-014	土師器坏	底部内面	寺□万	3－2掘立	P01	
	1-015	土師器坏	体部外面	佛	4－18号住	P01	
	1-016	土師器坏	体部外面	奉佛	4－70号住	P02	
	1-017	土師器坏	底部内面	寺一万	4－遺構外		
	1-018	土師器坏	底部内面	寺一万	5－44号住	P01	
	1-019	土師器坏	体部外面	仏	5－64号住	P01	
	1-020	土師器坏	体部外面	寺	5－125号住	P01	
	1-021	土師器坏	体部外面	寺一万	5－125号住	P02	
	1-022	土師器坏	体部内面	寺□	5－73掘立		
	1-023	土師器坏	底部内面	寺一万	5－89掘立		
	1-024	土師器坏	体部外面	寺□	5－溝		
	1-025	土師器坏	底部内面	寺	5－遺構外		
	1-026	土師器坏	体部外面	寺	遺構外		
南鍛冶山遺跡７次調査区	1-027	土師器坏	体部外面	寺一万	1号住	P01	文献28
		土師器坏	体部内面	寺一万		P01	文献29
	1-028	土師器坏	体部内面	寺一万	1号住	P02	
	1-029	土師器坏	体部内面	寺	1号住	P04	
	1-030	土師器坏	体部内面	寺	1号住	P05	
	1-031	土師器坏	体部外面	寺一万	5号住	P09	
	1-032	土師器坏	体部内面	寺一万	5号住	P10	
	1-033	土師器坏	底部内面	寺一万	5号住	P11	
	1-034	土師器坏	底部内面	寺一万	5号住	P12	
	1-035	土師器坏	底部内面	寺	5号住	P15	
	1-036	土師器坏	体部外面	寺	5号住	P26	
	1-037	土師器坏	体部内面	寺一万	8号住	P01	
	1-038	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P13	
		土師器坏	体部内面	寺		P13	
	1-039	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P17	

遺跡名	番号	器種	部位	文字	出土位置		文献
	1-040	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P18	
	1-041	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P20	
		土師器坏	体部内面	寺一万		P20	
	1-042	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P21	
		土師器坏	体部内面	寺一万		P21	
	1-043	土師器坏	体部内面	寺	12号住	P23	
	1-044	土師器坏	体部内面	寺一万	12号住	P25	
	1-045	土師器坏	体部内面	寺一万	12号住	P26	
	1-046	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P27	
	1-047	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P28	
		土師器坏	体部内面	寺一万		P28	
	1-048	土師器坏	体部外面	寺一万	12号住	P29	
		土師器坏	体部内面	寺一万		P29	
	1-049	土師器坏	体部内面	寺一	12号住	P34	
	1-050	土師器坏	底部内面	寺	12号住	P39	
	1-051	土師器坏	体部内面	寺一万	252号土坑		
	1-052	土師器坏	体部外面	寺一万	365号土坑		
	1-053	土師器坏	体部内面	寺	365号土坑		
石川遺跡	1-054	土師器坏	体部外面	寺	Ⅱ2号住		文献27
間門川遺跡	1-055	土師器坏	体部外面	寺	2号住		文献30
馬場遺跡	1-056	土師器坏	底部外面	寺	5号住		文献32
	1-057	土師器坏	底部外面	寺	7号土		
及川天台遺跡	1-058	土師器坏	底部外面	寺	13号住		文献35
愛名宮地遺跡	1-059	土師器坏	体部外面	寺			文献37
草山遺跡	1-060	土師器坏	体部外面	神罡山寺	129号住		文献39
四ノ宮下郷遺跡2区	1-061	土師器坏	体部外面		21号住		文献41
	1-062	土師器坏	体部外面	寺	19井戸		
四ノ宮高林寺遺跡	1-063	土師器坏	体部外面	大佛			文献42
四ノ宮天神前遺跡	1-063	土師器坏	体部外面	大佛	7号住		文献44
神明久保遺跡	1-064	土師器坏	体部外面	卍	3号住		文献46
真土六ノ域遺跡第9地点	1-065	土師器坏	体部外面	卍	3号土		文献48
真土六ノ域遺跡第8地点	1-066	土師器坏	体部外面	卍	1号掘立		文献
下曽我遺跡		土師器坏	底部外面	寺	表採		文献54
		土師器坏	底部外面	堂	表採		
池子遺跡群1－A地点		土師器坏	底部外面	仏			
大町谷東遺跡B地点	1-068	土師器坏	底部外面	蔵寺	2号住		文献59

2　刻書

遺跡名	番号	器種	部位	文字	出土位置	文献
宮添遺跡	2-061	土師器坏	体部外面	寺	18号住	文献03
本郷遺跡	2-063	土師器坏	体部外面	寺	9号住	文献19
若尾山遺跡	2-063	土師器坏	体部外面	与寺		文献24
向原遺跡	2-064	土師器坏	体部外面	寺	106号住	文献40

3 瓦塔

遺跡名	番号	種類	部位	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	文献
影向寺跡	3-001	土師質	屋蓋部	6.8	5.5	1.7	遺構外	
宮添遺跡	3-002	土師質	屋蓋部	7.1	10.6	0.9	遺構外	文献03
	3-003	土師質	屋蓋部	4.8	5.2	1.9	遺構外	
	3-004	土師質	屋蓋部	6.0	5.5	1.9	遺構外	
	3-005	土師質	屋蓋部	2.2	2.9	1.4	遺構外	
	3-006	土師質	不明	5.5	5.2	1.4	遺構外	
	3-007	土師質	軸部	5.0	6.2	2.8	遺構外	
	3-008	土師質	軸部	9.5	10.0	1.5	遺構外	
	3-009	土師質	軸部	4.3	1.8	0.5	遺構外	
藪根不動原遺跡	3-010	土師質	屋蓋部				表採	文献07
	3-011	土師質	屋蓋部				表採	
	3-012	土師質	軸部				表採	
藪根不動原遺跡	3-013	土師質	九輪部	2.5	1.4	1.9	遺構外	未報告
	3-014	土師質	屋蓋部	5.0	7.3		遺構外	
	3-015	土師質	屋蓋部	5.0	6.8		遺構外	
	3-016	土師質	屋蓋部	4.2	3.5		1号道路	
	3-017	土師質	屋蓋部	4.3	3.0		1号道路	
	3-018	土師質	屋蓋部	6.5	3.7		34号掘立	
	3-019	土師質	屋蓋部	4.0	5.7		遺構外	
	3-020	土師質	屋蓋部	3.0	5.0		14号住	
	3-021	土師質	屋蓋部	3.4	3.5		34号掘立	
	3-022	土師質	屋蓋部	3.3	4.0		1号道路	
	3-023	土師質	屋蓋部	4.8	5.1		1号道路	
	3-024	土師質	軸部	3.3	5.6		1号道路	
	3-025	土師質	軸部	3.2	3.0		1号道路	
	3-026	土師質	軸部	3.2	3.0		1号道路	
	3-027	土師質	軸部	2.4	5.0		遺構外	
	3-028	土師質	軸部	4.0	6.0		1号道路	
	3-029	土師質	軸部	3.8	7.3		遺構外	
	3-030	土師質	軸部	3.4	6.3	2.3	遺構外	
	3-031	土師質	軸部	3.1	4.5	2.3	34号掘立	
矢掛・久保遺跡	3-032	土師質	屋蓋部				C－4号溝	文献13
本郷遺跡KOEI	3-033	須恵質	屋蓋部				5号住	文献18
本郷遺跡GI	3-034	須恵質	屋蓋部				遺構外	文献22
	3-035	須恵質	屋蓋部				遺構外	
愛名宮地遺跡	3-036	土師質	屋蓋部					文献37
	3-037	土師質	屋蓋部					
	3-038	土師質	屋蓋部					
	3-039	土師質	屋蓋部					
	3-040	土師質	屋蓋部					
	3-041	土師質	屋蓋部					
	3-042	土師質	屋蓋部					
	3-043	土師質	屋蓋部					
	3-044	土師質	屋蓋部					
	3-045	土師質	屋蓋部					
	3-046	土師質	屋蓋部					
	3-047	土師質	屋蓋部					
	3-048	土師質	屋蓋部					
	3-049	土師質	屋蓋部					

遺跡名	番号	種類	部位	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	文献
愛名宮地遺跡	3-050	土師質	屋蓋部					
	3-051	土師質	屋蓋部					
	3-052	土師質	屋蓋部					
	3-053	土師質	屋蓋部					
	3-054	土師質	屋蓋部					
	3-055	土師質	屋蓋部					
	3-056	土師質	屋蓋部					
	3-057	土師質	屋蓋部					
	3-058	土師質	屋蓋部					
	3-059	土師質	屋蓋部					
	3-060	土師質	屋蓋部					
	3-061	土師質	屋蓋部					
	3-062	土師質	屋蓋部					
	3-063	土師質	屋蓋部					
	3-064	土師質	屋蓋部					
	3-065	土師質	屋蓋部					
	3-066	土師質	屋蓋部					
	3-067	土師質	屋蓋部					
	3-068	土師質	屋蓋部					
	3-069	土師質	屋蓋部					
	3-070	土師質	屋蓋部					
	3-071	土師質	屋蓋部					
	3-072	土師質	屋蓋部					
	3-073	土師質	屋蓋部					
	3-074	土師質	屋蓋部					
	3-075	土師質	屋蓋部					
	3-076	土師質	屋蓋部					
	3-077	土師質	屋蓋部					
	3-078	土師質	屋蓋部					
	3-079	土師質	屋蓋部					
	3-080	土師質	屋蓋部					
	3-081	土師質	屋蓋部					
	3-082	土師質	屋蓋部					
	3-083	土師質	屋蓋部					
	3-084	土師質	屋蓋部					
	3-085	土師質	屋蓋部					
	3-086	土師質	屋蓋部					
	3-087	土師質	屋蓋部					
	3-088	土師質	屋蓋部					
	3-089-1	土師質	垂木					
	3-089-2	土師質	垂木					
	3-090	土師質	隅棟					
	3-091	土師質	隅棟					
	3-092	土師質	斗					
	3-093	土師質	斗					
	3-094	土師質	軸部					
	3-095	土師質	軸部					
	3-096	土師質	軸部					
	3-097	土師質	軸部					
	3-098	土師質	軸部					
	3-099	土師質	軸部					

遺跡名	番号	種類	部位	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	文献
	3-100	土師質	斗					
	3-101	土師質	水煙					
	3-102	土師質	斗					
	3-103	土師質	水煙					
	3-104	土師質	九輪					
	3-105	土師質	九輪					
	3-106	土師質	九輪					
	3-107	土師質	九輪					
	3-108	土師質	基壇					
	3-109	土師質	基壇					
神明久保遺跡第8地点	3-110	須恵質	屋蓋部				遺構外	未報告
	3-111	須恵質	屋蓋部				遺構外	
	3-112	須恵質	屋蓋部				遺構外	
	3-113	須恵質	屋蓋部				遺構外	
	3-114	須恵質	屋蓋部				遺構外	
	3-115	須恵質	斗				遺構外	
	3-116	須恵質	斗				遺構外	
	3-117	須恵質	軸部				遺構外	
	3-118	須恵質	軸部				遺構外	
	3-119	須恵質	軸部				遺構外	
	3-120	須恵質	軸部				遺構外	
	3-121	須恵質	軸部				遺構外	
	3-122	須恵質	軸部				遺構外	
	3-123	須恵質	軸部				遺構外	
	3-124	須恵質	屋蓋部				遺構外	
三ツ俣遺跡	3-125	土師質	屋蓋部				遺構外	文献55
	3-126	土師質	屋蓋部				遺構外	
	3-127	土師質	屋蓋部				遺構外	
千代廃寺	3-128	須恵質	屋蓋部					文献56
	3-129	須恵質	軸部					
	3-130	須恵質	軸部					
	3-131	須恵質	軸部					
千代廃寺		須恵質	屋蓋部					未報告
		須恵質	軸部					
宗元寺跡	3-132	土師質	屋蓋部					文献58
	3-133	土師質	屋蓋部					

4 奈良三彩

遺跡名	番号	器種	部位	出土位置	文献
宮添遺跡	4-001	小薬壺	蓋破片	遺構外	文献03
坂上遺跡	4-002	小薬壺	壺	遺構外	文献14
宮久保遺跡	4-003	小薬壺	胴部破片	遺構外	文献16
	4-004	小薬壺	胴部破片	遺構外	
四之宮下郷遺跡		小薬壺	胴部破片	遺構外	文献41

5　鉄鉢形土器

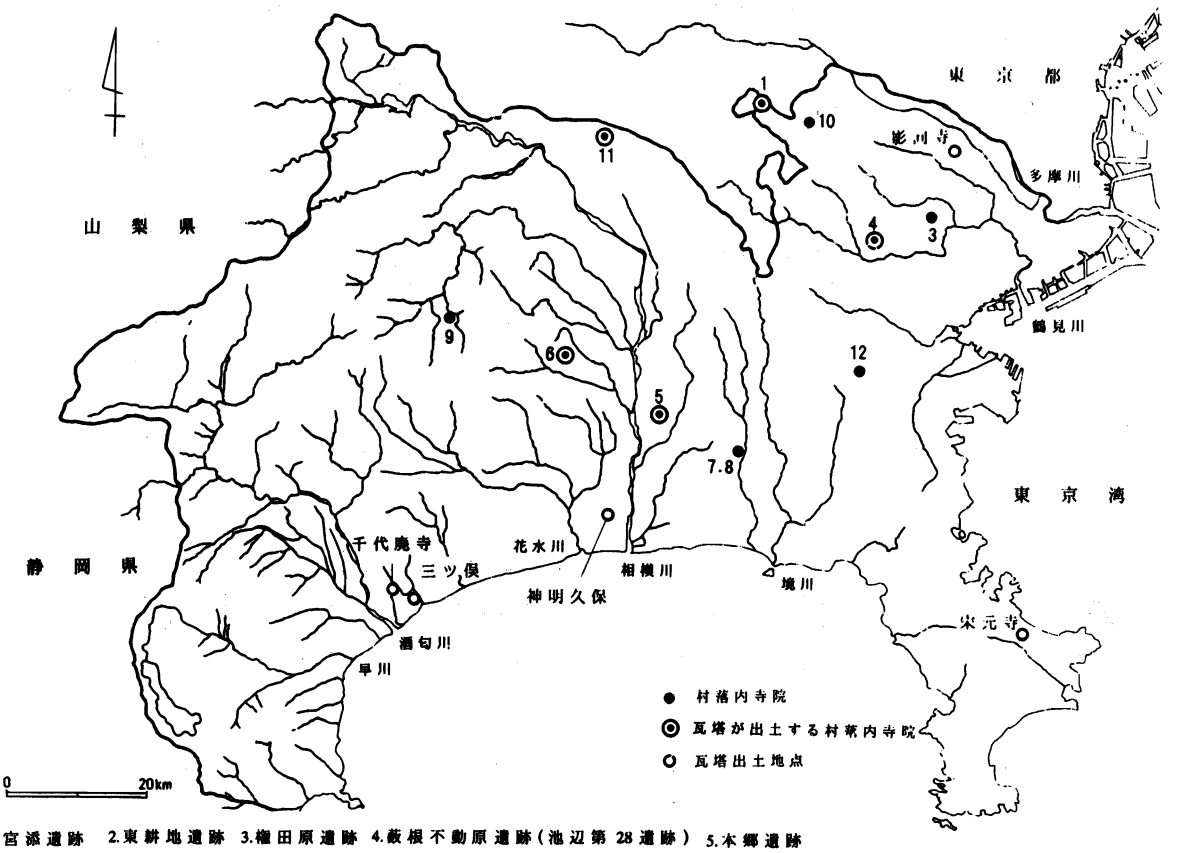
遺跡名	番号	器種	部位	出土位置	文献
宮添遺跡	5-001	須恵器	口縁～底部	5号住	文献03
	5-002	須恵器	口縁～体部	S－3号住	
	5-003	須恵器	口縁～底部	遺構外	
上谷本第二遺跡	5-004	須恵器	口縁～底部	14号住	文献05
宮之前遺跡	5-005	須恵器	口縁～底部		文献09
藪根不動原遺跡	5-006	須恵器	口縁～体部	遺構外	未報告
	5-007	須恵器	口縁～体部	遺構外	
相原二本松遺跡	5-008	須恵器	口縁～体部	2号住	文献10
相原田ノ上遺跡	5-009	須恵器	口縁～体部	7号住	文献11
橋本遺跡	5-010	須恵器	口縁～体部	遺構外	文献12
鷹番塚横穴	5-011	須恵器	口縁～底部	3号横穴	文献15
宮久保遺跡	5-012	須恵器	口縁～体部	105号住	文献16
本郷遺跡ＫＯＥＩ	5-013	須恵器	口縁～体部	20号住	文献18
上浜田遺跡	5-014	須恵器	口縁～体部	5号住	文献17
	5-015	須恵器	口縁～体部	5号住	
	5-016	須恵器	口縁～体部	30号住	
西部開発地区内遺跡	5-017	須恵器	口縁～底部	209地点	文献25
南鍛冶山遺跡7次調査区	5-018	須恵器	口縁～底部	5号住 P22	文献29
新湘南国道内遺跡	5-019	須恵器	口縁～体部	1区5号住	文献31
鳶尾遺跡	5-020	須恵器	口縁～体部	105号住	文献33
御屋敷添遺跡第4地点	5-021	須恵器	口縁～体部	遺構外	文献36
及川宮ノ西遺跡	5-022	須恵器	口縁～底部	遺構外	文献34
愛名宮地遺跡	5-023	黒色土器	口縁～底部	1号礎石	文献37
	5-024	須恵器	口縁～底部	1号礎石	
東大竹遺跡	5-025	須恵器	口縁～底部	4号住	文献38
向原遺跡	5-026	須恵器	口縁～体部	105号住	文献40
四之宮下郷遺跡	5-027	須恵器	口縁～体部	107号	文献41
神明久保遺跡	5-028	須恵器	口縁～体部	1号井戸	文献46
山王A遺跡第2地点	5-029	須恵器	口縁～体部	5号溝	文献50
王子ノ台遺跡	5-030	須恵器	口縁～底部	R－12号住	文献53
諏訪町C遺跡	5-031	須恵器	口縁～体部	5号溝	文献52
上吉井南遺跡	5-032	土師器	口縁～体部	8号住	文献60
	5-033	土師器	口縁～体部	8号住	
コウロ遺跡	5-034	須恵器	口縁～底部	4号住	文献61

6　浄瓶・水瓶

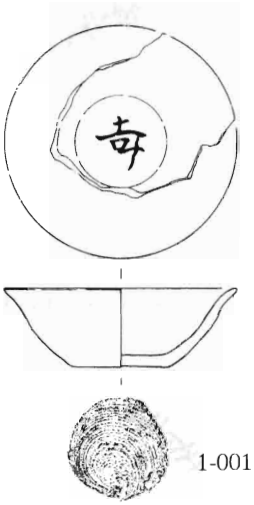
遺跡名	番号	器種	部位	出土位置	文献
宮添遺跡	6-001	灰釉陶器浄瓶	胴部～底部	遺構外	文献03
藪根不動原遺跡	6-002	灰釉陶器浄瓶	頸部	遺構外	未報告
上浜田遺跡		灰釉陶器			文献17
	6-003	水瓶形土器	完形	113号住	
真土六ノ域遺跡第12地点	6-004	灰釉陶器浄瓶	頸部		文献
稲荷前遺跡A	6-005	灰釉陶器浄瓶	頸部		文献
池子遺跡群1-B遺跡	6-006	灰釉陶器浄瓶	頸部		文献
千葉地遺跡	6-007	灰釉陶器浄瓶	口縁～頸部	遺構外	文献57
上吉井南遺跡	6-008	灰釉陶器浄瓶	全体（1/3欠）	8号住	文献61
	6-009	灰釉陶器浄瓶	注口部	遺構外	

7　蔵骨器

遺跡名	番号	器種	部位	出土位置	文献
有馬遺跡	7-001	須恵器獣足付壺・蓋	完形		文献04
山口台遺跡群	7-002	須恵器把手獣足付壺	完形		文献02
岡上小学校遺跡	7-003	灰釉陶器瓶	胴部～底部	68号住	文献01
上郷猿田遺跡	7-004	須恵器有翼壺	完形		文献17
上浜田遺跡	7-005	須恵器獣足壺	脚部		文献
愛名宮地遺跡	7-006	獣足鋳型		1号礎石	文献37
	7-007	獣足鋳型			
梶谷原B遺跡第	7-008	灰釉陶器浄瓶	全体（1/3欠）	2号住	文献45
四之宮下郷遺跡	7-009	灰釉陶器浄瓶	口縁～頸部	遺構外	文献41
山王A遺跡第2地点	7-010	緑釉陶器　獣足付壺	脚部	7号住	文献50
稲荷前A遺跡第3地点	7-011	須恵器獣足付壺	脚部	1号溝	文献
三ツ俣遺跡	7-012	須恵器獣足付壺	脚部	4号井戸	文献55
宗元寺跡	7-013	須恵器獣足付壺	脚部		文献58

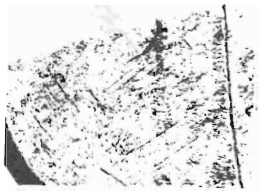


1 宮添遺跡　2.東耕地遺跡　3.権田原遺跡　4.蔽根不動原遺跡（池辺第28遺跡）　5.本郷遺跡
6.愛名宮地遺跡　7.南鍛冶山遺跡　8.下ノ根遺跡　9.馬場（No.3）遺跡　10.上台遺跡　11.矢指・久保遺跡　12.後中田南遺跡第2地点



1-001

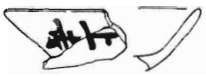
1-002



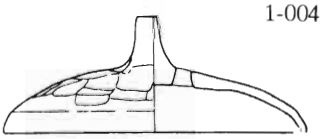
1-003

1-004

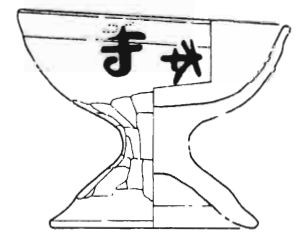
1-006



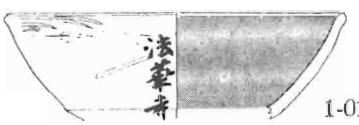
1-007



1-009

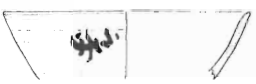


1-005



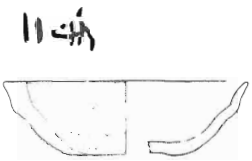
1-010

1-012



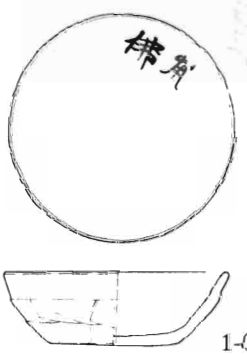
1-011

1-014



1-013

1-015

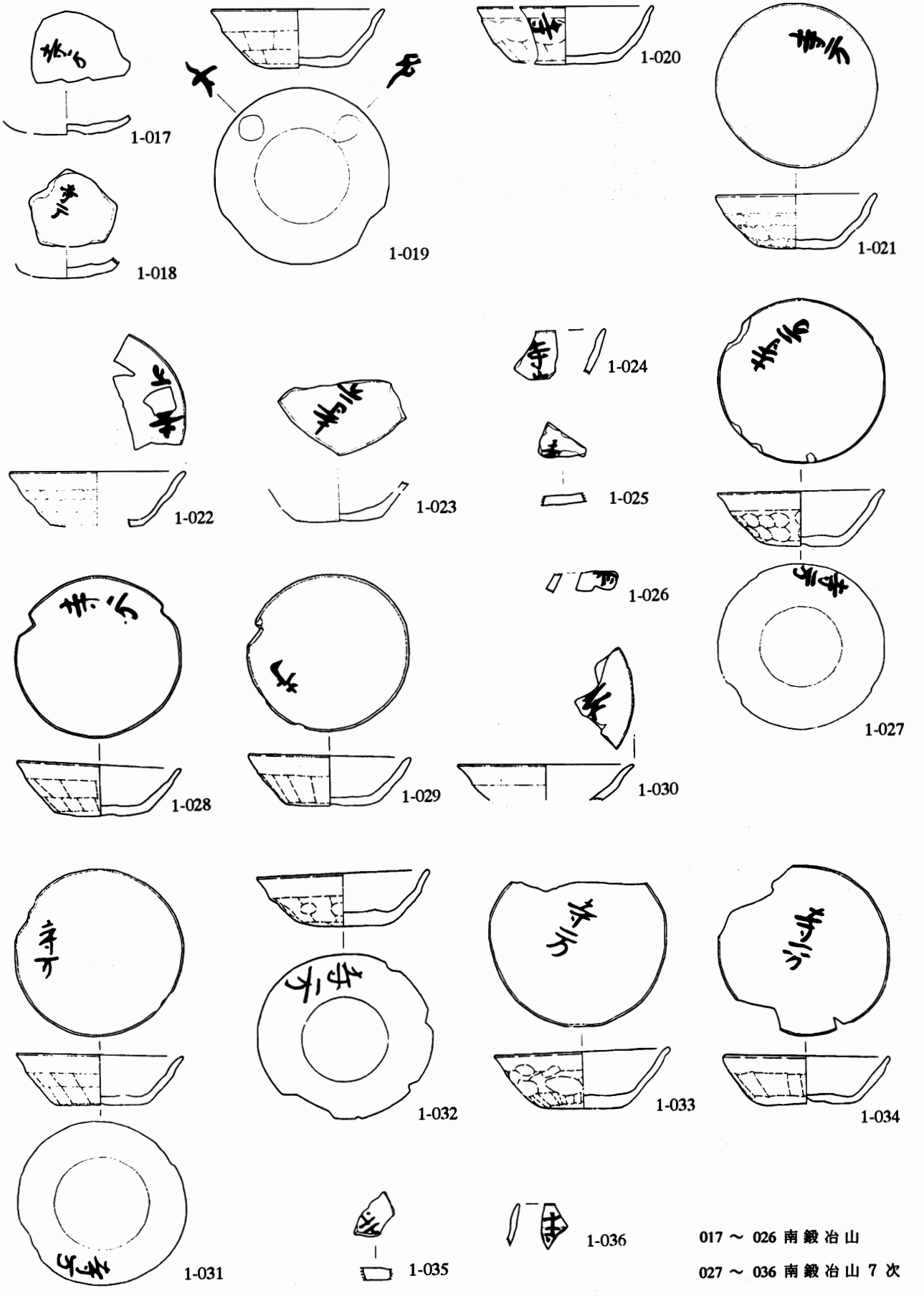


1-016

1-008

001 宮添　002・003 拝堂　004・005 東耕地　006 矢掛・久保　007 ～ 009 本郷　010 ～ 012 国分尼寺北方
013 ～ 016 南鍛冶山

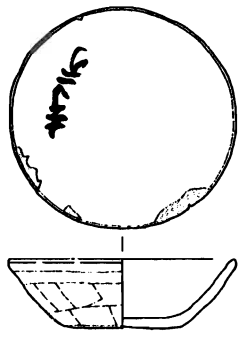
第 1 図　墨書(1)

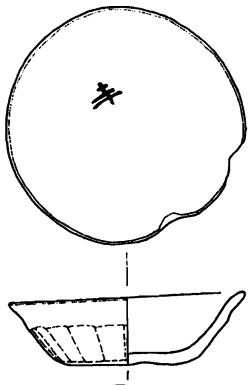
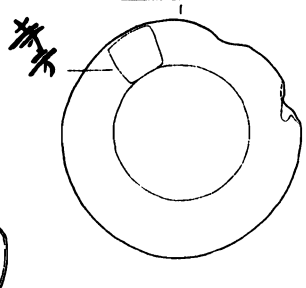


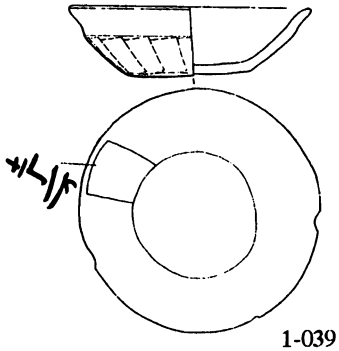
017 ～ 026 南鍛冶山

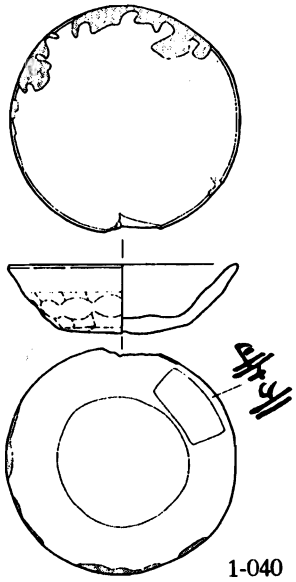
027 ～ 036 南鍛冶山 7 次

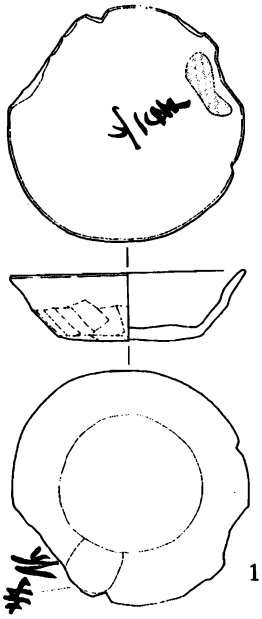
第 2 図　墨書(2)

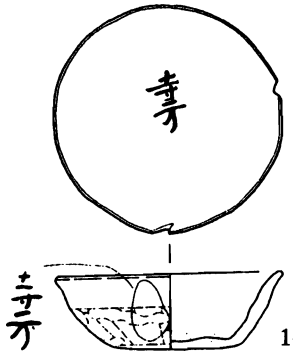

1-037

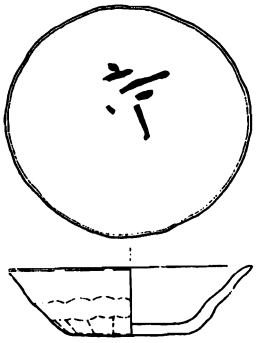


1-038

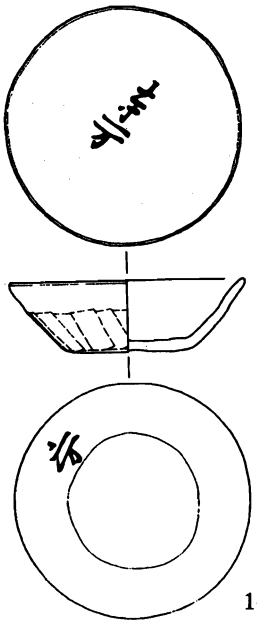

1-039

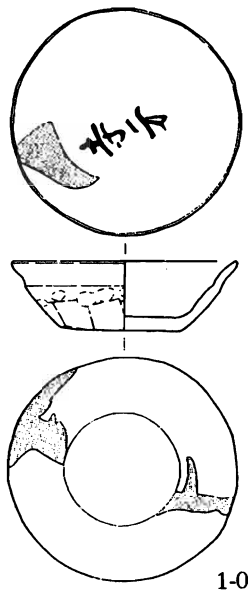

1-040


1-041


1-042

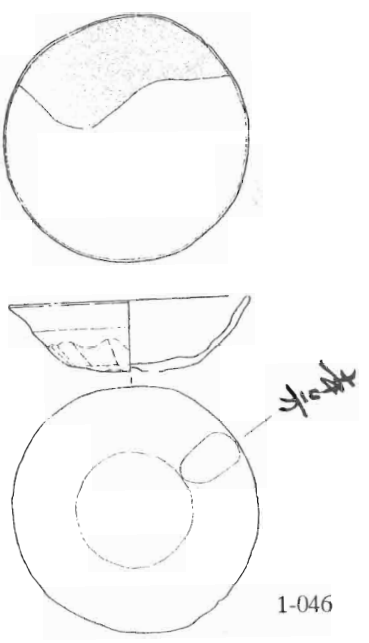

1-043

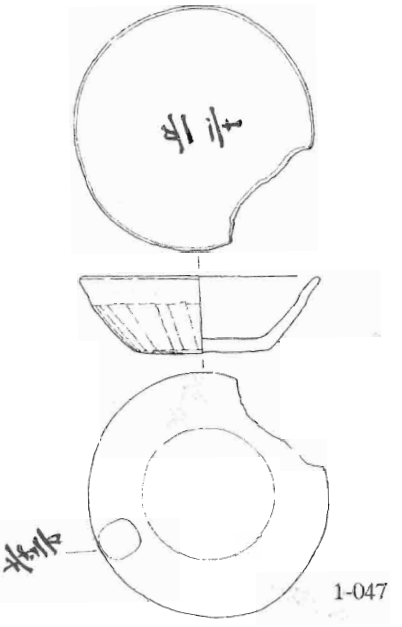

1-044

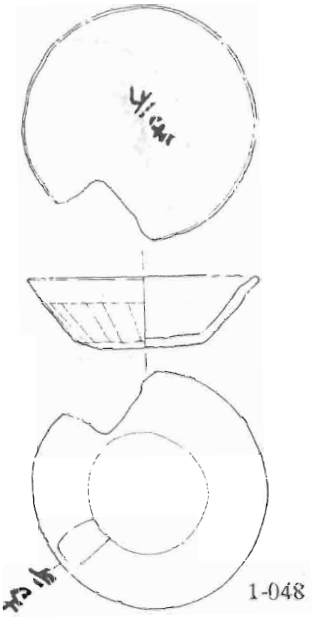

1-045

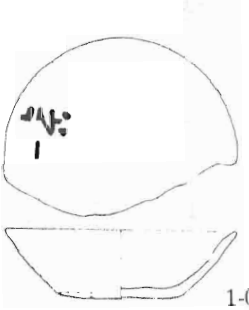
037 ～ 045 南鍛冶山 7 次

第 3 図　墨書（3）

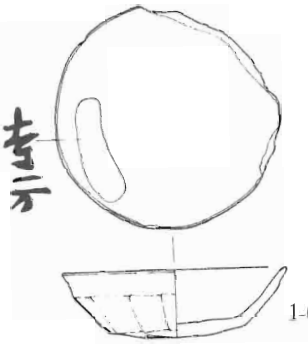

1-046

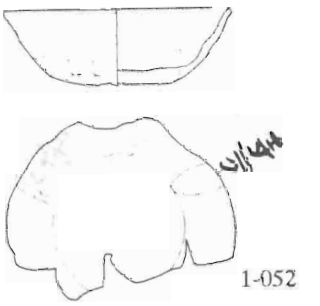

1-047


1-048


1-049

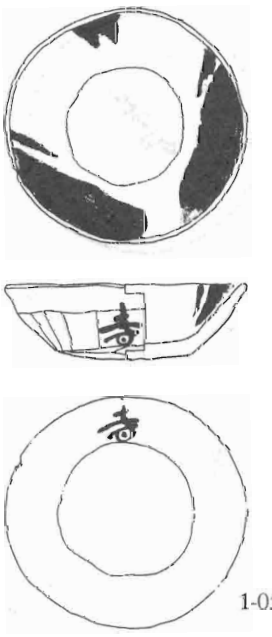
1-050

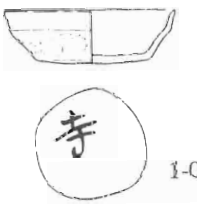

1-051

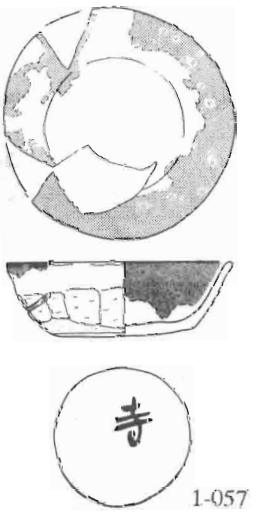

1-052

1-053

1-054


1-055


1-056


1-057

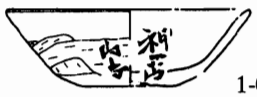
046 ～ 053 南鍛冶山 7 次

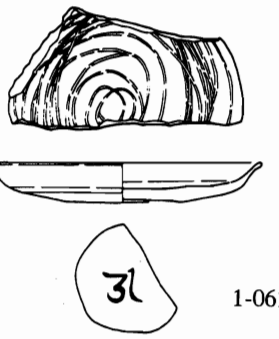
054 石川　055 間門川　056・057 馬場

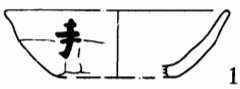
第 4 図　墨書（4）

1-058

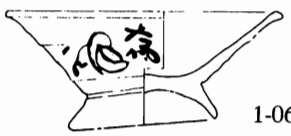
1-059


1-060

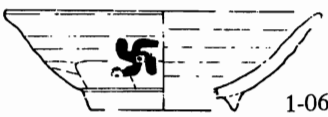

1-061

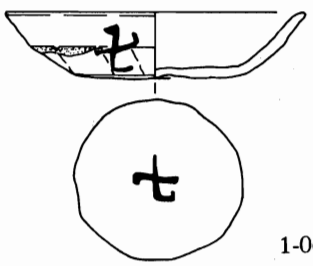

1-062

1-063


1-064

1-065


1-066


1-067

1-068

墨書

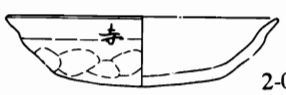
058 及川天台　059 愛名宮地

060 草山　061・062 四ノ宮下郷

063 高林寺　064 天神前

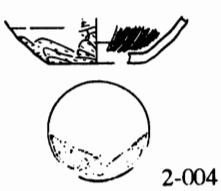
065 神明久保　066 真上六ノ域 9 地点

067 真土六ノ域 8 地点　068 大町谷東


2-001

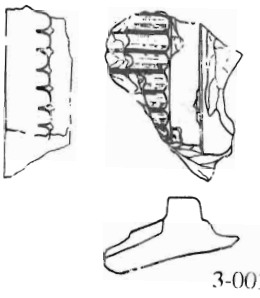
2-002

2-003

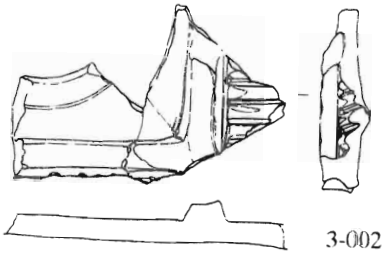

2-004

刻書　001 宮添　002 本郷 R C　003 若尾山　004 向原

第 5 図　墨書(5)・刻書

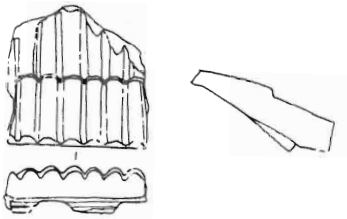


3-001



3-002

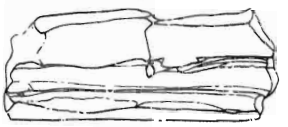
3-003

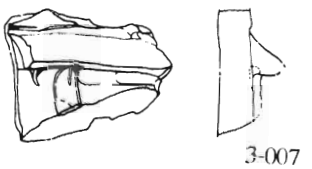


3-004

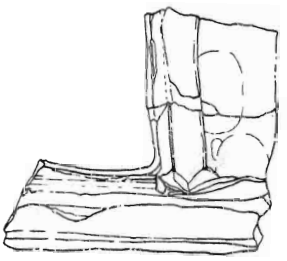
3-005

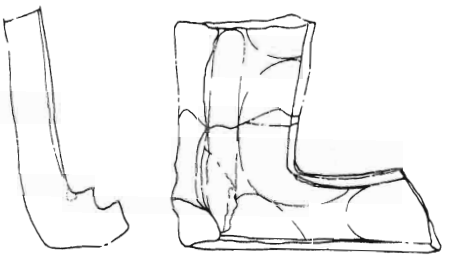
3-006



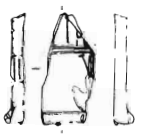


3-007

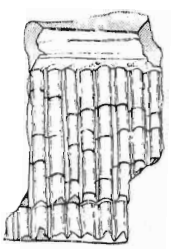


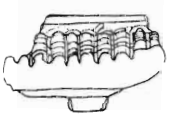


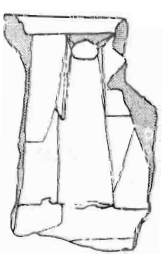
3-008



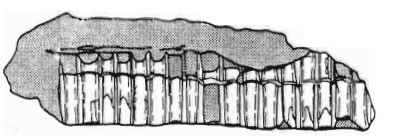
3-009

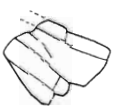


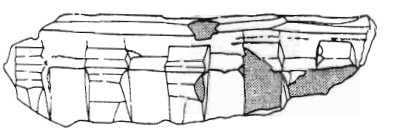




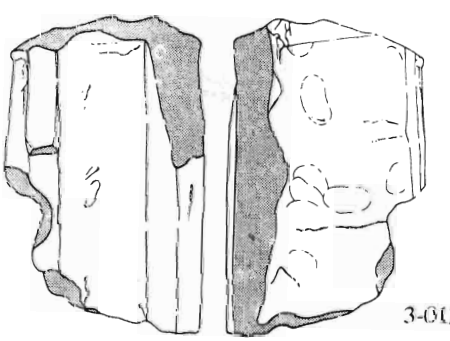
3-010



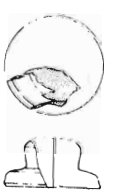




3-011



3-012



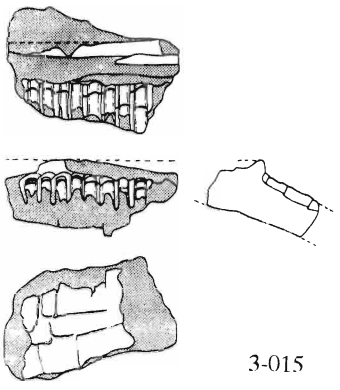
3-013

001 影向寺跡　002 ～ 009 宮添

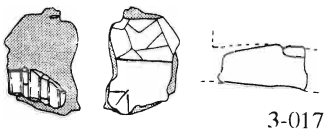
010 ～ 013 藪根不動原

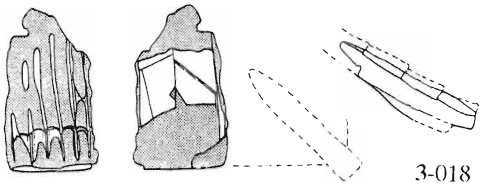
第 6 図　瓦塔（1）

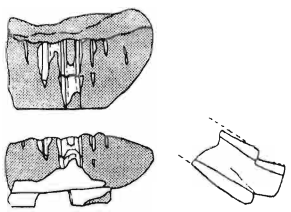
3-014

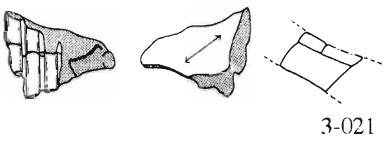

3-015

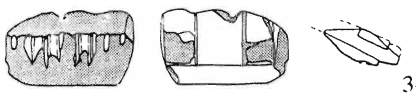
3-016


3-017

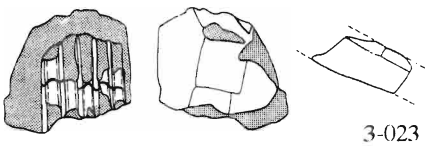

3-018


3-019

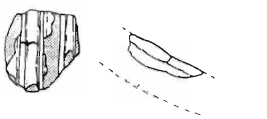

3-021

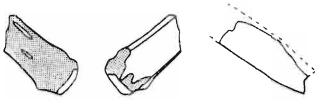

3-020

3-022

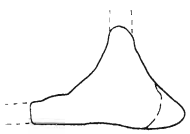

3-023

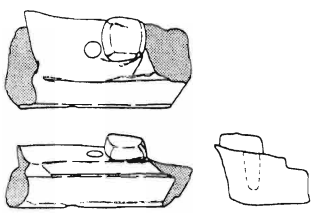
3-024

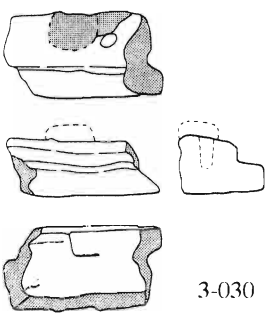

3-025

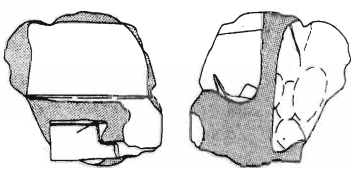

3-026

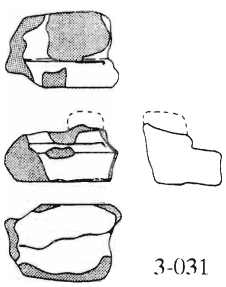
3-027

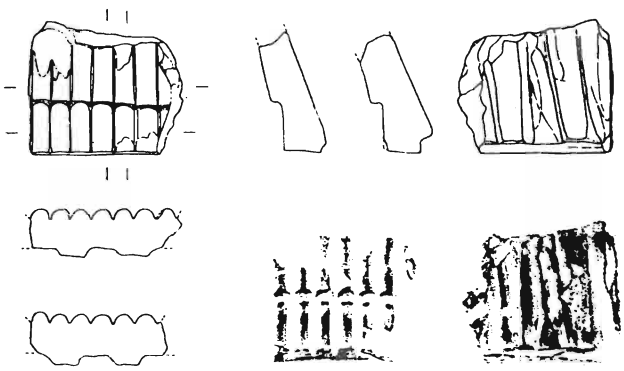


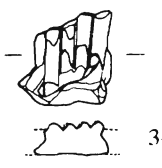

3-029

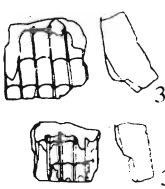

3-030


3-028


3-031


3-032

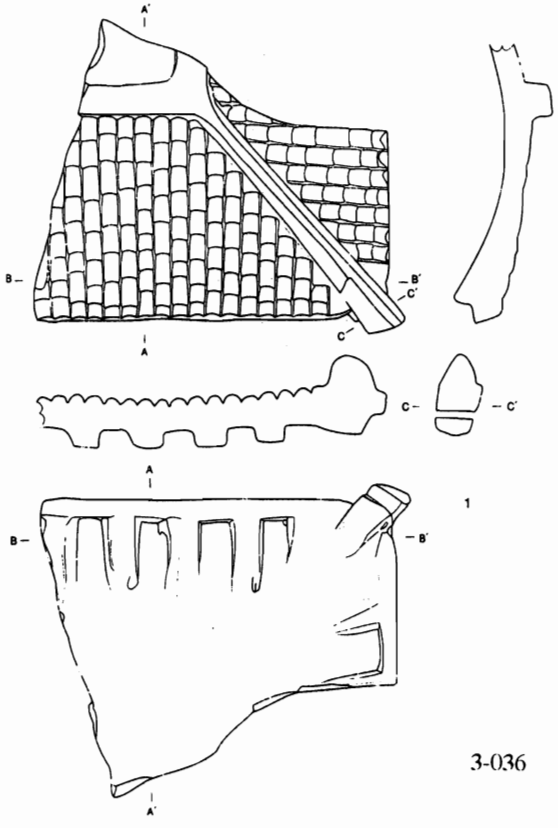

3-033


3-034

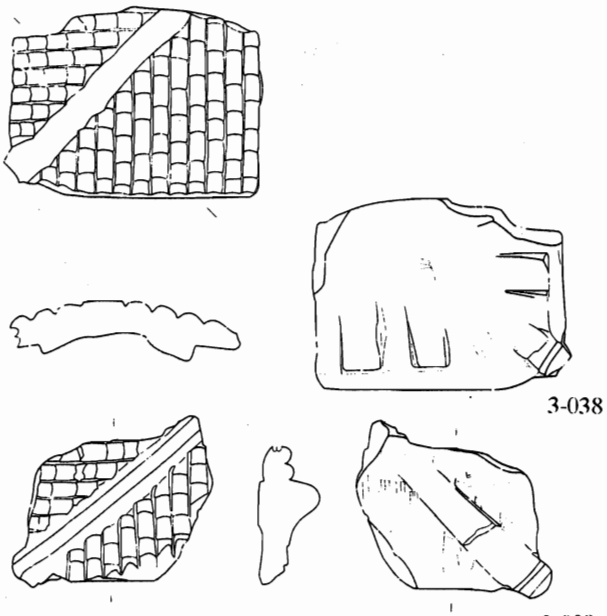
3-035

014 ～ 031 薮根不動原　032 矢掛・久保　033 ～ 035 本郷

第 7 図　瓦塔（2）

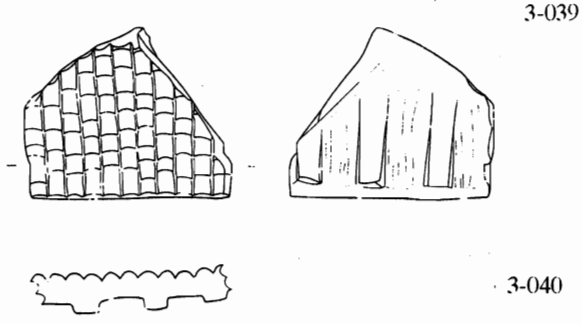


3-036

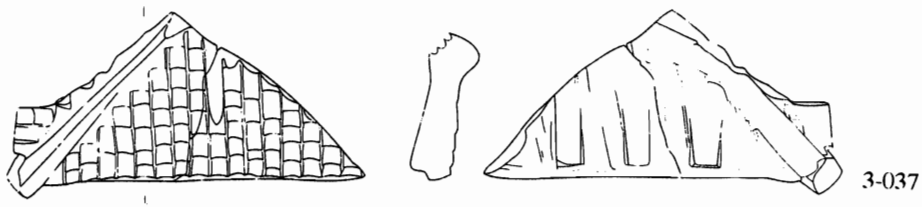


3-038

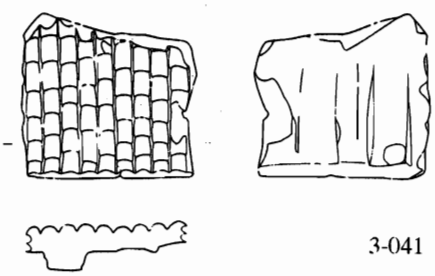
3-039



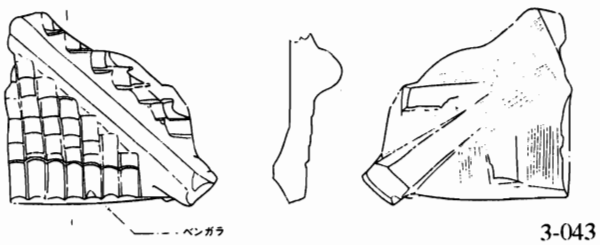
3-040



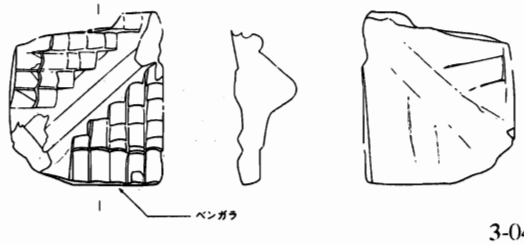
3-037



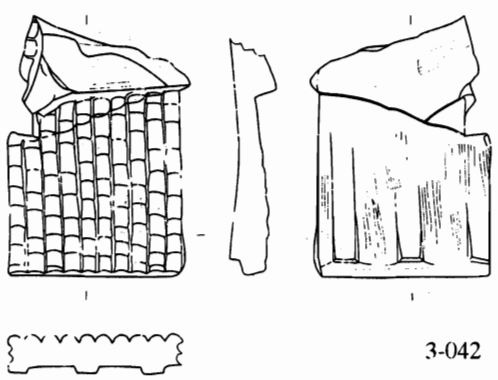
3-041



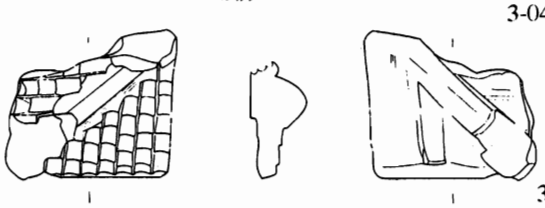
3-043



3-044



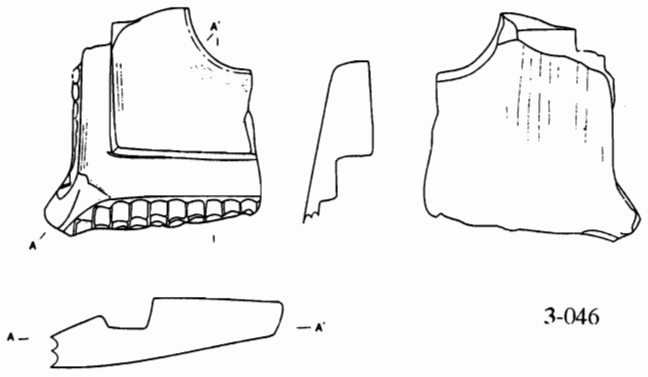
3-042



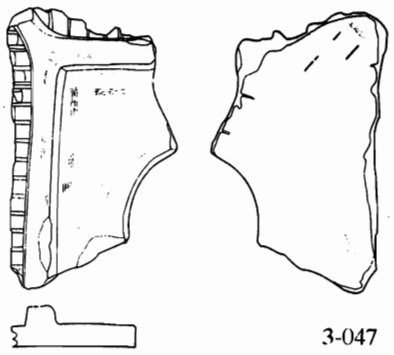
3-045

036 ～ 045 愛名宮地

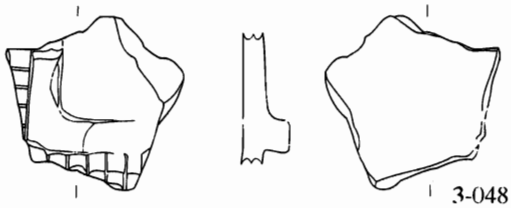
第 8 図　瓦塔（3）



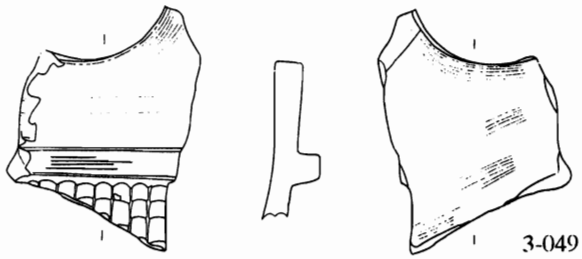
3-046



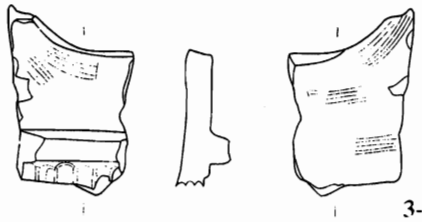
3-047



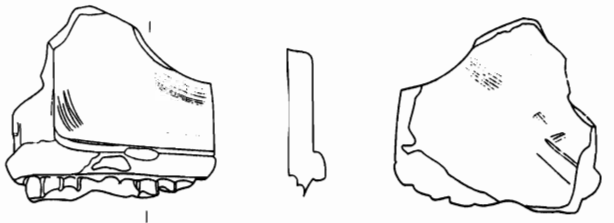
3-048



3-049

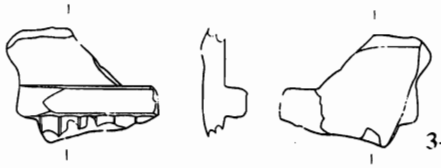


3-050

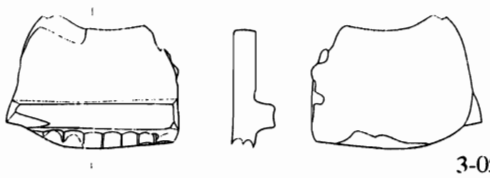


3-051

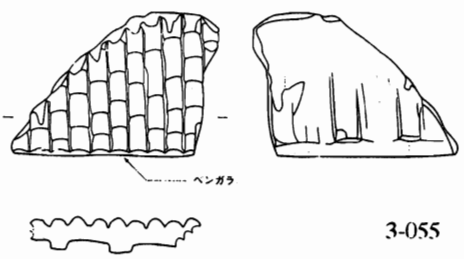
3-052



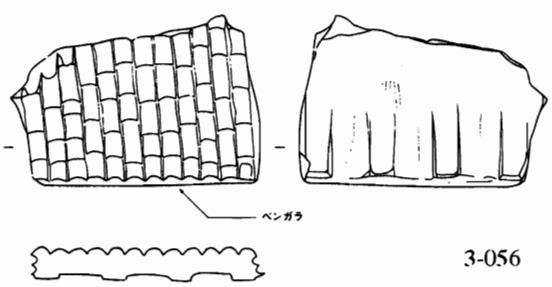
3-053



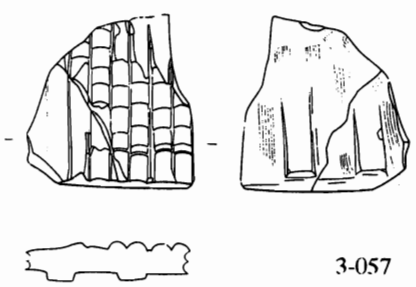
3-054



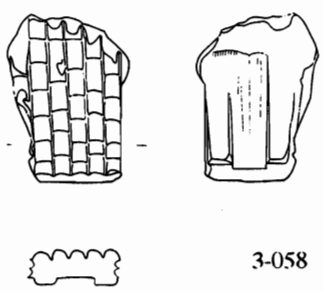
3-055



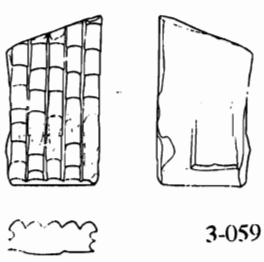
3-056



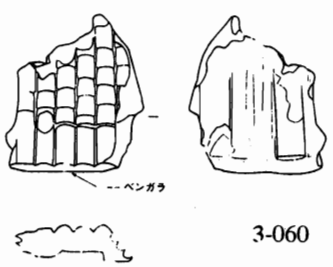
3-057



3-058



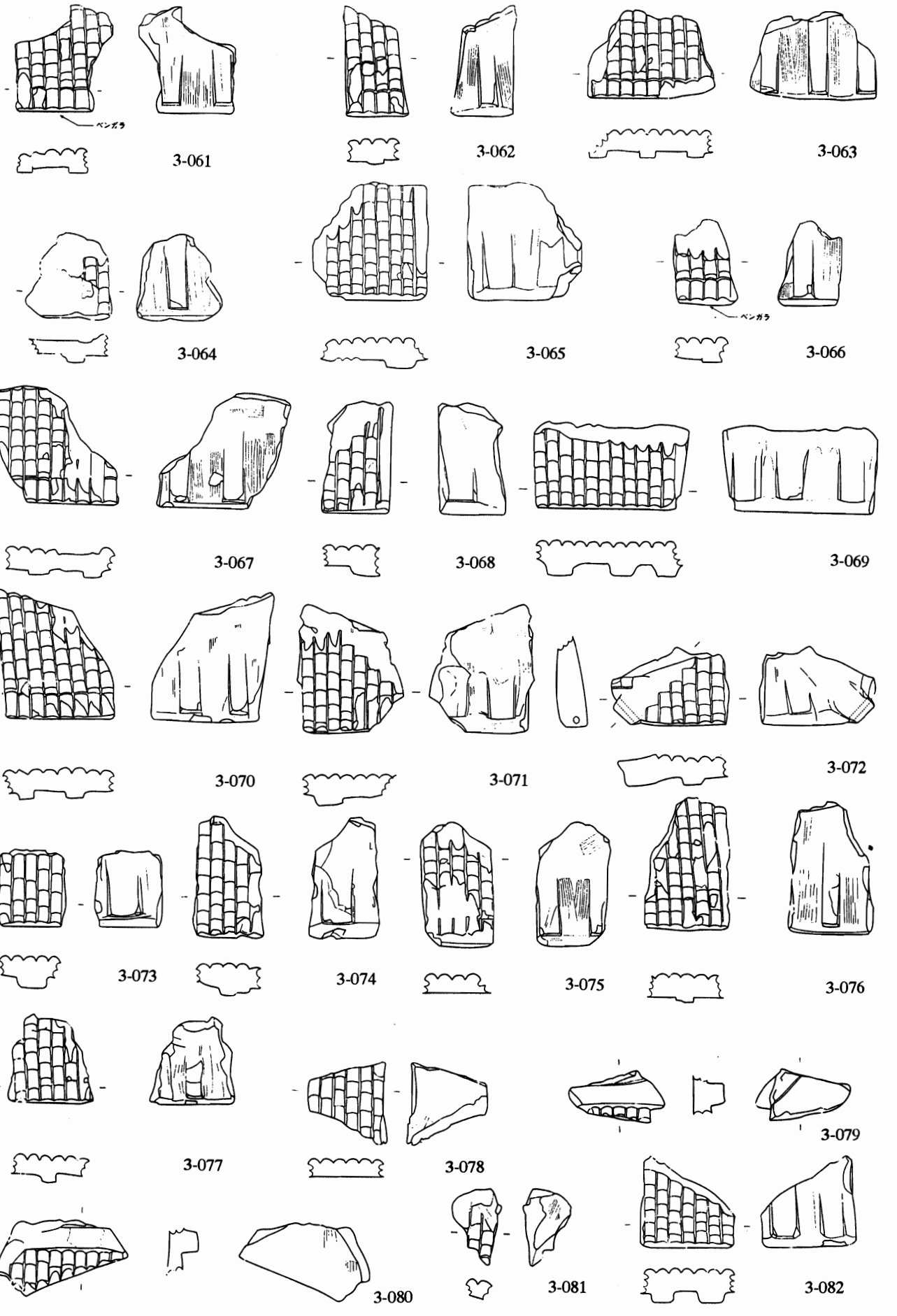
3-059



3-060

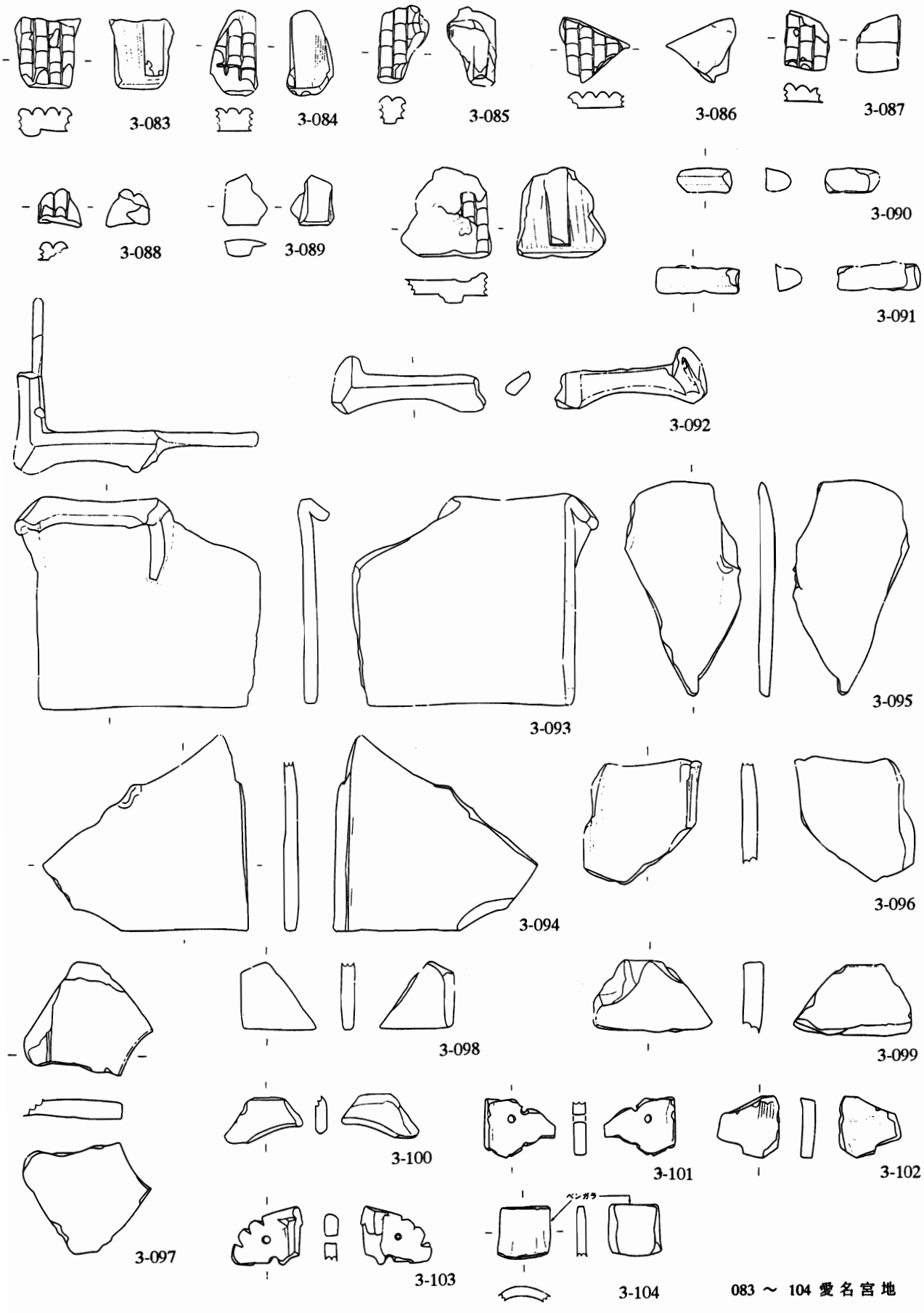
046 ～ 060 愛名宮地

第９図　瓦塔（4）

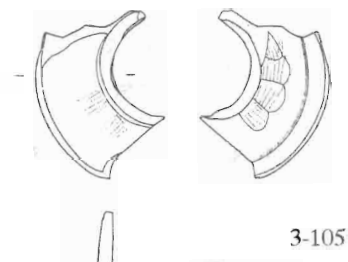


061 ～ 082 愛名宮地

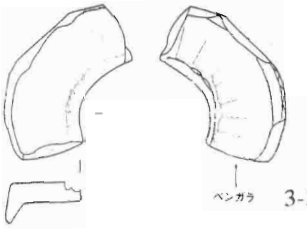
第10図　瓦塔（5）


3-083
3-084
3-085
3-086
3-087
3-088
3-089
3-090
3-091
3-092
3-093
3-094
3-095
3-096
3-097
3-098
3-099
3-100
3-101
3-102
3-103
ベンガラ
3-104
083 ～ 104 愛名宮地

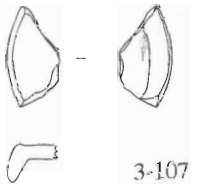
第11図　瓦塔（6）



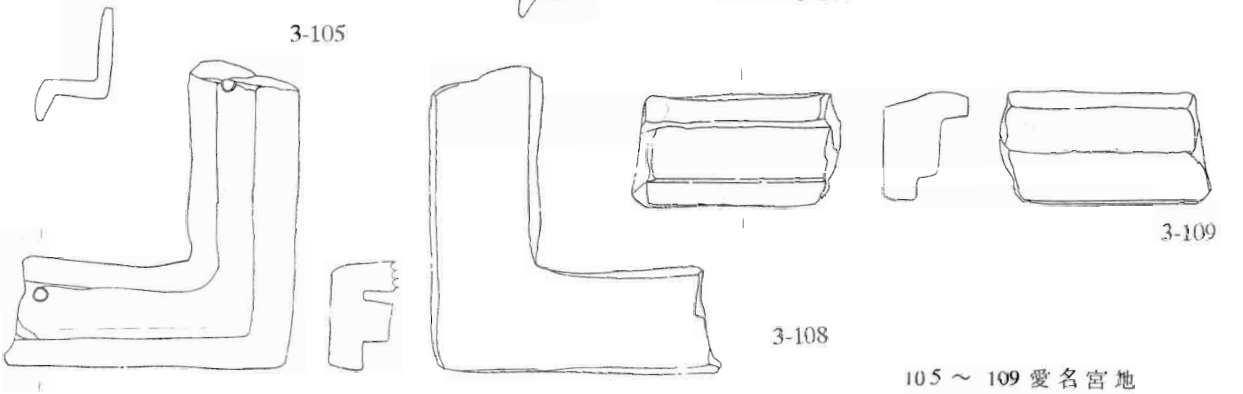
3-105



3-106



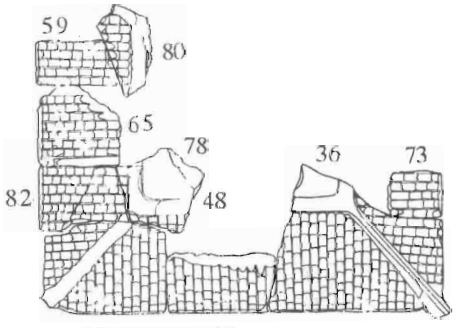
3-107

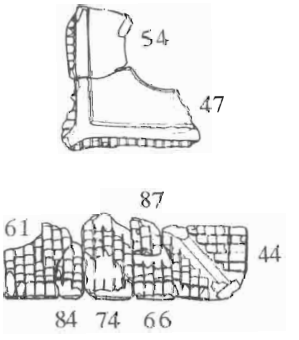


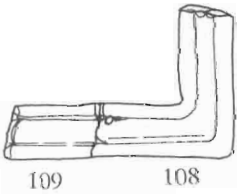
3-108

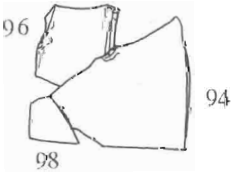
3-109

105 ～ 109 愛名宮地

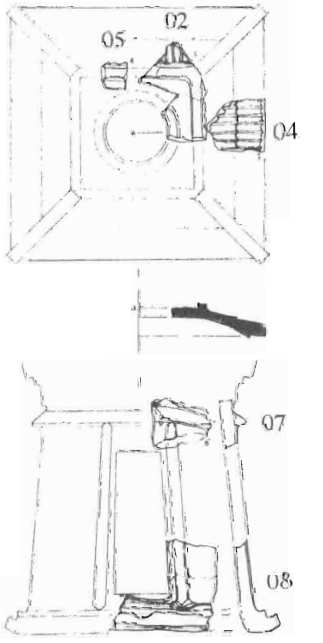




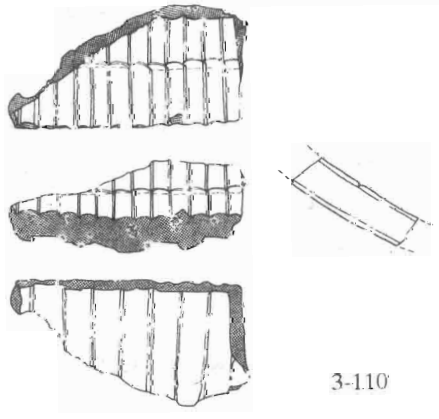




愛名宮地　瓦塔接合図

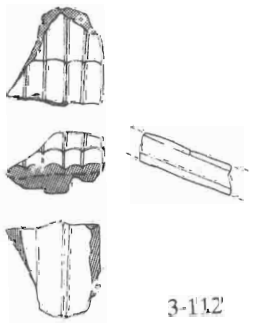


宮添　瓦塔接合図



3-110

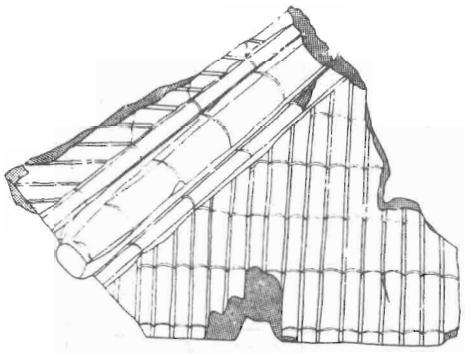
3-111

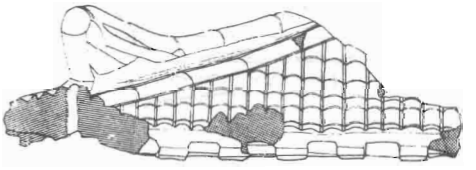


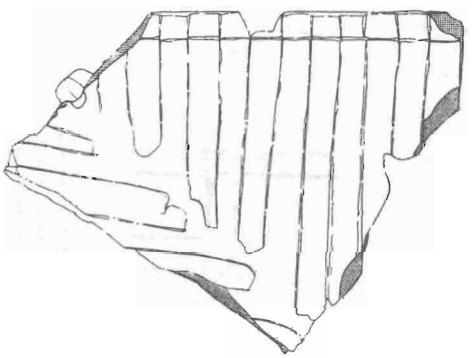
3-112

110　110 ～ 112 神明久保

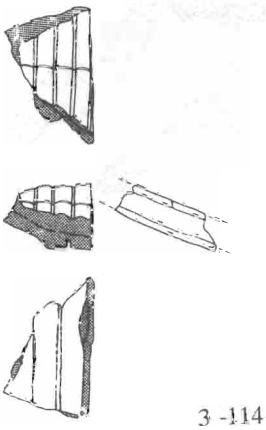
第 12図　瓦塔（7）



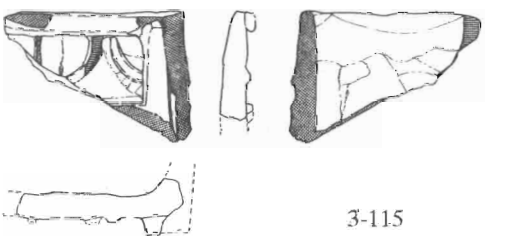




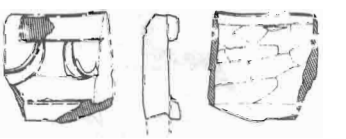
3-113



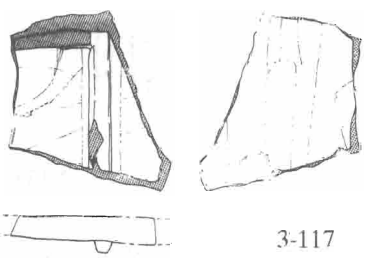
3-114



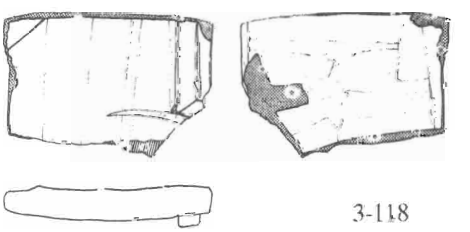
3-115



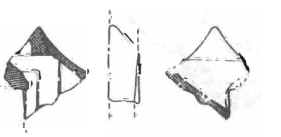
3-116



3-117

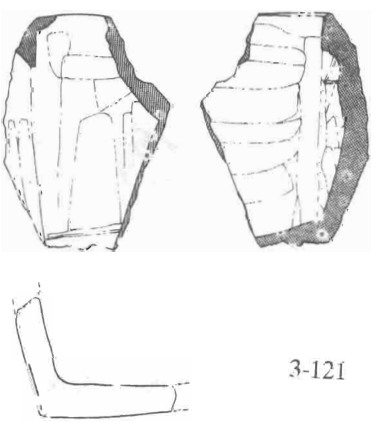


3-118

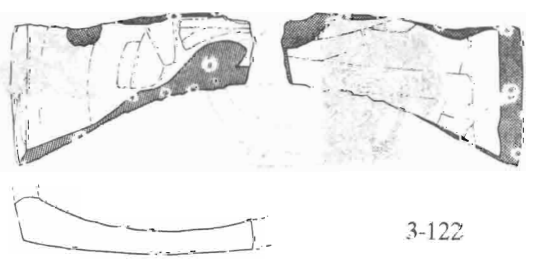


3-119

3-120



3-121

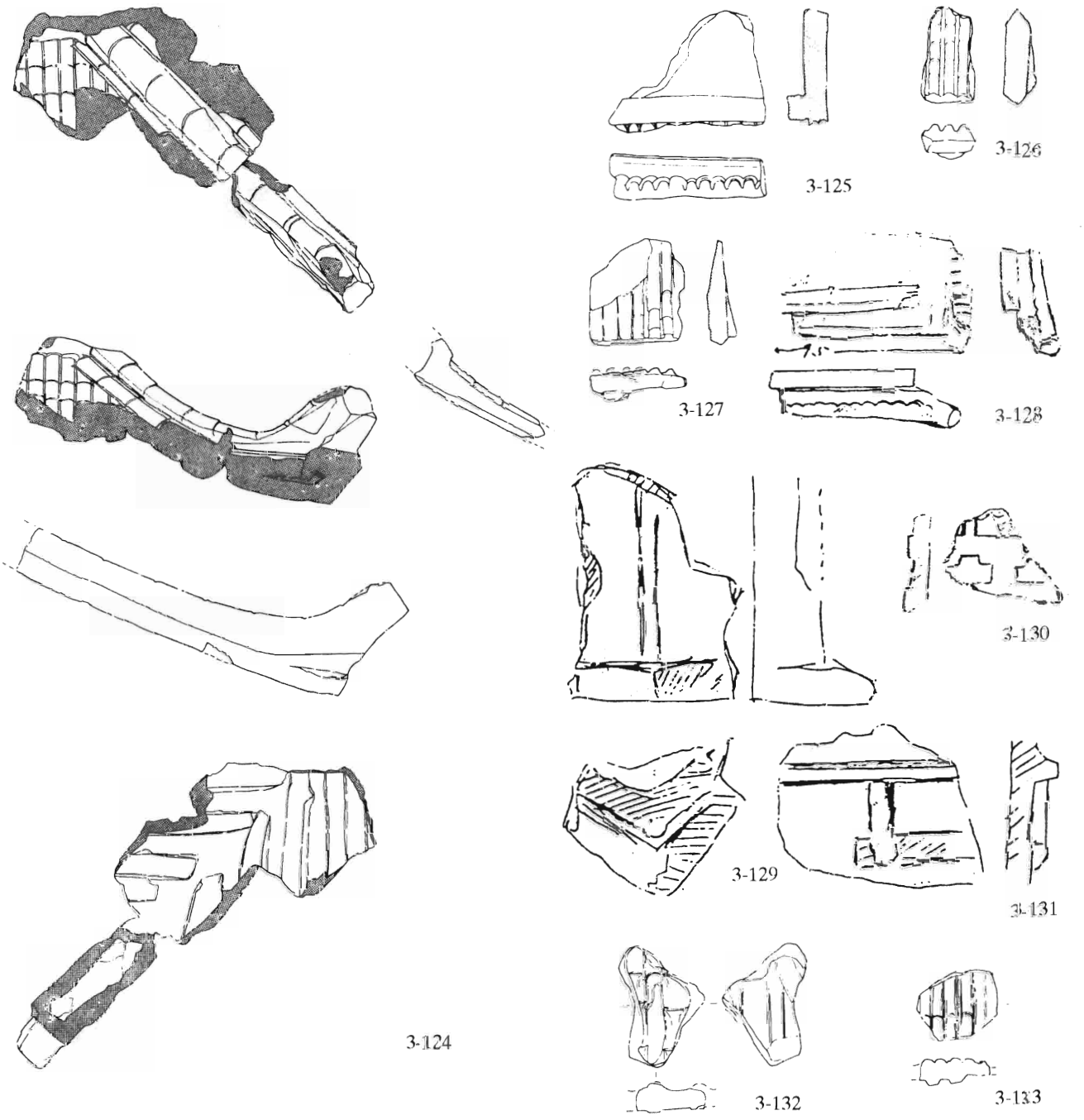


3-122

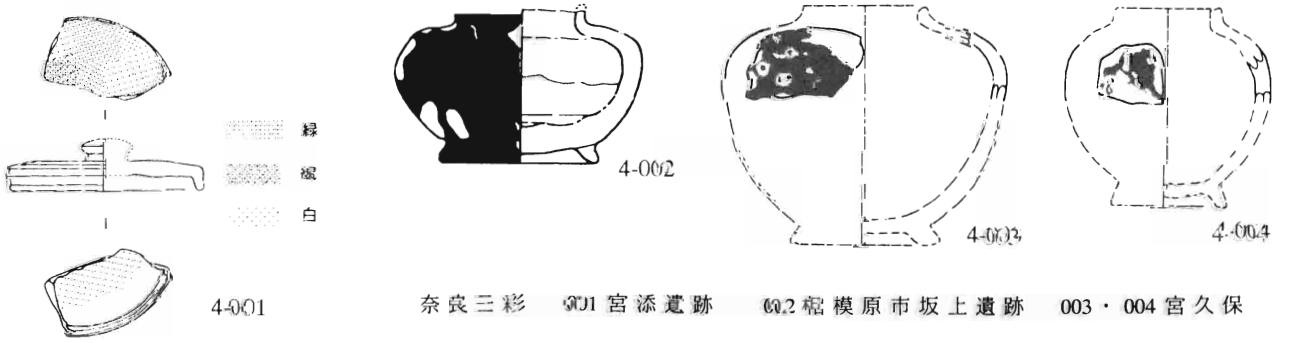
3-123

113 ～ 123 神暁久保

第13図　瓦塔(8)

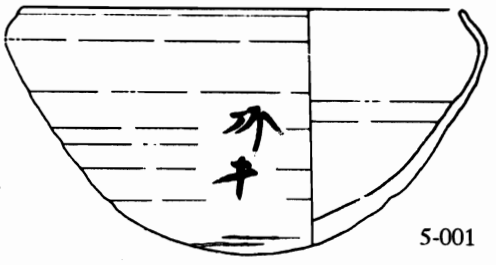


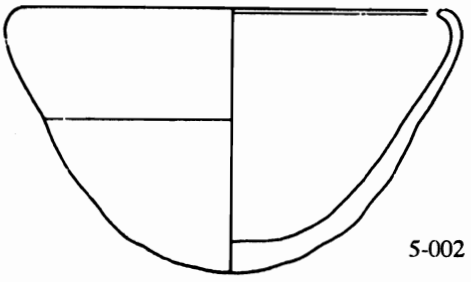
瓦塔　124 神明久保　125 ～ 127 三ツ俣　128 ～ 131 千代廃寺　132・133 宗元寺跡

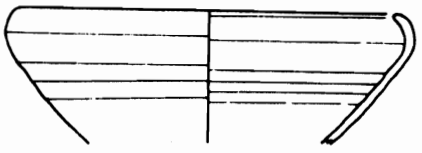


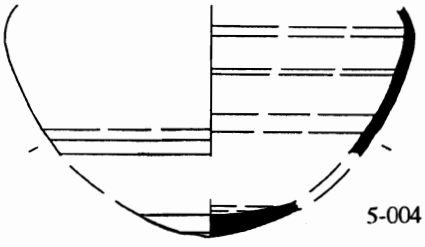
奈良三彩　001 宮添遺跡　002 橿模原市坂上遺跡　003・004 宮久保

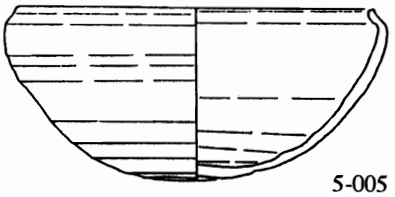
第14図　瓦塔(9)・奈良三彩

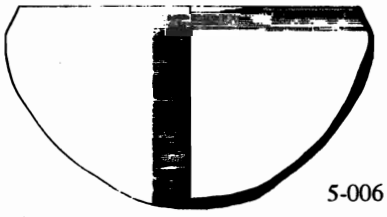

5-001

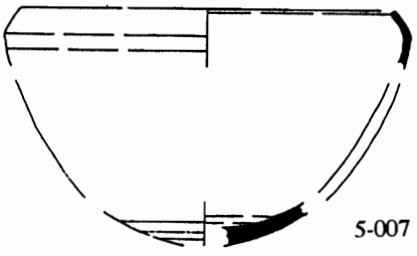

5-002

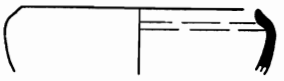

5-003


5-004

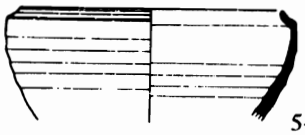

5-005


5-006

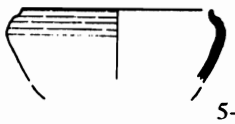

5-007

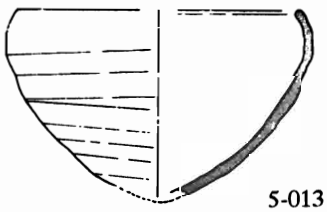

5-008

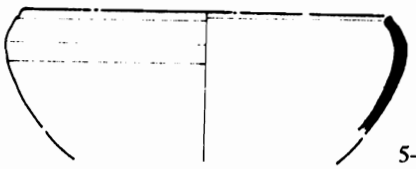
5-009

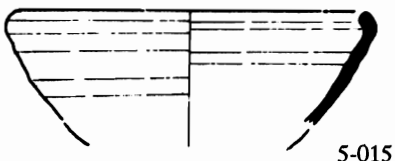

5-010

5-011

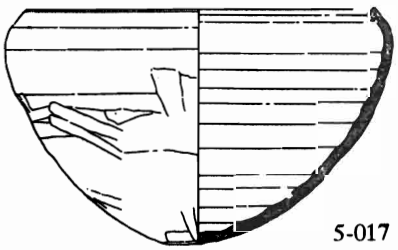

5-012

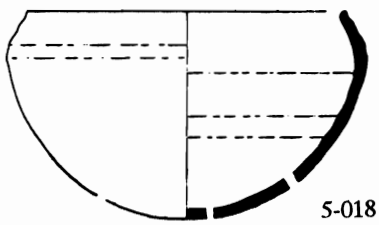

5-013

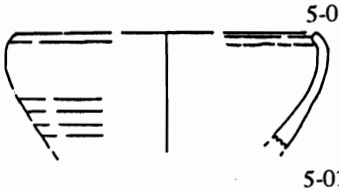

5-014

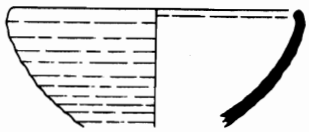

5-015

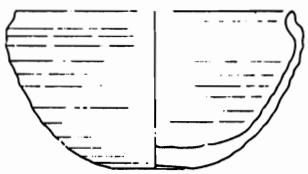
5-016


5-017


5-018


5-019

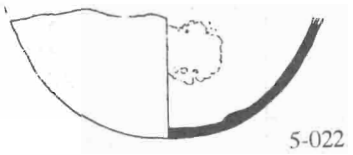

5-021

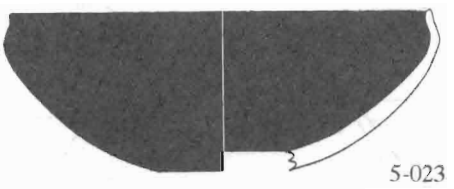


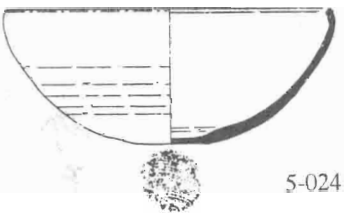
5-020

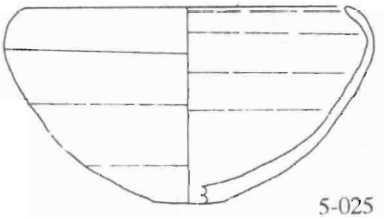
001 ～ 003 宮添　004 上谷本第二
005 宮之前　006・007 薮根不動原
008 相原二本松　009 相原田ノ上
010 橋本遺跡　011 鷹番塚横穴
012 宮久保　013 本郷　014 ～ 016 上浜田　017 西部開発地区内
018 南鍛冶山 7 次　019 新湘南国道内　020 鳶尾　021 御屋敷添 4 地点

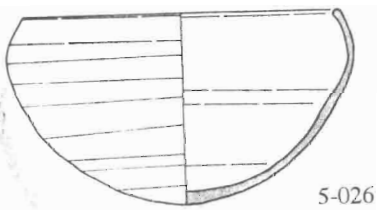
第 15 図　鉄鉢形土器（1）

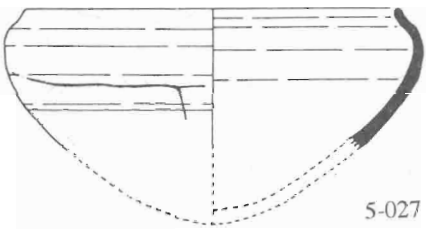

5-022

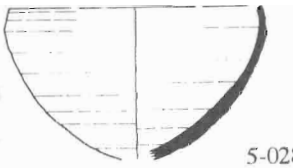

5-023


5-024

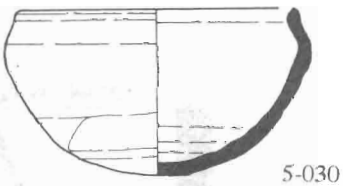

5-025

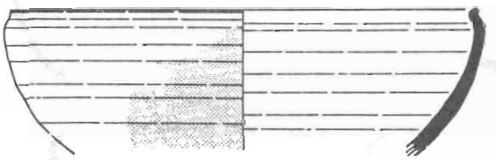

5-026

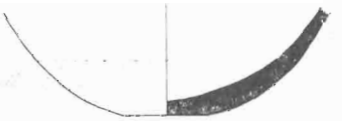

5-027

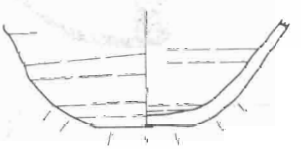

5-028

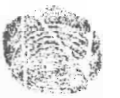
5-029

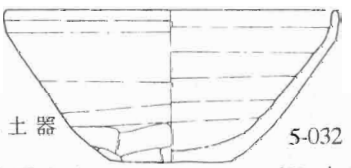

5-030

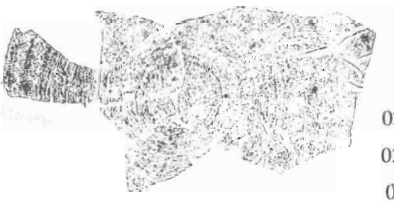

5-031


5-033



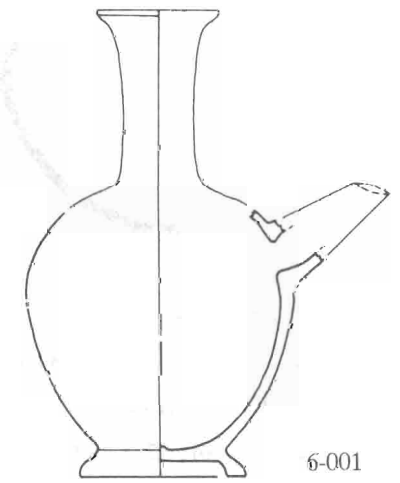

5-034

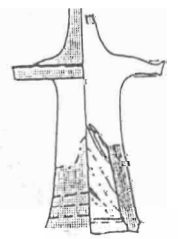

5-032



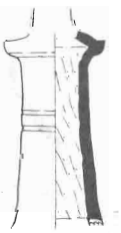
鉄鉢形土器

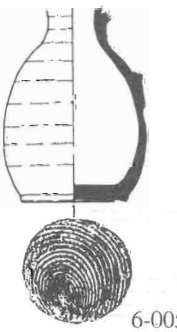
022 及川宮ノ西
023・024 愛名宮地 025 東大竹
026 向原　027 四之宮下郷
028 神明久保　029 山王A　030 王子ノ台　031 諏訪町C　032・033 上吉井南　034 コウロ

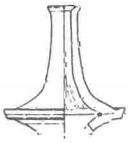

6-001

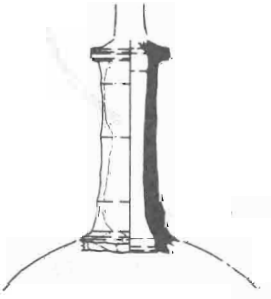

6-002

6-003


6-004


6-005

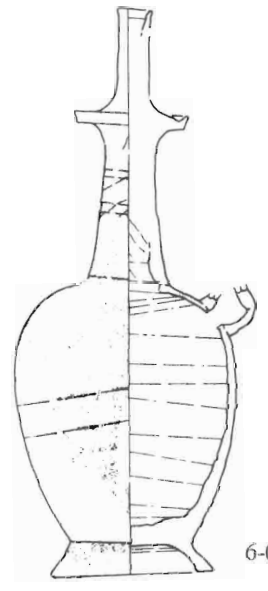

6-007


6-006

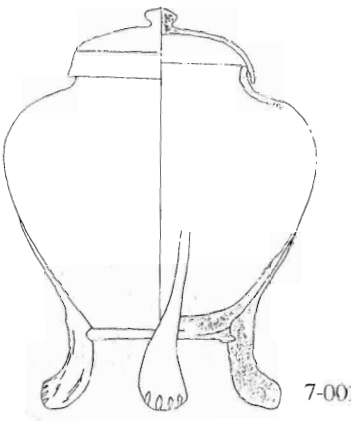
浄瓶・水瓶

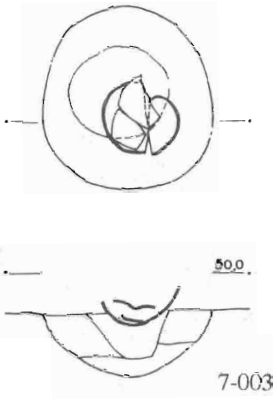
001 宮添　002 薮根不動原　003 上浜田
004 真土六ノ域　005 稲荷前A　006 池子 1-B
007 千葉地

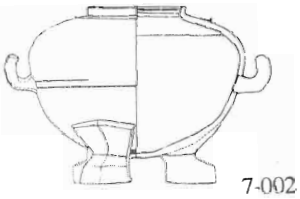
第16図　鉄鉢形土器(2)・浄瓶・水瓶(1)

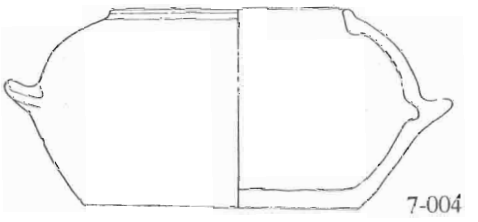


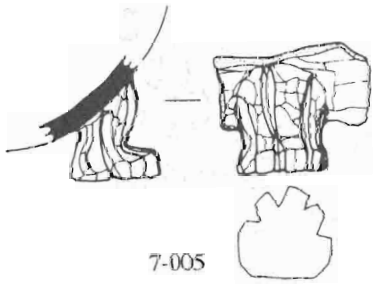
浄瓶・水瓶　008・009 上吉井南

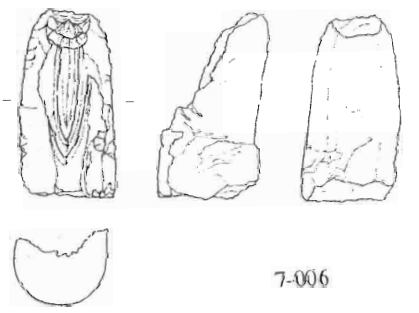


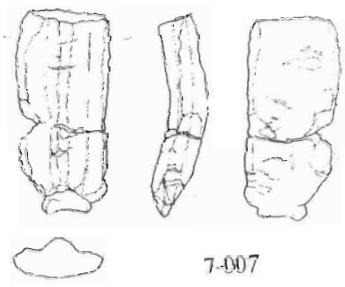


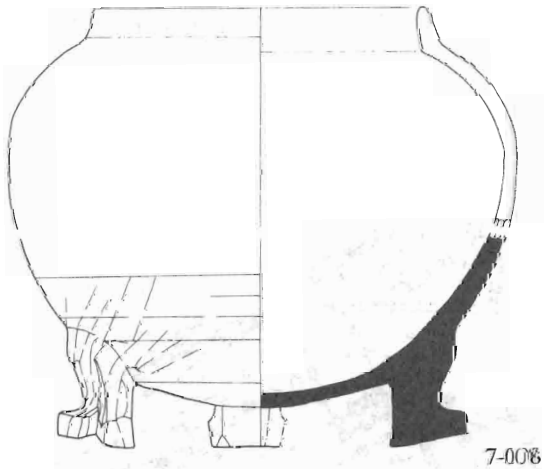


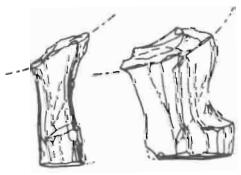


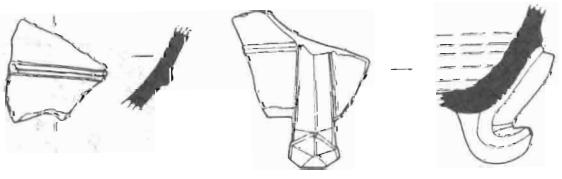




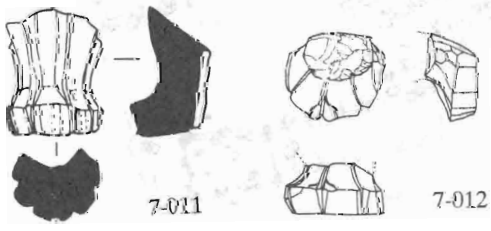


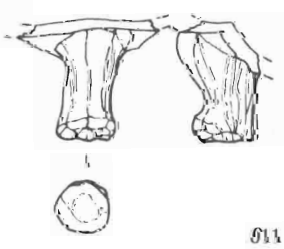






蔵骨器



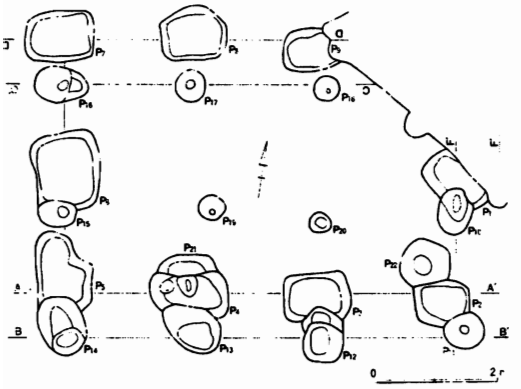


001 有馬　002 山口台　003 岡上小学校
004 上郷猿田　005 上浜田
006・007 愛名宮地　008 梶谷原
009 四之宮下郷　010 山王 A
011 稲荷前 A　012 三ツ俣　013 宗元寺跡

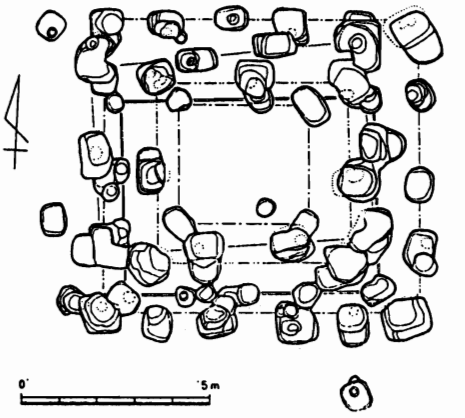
第17図　浄瓶・水瓶（2）・蔵骨器

図1

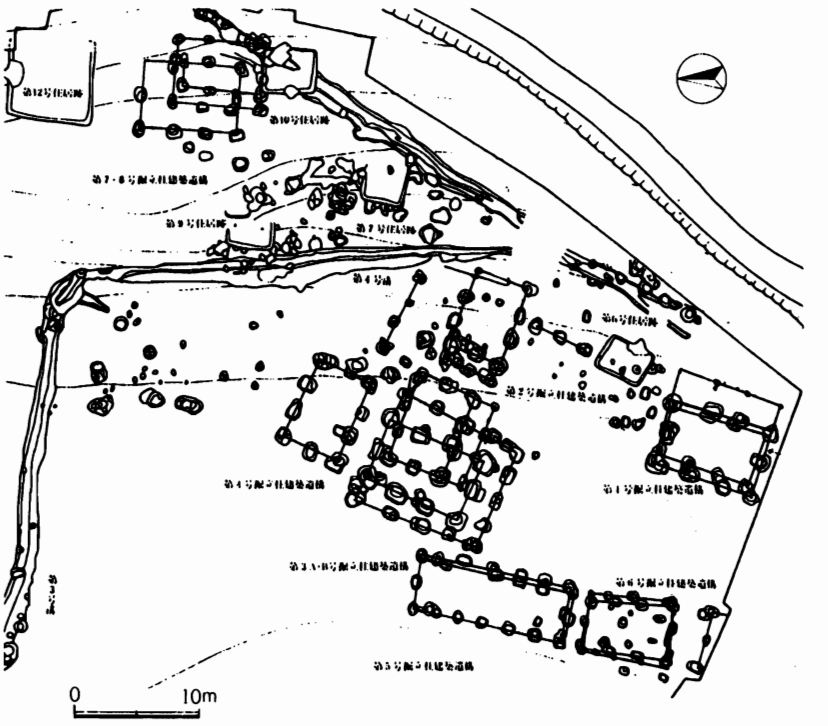
宮添遺跡



宮添遺跡1・2号掘立柱建物跡

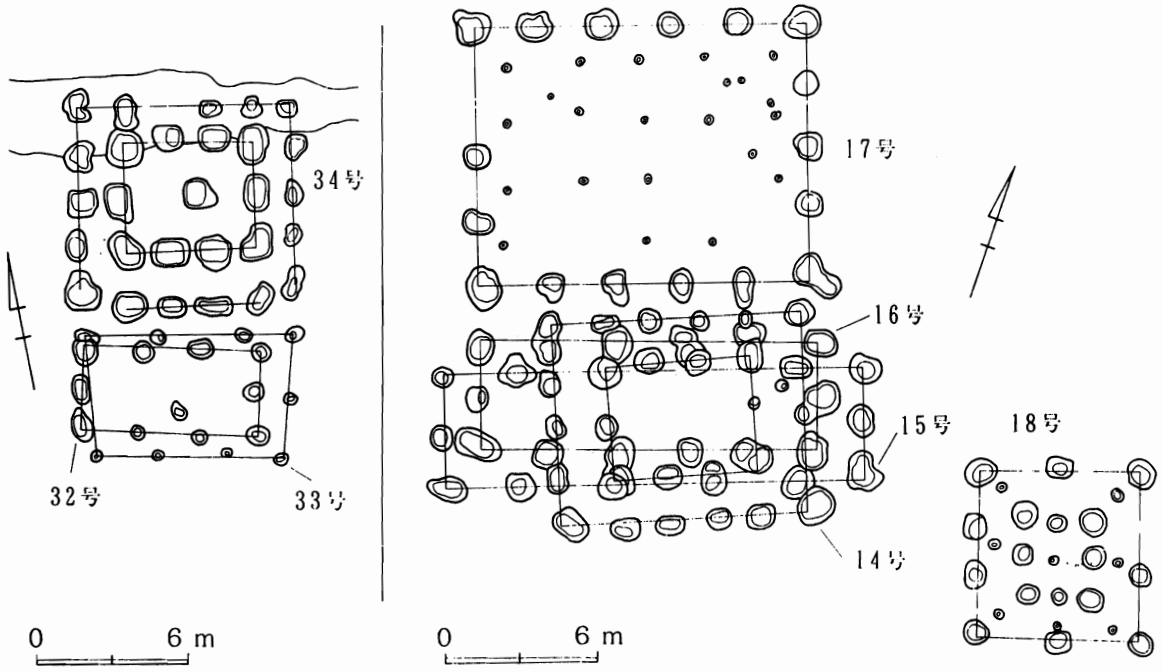


権田原遺跡F区2～4号掘立柱建物跡



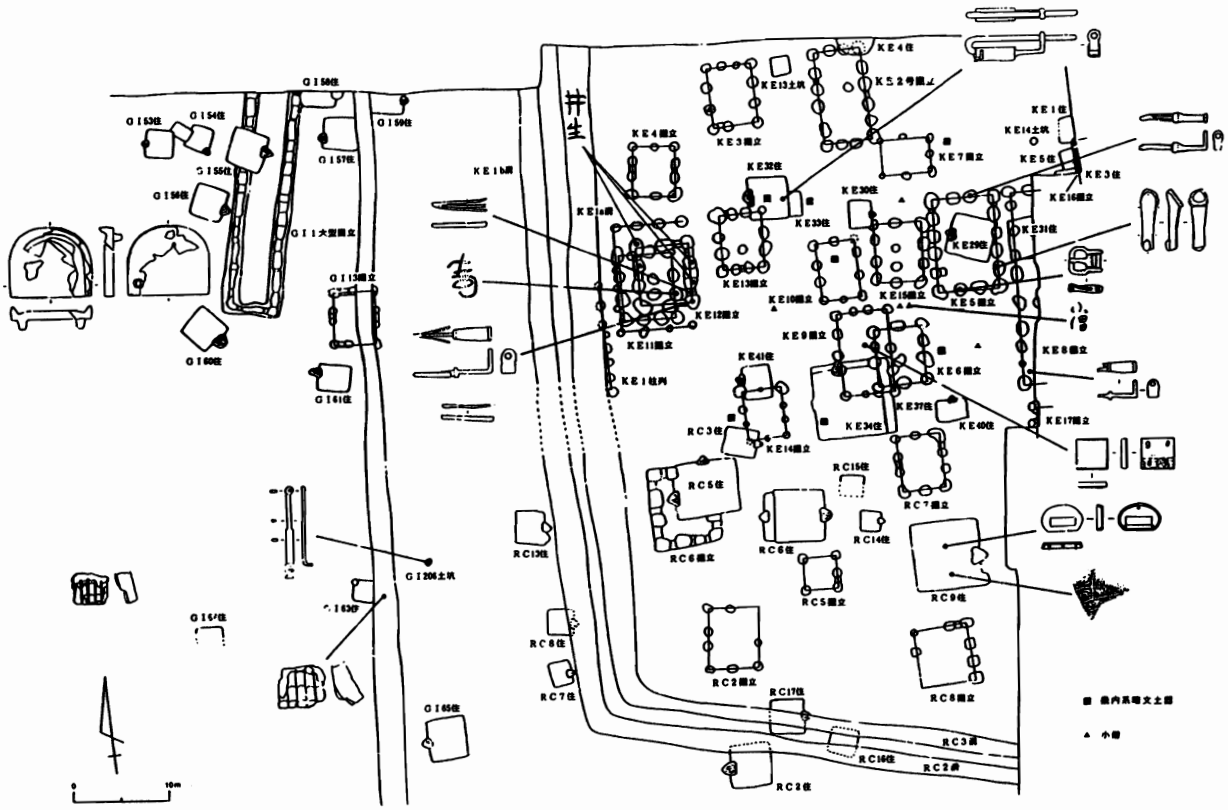
東耕地遺跡

図2



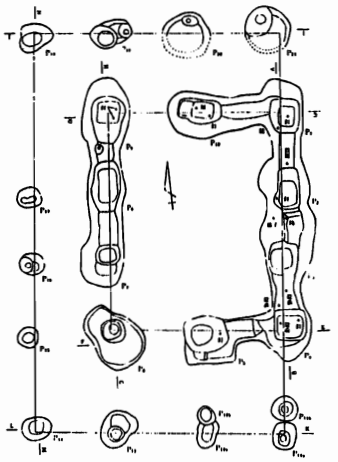
薮根不動原遺跡B地区
掘立柱建物跡群

薮根不動原遺跡A地区
掘立柱建物跡群

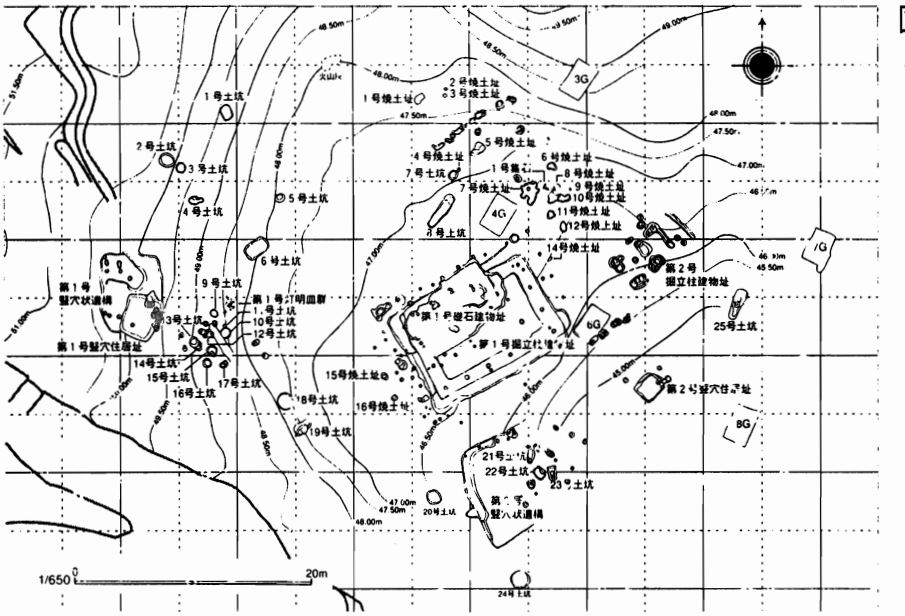


本郷遺跡KE・RC地区掘立柱建物跡群

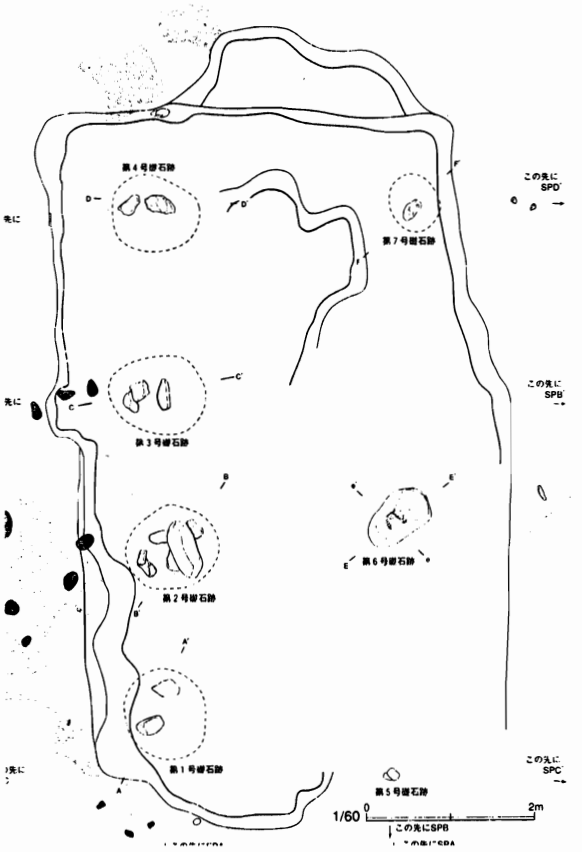
図 3



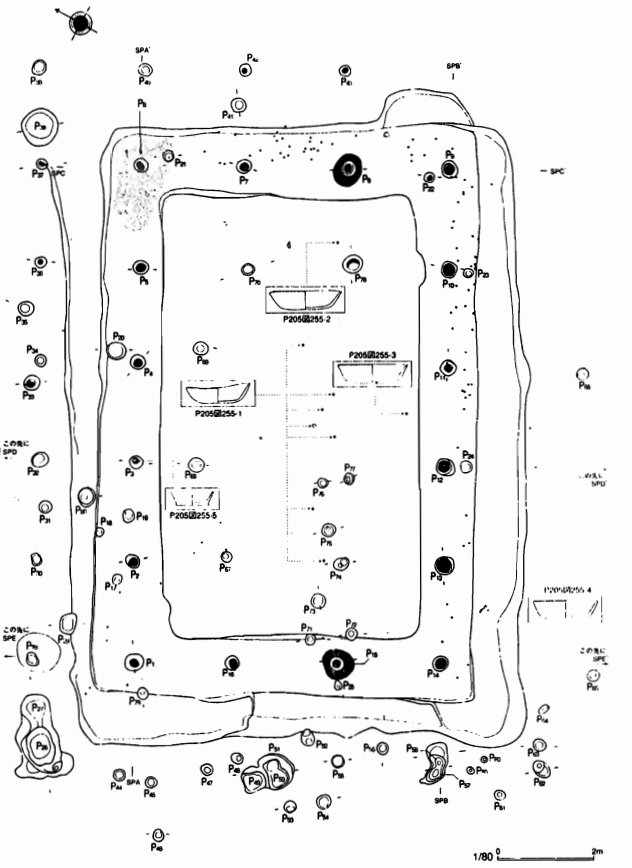
本郷遺跡ＫＥ
11号掘立柱建物跡



愛名宮地遺跡

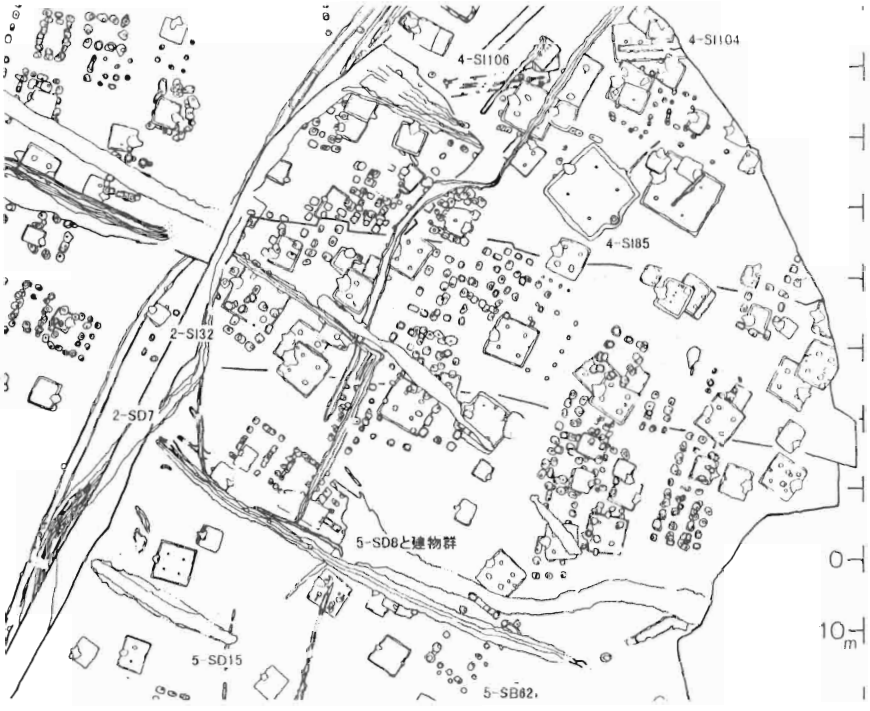


愛名宮地遺跡１号礎石建物跡

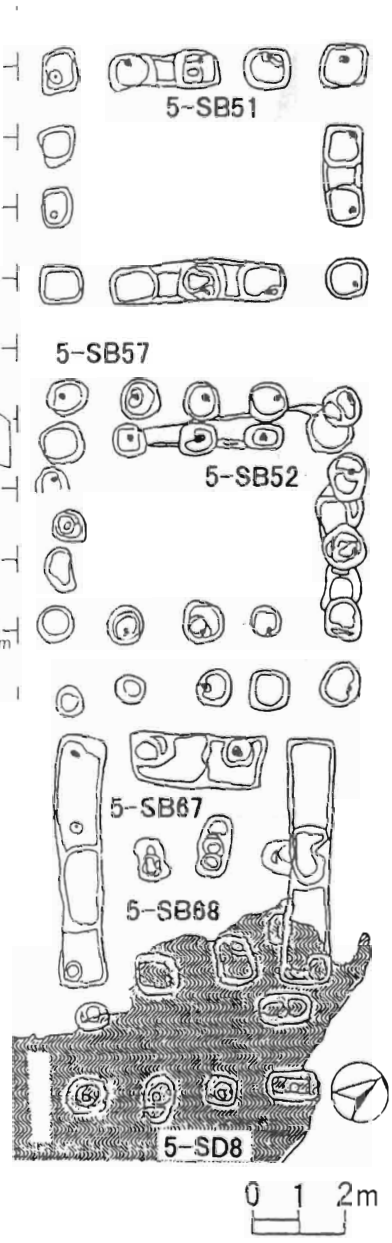


愛名宮地遺跡１号掘立柱建物跡

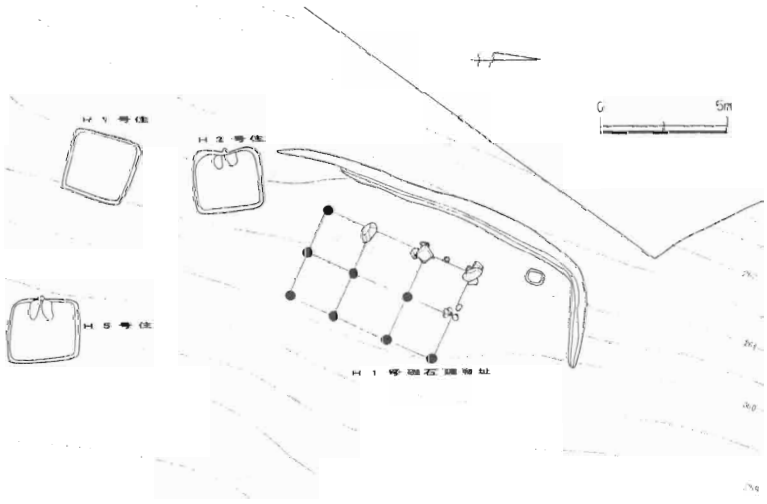
図4



南鍛冶山遺跡

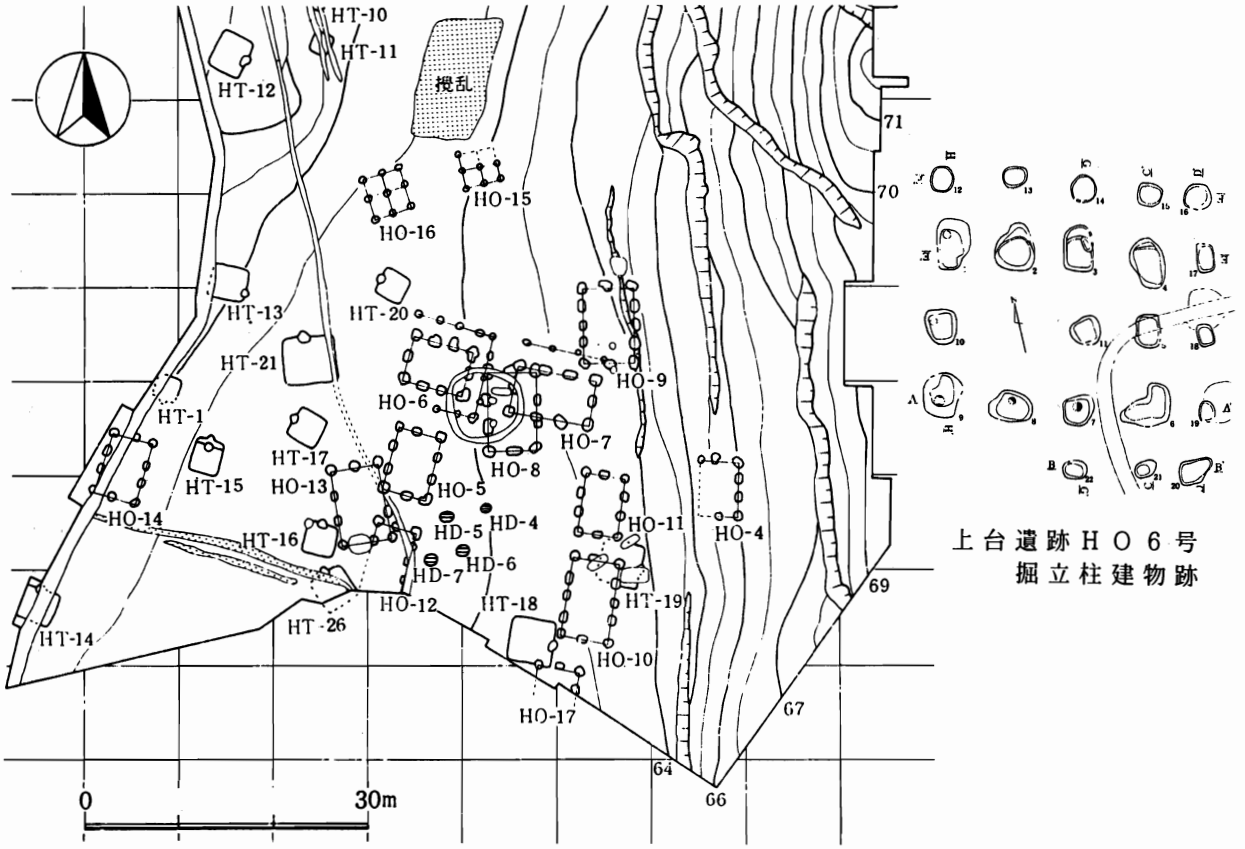


南鍛冶山遺跡掘立柱建物跡群



馬場遺跡1号礎石建物跡

図5



山口台遺跡群　上台遺跡

上台遺跡ＨＯ６号
掘立柱建物跡

後山田南遺跡第２地点